

も同一思潮は、兩國に於て各異なる方向を取れり。佛蘭西革命は、社會の外界即ち人事界に激烈の變動を起したり。然るに獨逸の革新思潮は、社會の内面即ち精神界を動搖せしめ、國民の心性生活に、清新の活力を附與せり。佛國革命は、國家の轉覆、社會の破壊なりき。之に反して、獨逸の革新思潮は、破壊的にあらずして、建設的なり。沈滯せる精神界を一掃して、文學上古今無比の精華を産出し、雄渾壯麗なる詩歌の勃興となれり。

此時代は、革進運動の率先者クリンゲルの戯曲『激動及突進』(シュツルム、ウント、ドラング)の名により、一般に『シュツルム、ウント、ドラングツァイト』と稱せられ、此時代の詩人を呼んで『激動突進者』(シチュルメル、ウント、ドレングル)と云ふ。謂ふに『激動突進』とは、大抱負を持せる青年詩人の活動の狀態より、命名したるものにして、此等の青年が法則を學ばず、形式を意とせず、自ら任じて天才となし、自然の眞理を傳へんとしたる意氣込より云ふ時は、天才時代と稱するを得べし。

年代より云へば、天才時代とは、ヘルデルの『獨逸文學に關する論文』の

出でし千七百六十七年に始まり、シルレルの戯曲『ドン・カルロス』の出でし千七百八十七年に終る。即ち千七百七十年代より、千七百八十年代迄なり。

天才時代の青年文士として數ふ可きは、ヘルデルを始めとし、レンツ、クリンゲル、シーバルト、ラバーテル、ミルレル、ゲーテ。最後にシルレルなり。先づ革新を唱へ、奇矯を以て時流に抜んでし此等詩人の多數は、蓬髮垢衣得々として市街を横行し、狂亂を好み、痴態を演じ、一切の學問智識を斥け、善惡邪正の別なく、萬物を打破せんとしたり。レンツは、露都モスコに狂死し、シーバルトは、十年の久しき囹圄の人となれり。ジアン、パウルは云へり、此等の青年文士は、大學圖書館に、一步を踏み入るゝも、罪を犯すとなし、双眼熱涙を浮べて、筆を執れば、嘲罵の文を草し、街道を過ぐる時は杖を振うて、人を亂打し敢て意とせず、而して彼等は多く失意の境遇に終れりと。

ハーマンの教を受けしヘルデルは、『詩歌は人類の母語なり』と云へる

## 第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クウンテスマス及びロマンテイススマス。千七百四十八年より千七百四十八年迄) ○クウンテスマス。第六章 天才時代。

師の言を奉じ、詩歌と言語とは、根底に於て密接の關係ありとなして曰はく、詩歌に用ゐたる最初の言語は何なりしか、耳を傾けて聴け、自然に聲なきか、響なきか、此聲此響を傳へたるもの、即ち詩歌なりしなり、然るに時の變移と共に、人は自然に遠ざかり、言語は散文の用をなすに至れり、天籟を傳へし詩歌の言語は、美を主とせり、されど理論の正確を重ねずる散文に於ては、言語の美は、漸次消却せりと。

かのゴットシエッド一聲の徒は、詩歌に適法合式を主張して、詩歌の自由發展を妨げたり。されど試に見よ、黄金は地上に露出せずして、深く地中に藏せらる。詩人は、言語の形式に美を求めずして、其想の美を求む可きなり。天然を離れず、自然に近づくに於て、詩歌は、其極致に到達す可きなり。モゼス、オッシアン、ホメールは、天然の産兒なり、故に其詩は、萬古の絶吟なり。詩歌は學んで得可きものにあらず、詩人が賦與されたる自然の賜にして、詩人の想像中に存す。世に大詩人と稱せらるゝは、其獨創の詩才を發揮したるものなり。古に於てソフオクレス、エシロス、近世に於てシェー

クスピアは大詩人なり。

シェイクスピアが劇詩の帝たらば、オッシアンは歌謡の王なり、オッシアンは此時代に於てシェイクスピアに次いで最も尊崇されたり。

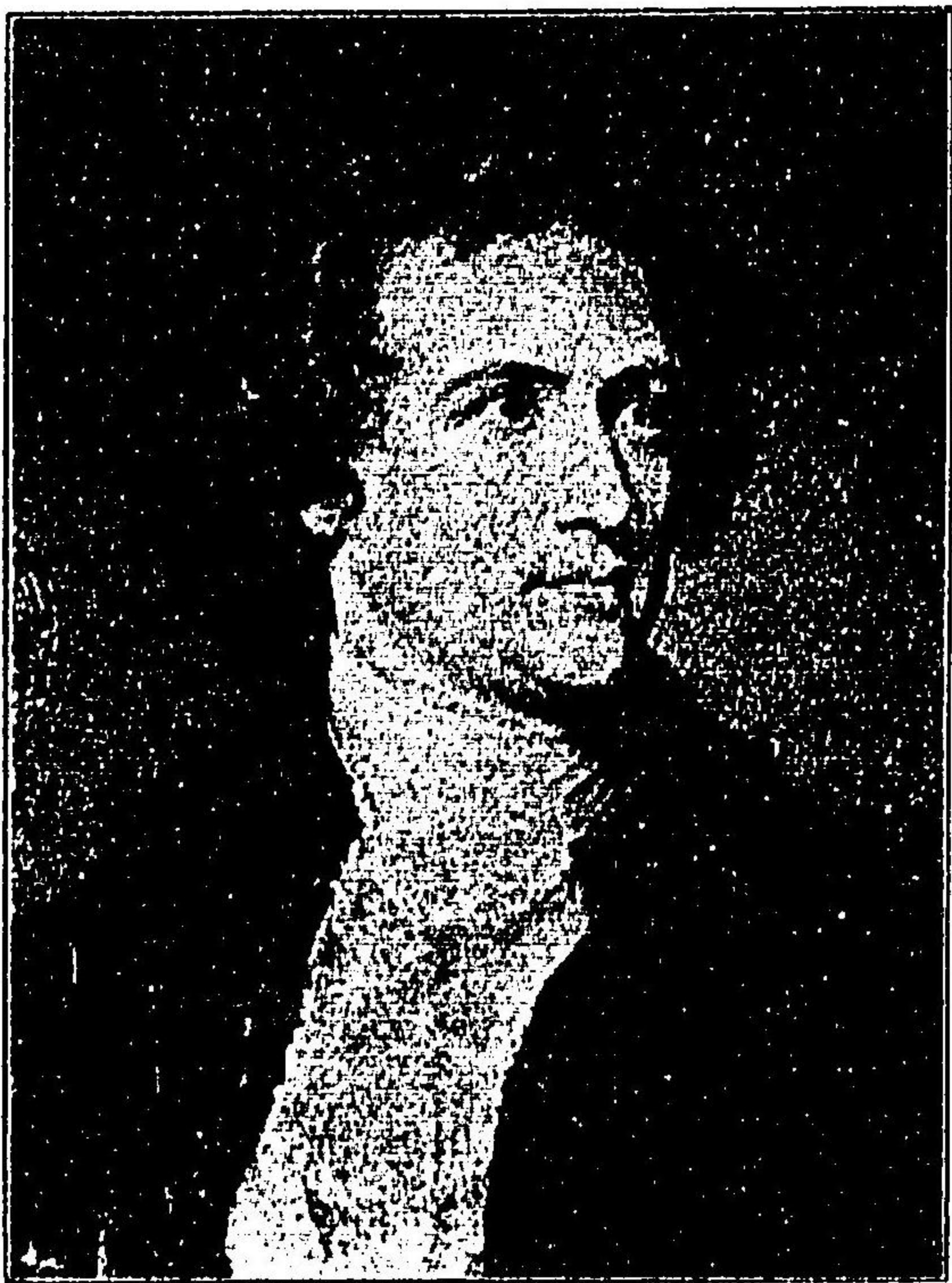
革新文學の思潮は、かくの如くして、隆盛を極めたり。此時に當り、年齒僅かに二十六、而して能く時代の傾向を利用し、文壇の渦中に卓立して、首領と仰がれしは、ゲーテなり。ゲーテは實にクロップシュトック、フンケルマン、ハーマン、ヘルデル等が研究したる學說の精を集め、萃を抜き、之を同化して、更に一段の光輝を發揚したるなり。

さて此時代には、一方に英氣鬱勃たる氣風と、他方に熱感熱情溢れんとする風あり、これ此時代の二大傾向なり。之をゲーテの作に見るに、ゲッが武士道の衰頹を慨嘆して、之を挽回せんとして、蠻力を振ひ、抑壓を排し、新社會の惡弊を一掃せんとする意氣の盛なる、エルテルがロッテに戀々として、熱情に驅られ、終に一身を擲て、其恨綿々として盡さざる婦人の情を有せる、天才時代作品の双壁と云ふ可し。シルレルの作『ロイベ

ル』『フィエスコ』及び『カパーレ、ウント、ソールベ』等又激動突進の意氣盛なる  
を見るなり。

第七章 ゲーテ。

キーランド嘗て當代の偉人を評して曰へることあり。クロップシュトック  
は大詩人なり、ヘルデルは大儒者なり、ラファエーテルは、真正の耶蘇教徒な  
り、ゲーテは、人類中の最も偉大なるものなり、而して世人真にゲーテを  
知るもの甚だ罕なりと。世を嘲り人を罵り、唯我獨尊の振舞ありたるハ  
イチも、ゲーテの偉大なるには、深く感嘆せり。或人ハイチに、『ゲーテは何  
人ぞ』と問へる時、ハイチは、平素の驕慢なるに似ず、直に反問して曰はく、  
『世界は何物ぞ』汝若し我に、世界が何物たるかを答へなば、我はゲーテの  
何人なるかを語らんと。蓋しハイチは、ゲーテを見ることが、世界の如く大  
なりしなり。聞くシェイクスピアの事蹟は、湮滅して、知られず、然るにゲー  
テを傳せんとするものは、材料の無盡藏なるに驚くと。キーランド驚嘆  
し、ハイチすら自遜して容易に品評を下さず、泰西の傳者をして、嘆息せ

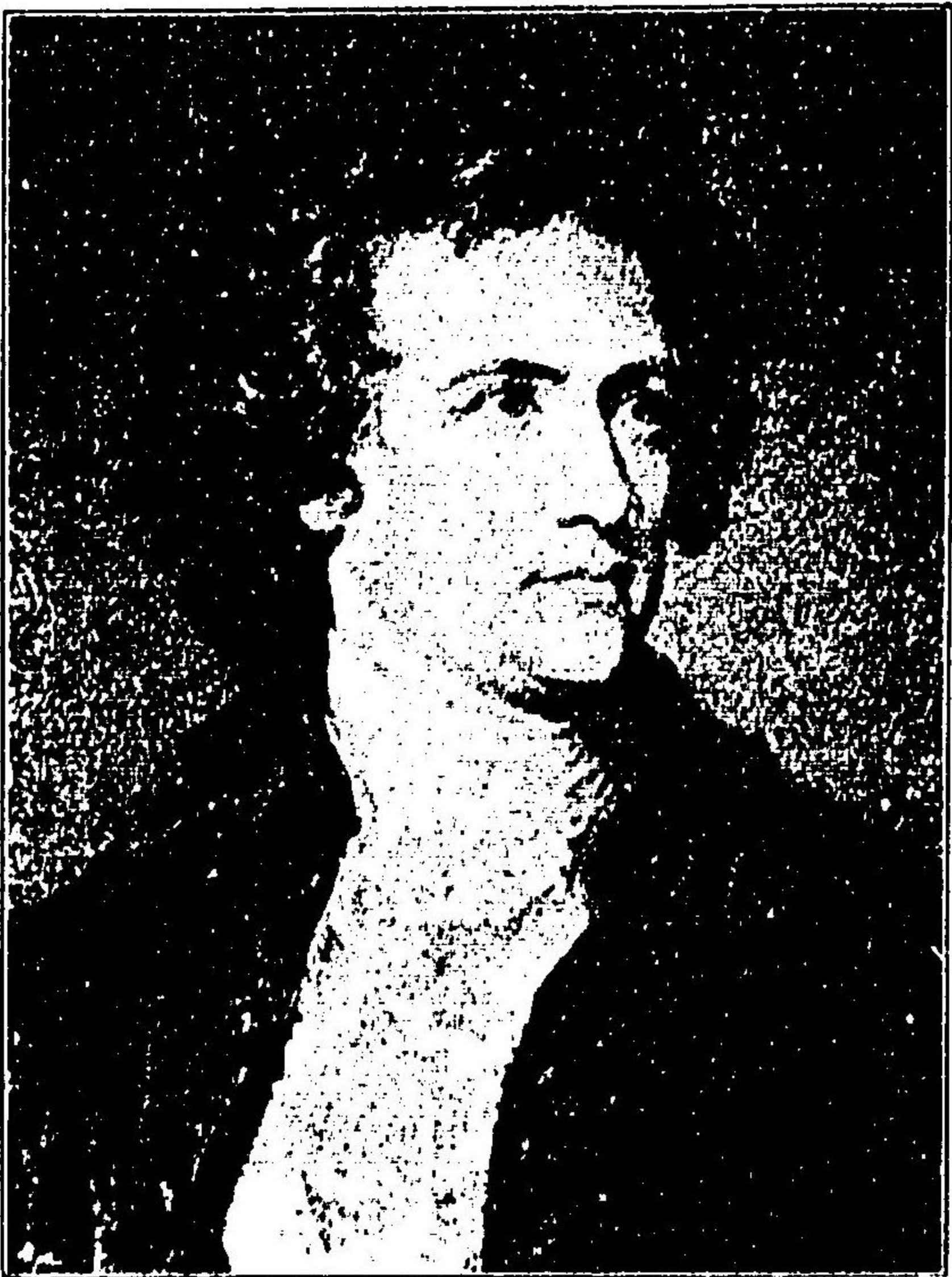


青年のゲーテ

ル』『フィエスコ』及び『カバール、ウント、リール』等又激動突進の意氣盛なるを見るなり。

第七章 ゲーテ。

キーランド嘗て當代の偉人を評して曰へることあり。クロップシュトックは大詩人なり、ヘルデルは大儒者なり、ラファエルは、真正の耶蘇教徒なり、ゲーテは、人類中の最も偉大なるものなり、而して世人眞にゲーテを知るもの甚だ罕なりと、世を嘲り人を罵り、唯我獨尊の振舞ありたるハイテも、ゲーテの偉大なるには、深く感嘆せり。或人ハイテに、『ゲーテは何人ぞ』と問へる時、ハイテは、平素の驕慢なるに似ず、直に反問して曰はく、『世界は何物ぞ』汝若し我に、世界が何物たるかを答へなば、我はゲーテの何人なるかを語らんと、蓋しハイテは、ゲーテを見ること、世界の如く大なりしなり、聞くシェークスピアの事蹟は、湮滅して、知られず、然るにゲーテを傳せんとするものは、材料の無盡藏なるに驚くと、キーランド驚嘆し、ハイテすら自選して容易に品評を下さず、泰西の偉者をして、嘆息せ



青年のゲーテ

しむゲーテは孰れの點より見るも偉大なり。

今茲に、此偉大なるゲーテの生涯を述べ、其作を批評せんとす、盲者蛇の怯ぢざるの譏は、固より甘んじて受く可し。

ゲーテの社會生活と心性生活とは、互に相離れざる關係を有す、此兩方面より見て、ゲーテの全生涯を五期に分かたんとす。

第一期 幼年時代 (千七百四十九年—千七百七十年)

第二期 青年時代 (千七百七十年—千七百八十六年)

第三期 成熟時代 (千七百八十六年—千七百九十四年)

第四期 シルレルとの親交時代 (千七百九十四年—千八百五年)

第五期 詩人の晩年 (千八百五年—千八百三十二年)

泰西の傳者或は四期に分ち、或は六期に分ち、各相異なれり、今之を五期に分ちたるは、社會生活と心性生活との一致の點より見たるなり。即ち第一期は、ゲーテが家庭に教育を受けて、後萊府大學に入り、天才主義の狂瀾怒濤中に入りし迄の間なり、第二期は天才主義の思潮に

乗じて、無法則、無形式を唱道し、大に詩才を發揮したる時代にして、或批評家の如きは、此時代の作を、ゲーテ詩才の絶頂に達したるものなりと云へり。第三期は、ゲーテの生活に最も著るしき影響を及ぼしたる時代なり。ゲーテは、千七百八十六年より八十八年迄伊太利に旅行せり。多感なる青年詩人は、ヴェテ、カン宮の希臘彫刻、シ、リ、島の山紫水明の景に接し、豪放の氣忽ち去つて、古希の文化を追慕するの念禁ずる能はず。癡きに濁浪空を排せんとせしゲーテの胸中は、今や長煙一空の觀あるに至れり。丘上に古色を帯びて累々たる墓を渡る南風は、薔薇の香の薫ずるが如く、雨雲のアルプスの山を越え行くを見ては、北の空の悲しく霧深かきを思ひ出し、ゲーテは、愈伊太利の地を去り難くなりぬ。

ゲーテは、陶然として天然の美景、古希の美術に酔へり、而して此思想は其作品に反映したり。伊太利旅行中に成りし「エグモン」ト、「イフイグーニエ」の二詩と、第二期天才時代の作「エルテル」ト、「グッツ」の二作とを對照せば、思想の變遷は、明らかに指隨するを得るなり。伊太利より歸りし年々

ゲーテは、シルレルと會したり。兩人親交の時代は、第四期にして、千七百九十四年イエーナ市の博物學會に會合せし後、ゲーテは、シルレルの人物に感じ、互に相尊敬し、無二の親友となれり。兩詩人を親密ならしめたる結果は文學上にクラシチスムスとなつて現はれたり。美によりて眞善の域に達し、美術を以て、世道人心を啓發せんとしたる兩詩人の理想は、萬丈の光彩を放ち、茲に獨逸文學は、世界に向つて誇稱するに足るに至れり。第五期は、シルレルの死後なり。シルレルは、ゲーテ唯一の友にして、兩詩人の交遊は、實に千載の一遇なり、而して一朝幽明相距つるに至る。ゲーテは、深くシルレルの死を悼み、孤獨の感に堪へず、余生を自傳「ディヒツング」ウント「ワールハイト」及び劇詩「ファウスト」等の著作に送りたり。

第一期 幼年時代(千七百四十九年—千七百七十年)

千七百四十九年八月廿八日フランクフルト、アム、マイン市の午鐘十二を報ず(1) ヨハン、バルフガング、フォン、ゲーテは、此響と共に世に生まる。父ヨハン、カスバル、ゲーテは、裁判官にして、頗る嚴格なる人なり。母は

## 1. Johann Wolfgang von Goethe.

### 第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラシチスムス及びロマンチスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。)クラシチスムス。第七章、ゲーテ。

カタリーナ、エリザベート、テクストルと云ひ、性質洒落にして、温雅なり。父と母との年齢の差二十一、夫カスバルは妻エリザベートを見ること、子の如くなりしと云ふ。詩人ゲーテは、此間に擧げられし長男にして、幼時父の家に在りて、慈母に撫育されたり。ゲーテには、一人の愛妹コルネリアありしのみにて、他は多く蚤世したり。歴史上著名なる國都に生まれ、然かも富裕なる家に成長せしゲーテこそ、世の所謂大幸運兒なれ。古來有名なるフランクフルトの地は、見る物聞く物一として、少年の氣を勵まざるなく、ゲーテは幼心に様々の空想を浮べ、早くより詩歌を好み、又見聞せし事柄は、悉く書冊に記し置くの性ありき。『ヘルレンフェルト、クリステイ』は、幼時の作なり。

七年戦争の折、佛軍フランクフルトを占領し、ゲーテ住家の一部は、佛軍の士官トライン伯の宿泊所となれり。トライン伯は、美術を好み、文學を愛したる人にして、家婦エリザベートと、談笑の間に、幼兒ゲーテを教化したること多かりき。此頃ゲーテは、佛蘭西の芝居を見て、演劇の趣味

感じたり。

千七百六十四年ヨゼーフ二世皇帝の選舉及び即位式行はる。當時ゲーテは、僅かに十五歳の小童にして、華麗なる祝典の儀式を見て、大に喜びし事は自傳『デイヒツング、ウント、ワールハイト』中に詳かなり。翌年ゲーテは、晩年の大傑作『ファウスト』中に永久の名を傳ふる少女グレーチェンに戀慕せり。これゲーテの初戀なり。千七百六十五年の秋ゲーテは、萊府大學に入る。父の望に従ひて、法律を學べり。されど法律の講義は、更に興味を感ぜずして、文學を學ばんとし、就中詩歌に専心一意なりき。

玉も磨かざれば光を放たず、故郷を出て、學者、詩人の淵藪たる萊府に來りては、天才ゲーテも、自己の才徳欠けたるを感ぜり。纏へる衣服は、古風にして、大都會の流行に後れ、故郷の方言は、萊府語の如く流暢なる能はず。舊作の詩歌又誦するに足らざるを知れり。教授ケルレルトの講義を聞くに及んで、一朝感ずる所あり、意を決して、舊作の詩歌の大半を焼き棄てたり。此後ゲーテは、リンデナウ伯の待從ペーリヒと交はり、交

際社會に出入し、大都會日常の禮法及び習俗を學べり、かくする間に、ゲーテは料理屋の娘にて、三才年長のアンナ、カタリーナ、シェーンコップの端麗なる容姿を見て、深かき思をかけたなり、されど嫉妬心の爲に、此愛情は、永續せざりき、千七百六十七年に成りし劇詩「*デイ、ラウツァ、デス、フェルリール*」は、シェーンコップとの關係を叙するものにして、嫉妬心によりて破れし愛情は、此作の出づる動機となれり、喜劇「*デイ、ミット、シェール、デイゲン*」は、家庭の風儀を紊亂したる罪の懺悔なり、二作共に佛の詩形アレキサンドロ・テールにて書けり。

萊府滞在中、ゲーテは劇場に入ると共に、美術學校長エーゼルの美術史を聽講し、傍らカンケルマンの美術論、レッシングのラオコオン論等を研究し、又ドレスデンの美術館に行き、古代の彫刻を賞玩して、清新なる趣味の養成をなせり。

ゲーテは、内に感じたる事は、悉く之を外に現はさざればやまず、煩悶痛苦は、忽ち詩歌となつて現はれ、以て胸中の鬱を散じたり、さればゲー

テは、其作を「大なる懺悔の断片」なりと云へり。

ゲーテは、萊府に於て、放逸の生活を送り、終に病となり、千七百六十八年八月の末、故郷フランクフルトに歸り、父の家において保養せしが、病中母の友達にて熱心なる耶蘇教信者クレッテンブルグ嬢により、宗教思想を傳へられたり。

### 第二期 青年時代 (千七百七十年—千七百八十六年)

病癒えて健康となり、青年の活氣盛んとなりしかば、ゲーテは、千七百七十年の春、父の意に従ひ、法律修業を終へんとて、シュトラースブルグに行けり、ゲーテは、此地に來りても、前年萊府大學に來りし時と全じく、法律に心を注ぐ能はずして、傍ら醫學及び博物學を修めたり、而して食卓を共にせし友人にては、醫學生最も多かりき、當時の友人にて名聞ゆるは、レントツ、レルゼ及びユング、ステイルリング等なり。

シュトラースブルグに於て、ゲーテの將來に大影響を與へしは、ヘルデルとの交際なりき、これヘルデルの傳記中に略述したる所にして、當時

### 第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウシテスマス及びロマンタイスマス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラウシテスマス、第七卷、ゲーテ。



五才の年長者たるヘルデルは、處生の經驗學術の發達遙かにゲーテに超えしかば、ヘルデルの教化は、ゲーテの精神及び品性の發展に、著るべき威化を及ぼしたり。ゲーテは、詩歌は天より世界人民に賦與されたるものにして、二三詩人の獨占すべきものにあらざることを教へしは、ヘルデルなり。ゲーテが俗語、ヘブレイの詩歌、ホメール及びオッシアンの詩、シェークスピアの劇詩、ゴールドスミスの『ギーカー、オフ、エーク、フィールド』等を研鑽せしは、又一にヘルデルの指導によれり。オッシアンの詩『セルマ』は、ゲーテ自ら翻譯して、『エルテルス、ライデン』中に加へたり。

ゴールドスミスが描がける如き樂しき家庭生活は、牧師ブリオン、ブオンゼンハイムの家に於て、ゲーテ自から親しく經驗せり。而して牧師の娘フリーデリケとの關係は、忽ち數篇の抒情詩となれり。『歡迎と告別』『イルコムメン、ウント、アプシード』、『五月歌』『マイリード』等は、燃ゆる思に充てり。

元來ゲーテは、ゴシック建築の長所を認めしが、一たび古獨逸式のシート

ラーヌブルグ寺院の建築を見て、大に感嘆し、『獨逸建築術に就いて』の論文を草したり。ゲーテは、大學にて法律の學位を得て、暫時故郷に歸り、嘗て萊府にて相知りし友人シロツセルに再會せり。ダルムシュタットに於て、知己となりし軍法會議員メルクは、文學の嗜好ありて、鋭くゲーテの作を批評し、ゲーテに才氣に馳せずして、詩才の圓滿なる熟達を期せんことを勸告せり。

千七百七十二年の春ゲーテは、獨逸國法及び民法を修業せんとして、エツラールに赴けり。而して國立高等法院に在つて學ぶこと四ヶ月余なりき。全年六月に至り、ゲーテは、シャロツテ、ブッフと云へる婦人に思を焦がし、そが爲めに生命を擲たんとせり。シャロツテには、既に許嫁せし夫なるブレーメンの公使館書記官ケストナルあり、將に一大紛擾起らんとせしが、九月に至り、ゲーテは、危難を避けて、エツラールの地を去りしかば、事なくしてやみぬ。此頃ゲーテの友人エルサレムは、友人の妻に懸想して、其思遂げられず、失戀の結果精神錯亂して、短銃を以て自殺したり。千七

百七十四年書簡牒の小説として現はれし「エルテルス、ライデン」は、ゲーテが自己の心中の煩悶と、友人エルサルムの境遇とを結合して作りたるものなり。

此小説に先つこと、一年レッシングの「エミリア、ガロッティ」に後るゝ、一年即ち千七百七十三年劇詩「ゲッツ、フォン、ベルリッヒンゲン」出づ。此作は小説「エルテルス、ライデン」と相並んで、ゲーテの名聲を轟かすものなり。

ゲーテが「ファウスト」に始めて筆を染めしは、千七百七十四年及び七十五年の交にして、之を「原初ファウスト」(イ) (ツルファウスト)と稱す。ゲーテは、千七百七十四年の夏二人の友ラファエル及びバゼドーと共に、舟を浮べてライン川を下り、兩岸の絶景を賞したり、此旅行を名づけて「天才遊航」と云ふ。

翌千七百七十五年及び七十六年相續いて「ゲッツ」「エルテル」の遺響を傳へたる二悲劇「クラギー、ゴ」及「ステラ」出づ。ゲーテが當年十七才なる絶世の美人エリザベート、シローテマン、通稱(リリー)に心を傾けしは、又

此年なり。リリーに對する熱情は、忽ち「新たなる愛、新なる命」(ノイエ、リベ、ノイエス、レイベン)、「湖上」(アウフ、デム、ゼー)「單花」(ダス、ファイルヘン)「獵夫の晩歌」(エーゲルス、アーベンドリード)等の歌となつて燃え上がれり。全年五月ゲーテは、シトルベルグ伯と共に、瑞西に旅行せり。峻嶺に横はれる雲は、詩人の空想を高め、山間に鏡面を開ける湖は、詩人の錦腸を洗ひ、詩想頓に湧けり。一夜舟をテューリッホ湖上に泛べて、山間の明月に吟じ、江上の清風に嘯き、美人(リリー)を天の一方に望み、感極まり、情動いて、先きに擧げし「湖上」の名吟となれり。

此頃ゲーテは、レンツ、クリンゲル等との友情日に厚く、クロツプシュトックと相知り、哲學者ヤコービと親密となれり。「プロメートイス」「マホメット」「デル、エーネゲ、ユーデ」等は、當時の作なり。

ワイマール公の太子カール、アウグストは、嘗てゲーテが、フランクフルトに在りし頃知遇を受けし人なりしが、ゲーテは、瑞西旅行の途次カールスルーへに於て、太子と再會し益親密となれり。然るに太子政權を

## 第四編

新南國連邦時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クウシチアス、ムス及びロマンチアス、ムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クウシチアス、ムス、第七卷、ゲーテ。

握るに至り、ゲーテは直ちに招聘に應じて、ワイマールに行くことゝなれり。劇詩『エグモント』に筆を執り始めしは、此頃なり。

千七百七十五年十一月七日ゲーテは、ワイマールに入る。王者の賓となつて優遇を受け、公爵の母堂アマリーリエ、新君主カール、アウグスト公及び其後ルイーゼの尊崇一方ならず、母堂アマリーリエは、文學を好み、美術を愛し、兼ねて王孫の教育に熱心なる婦人にして、キーランド、カール、ルードホヒ、フォン、クテーベル等の如き文學者をも招聘し、共に風流閑雅の遊をなせり。キーランドは、ゲーテの著後三日を経て、一友に書を贈りて、『余は、ゲーテに接して、朝露の日光を受けし心地す』と云へり。かくの如くにして、ワイマールの宮殿は、上はアマリーリエより、下は侍従秘書官等に至る迄詩歌の技に長じ、管絃の道に秀てたり。女子にて宮中に仕へしは、歌ひ女コローナ、シュレーテル及び主馬頭シュタインの妻にてアマリーリエの侍姫となりしシャロット、フォン、シュタインなり。シャロットは、教育ある婦人にして文學思想を有し、ゲーテを輔導したること大なり。ゲーテは夥多

の婦人と交はり、而して交遊する所多きに從つて、得る所益多かりき。就中シャロットの如きは、ゲーテの詩才を圓満に熟達せしむる事に於て、大なる感化力を有したり。千七百七十六年に至り、ヘルデルも招かれて、ワイマールに來れり。茲に於てワイマールは、一時詩人の淵藪となれり。

ゲーテは、君主カール、アウグストの師友となり、始めは賓客を以て遇せられしが、親胤日に増し、ワイマールに來りし翌年六月十一日に至り、公使館書記官の名譽職に任ぜられ、且つ政治に容喙するの實權を與へられたり。遂に公爵の推選により、皇帝ヨゼーフ二世より貴族に列せられ、爵を授かれり。ゲーテは、國務に參與しても、嘗て詩歌を廢せざりしが、シュトラースブルグ時代の豪放の氣は、宮中閑雅の儀式に慣れ、且つは、シャロット、フォン、シュタインの指導を受けて、漸次其圭角を去れり。

千七百七十六年に成りし劇詩『ディゲシュホステル』は、シャロットとの交情を描がけるものにして、翌年の作『リラ』は、公爵夫人ルイーゼの淑徳を賞し、越えて數年千七百八十三年に作りし歌『イルメナウ』は、公爵のカール、ア

ウグストの仁徳を頌したるものなり。千七百七十九年ゲーテは、カール、アウグストに随従して、第二回の瑞西旅行をなし、雄大なる天然の美に接して、精神の修養をなせり。

ゲーテが、ワイマールに入りし最初の年として、其名既に著るしき千七百七十五年は、又詩人の第一バラード製作の時代として、其名高し。此年より千七百八十六年迄の間に成りし詩中の帝歌中の王と呼ばるゝは、『漁夫』、『デル、フィッセル』、『魔王』、『エルルケーニヒ』、『歌人』、『デル、ゼンゲル』等なり。其他『月』、『アン、デン、モンド』、『ミニオン』、『ハルフテル』、『ワンデルス、ナハトリード』等吟誦す可きもの多し。『ハンス、ザックセンス、ボエティッシー、ゼンツング』と云へる歌は、かのマイステルゼンゲルとして名高きハンス、ザックスの功績を賞したるものなり。ゲーテは、久しく廢棄されしハンス、ザックスの詩形を襲用して、數篇の作を試みしが、靈妙の筆致は、能く此詩形に清新の調を與へたり。

千七百七十七年の冬ゲーテは、ハルツ山に旅行し、『ハルツライゼ』の詩

成れり。ゲーテ詩集の巻頭に掲げらるゝ、『ツィアイグスング』は、伊太利旅行に先つて既に出てしなり。

### 第三期 成熟時代 (千七百八十六年—千七百九十四年)

千七百八十六年九月三日ゲーテは、温泉場カールスバードを發し、バイエルン、テ、ロールを過ぎて、伊太利旅行の途に上り、十月廿九日羅馬府に到着したり。茲に於てゲーテは、三十年來の宿志を遂げ、古代の美術、彫刻に人工の美を賞し、チアーベル、シチーリエンの山水に自然の詩趣を探ぐり、超えて一年千七百八十八年六月十八日ワイマールに歸る。

故國を去つて、南方の樂園に入り、二年の春秋を伊太利に送りしゲーテは、精神上偉大なる感化を受け、思想の一大轉回をなせり。ゲーテ嘗てシトラー、スブルグに在るや、レンツ、シューバルト等を無二の友として、天才主義を唱へ、放態度なく、日夜逸樂饗宴に耽り、或時は、豪放氣宇天を貫かんとするゲツとなり、又或時は戀々として多情なるエルテルとなり、心中は宛ながら早瀬の水の如く、岩に激し、石に觸れ、轉變極りなく、片

#### 第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クリシチヤニスムス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クリシチヤニスムス、第七卷、ゲーテ。

ii. Italienische Reise.  
A. Römische Elegien.

時も静止することなかりき。傍より之を見る時は、恰かも神経過敏なる婦人の如く、又沈鬱病に罹かれる青年に異ならず。此儘にして一生を終らば、大天才ゲーテも、或はクリンゲル、レンツ等と同じく自稱天才を以て終りしやも知れず。されどゲーテは、ワーマールに來り、カール、アウグスト宮裏の人となりてより、往時の狂態漸く去り、高雅なる生活に慣れ始たり。此時に當りゲーテは、南方の空なつかしく、遂に伊太利に赴けり。伊太利旅行は、ゲーテの復活なり。此世を憂世と慨き、苦界と嘆じたる憂鬱病者は、頓に快活となり、嬰兒の如く無邪氣となり、古代の希臘を理想となし、人道主義を欽慕するに至れり。伊太利よりワイマールに歸り、三月を経て、九月七日ゲーテは、ルードルシュタットに於て、始めて、シルレルに會せり。されど尙深かき交を結ぶに至らず。

伊太利の秀麗優美の風光を記したる紀行文(ロ)「イタリエーニツシエー、ライゼ」及び嘗ては友として交はり、シルレル死後の翌年には親しき契を結びたるクリステアチ、ウルピウスに事寄せて、南方の樂園を慕ふ

ii. Faust als Fragment.  
A. Venecianische Epigramme.  
A. Campagne in Frankreich.

の情を歌へる(ハ)「レーミツシエー、エレーギエン」等は、伊太利の天地が、ゲーテに與へし獨逸への土産なりき。

伊太利旅行中ゲーテは、二劇詩を書けり。此二作は、ゲーテ思想の大轉回を證するものとして特に名あり。千七百八十七年正月劇詩「イフゲーニエ」の作韻文を以て成れり。此曲は嘗てワイマールに在りし頃既に散文にて書きしなり。他の一は「エグモント」曲にして、「イフゲーニエ」と全年に成れり。此曲も、フランクフルトに在りし頃第一齣成り、旅行前殆んど完成せしなり。伊太利より歸りし翌年千七百八十九年「タツソー」曲出で、其翌年「断片のファウスト」(ニ)「ファウスト、アルス、フラグメント」成れり。全年ゲーテは公爵の母堂アマールリエを迎へんとて、ベチーデヒに行き(ホ)「エチアーニツシエー、エビグラムメ」の詩を作れり。

千七百九十二年ゲーテは、カール、アウグスト公の部下となり、普魯西軍に従ひ、佛國境に陣營生活を送りたり。當時の状況は、(ヘ)「カムパニエ、イン、フランクライヒ」中に詳なり。翌年愈佛國革命の大擾亂破裂したり。俗

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウシテス、ムス及びロマンテイス、ムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。)○クラウシテス、ムス。第七卷、ゲーテ。

事に奔走し、詩歌に熱中せし時に在りても、ゲーテは、カントの「判断力の批判」及び光學、色學、植物學等の研究を勵みたり。時間を徒費せずして、精勵刻苦せしは、到底常人の及ぶ能はざる所なり。

第四期 シルレルとの親交時代（千七百九十四年—千八百五年）

ゲーテは、千七百八十八年古希の文化に心酔して伊太利より歸る。さるに年少のシルレルが「ロイベル」、「カバレー、ウント、リーベ」等の新氣満々たる作を以て、獨逸文壇に謳歌さるゝを見て、頗る不安の念に堪へざりき。全年ルードルシュタットに於て、兩詩人の會合ありしも、未だ密接の關係を生ぜずしてやみぬ。かくて數年を過ぎ、二人は、千七百九十四年七月十四日イエーナの博物學會に於て、親しく談笑するの機會を得て、爾後交情は、日を追うて親密となり、獨逸文學史上に偉觀を呈するに至れり。兩詩人は、互に景慕し、書信の往復斷えざりき。ゲーテ、シルレル往復書簡集二卷あり、以て其友情の温かなるを知る可く、ゲーテとシルレルとの眞面目は、實に此飾らざる文章中に現はる。ゲーテがシルレルに與へし

書簡中に「君は我をして、再び詩人たらしめたり」の語あり、兩者の關係密なるは、此一語によりても明らかなり。越えて五年千七百九十九年に至り、シルレルは、居所をワイマールに移して、日夜ゲーテと來往し、交際愈親密となり、ワイマールは、茲に於てクラシチスムスの中心となれり。

兩詩人は、思想の交換をなさんことを努め、シルレル一詩成れば、先づゲーテに示さずしては、決して世に公にせず。ゲーテの一文又必ずシルレルの閲讀を経たり。かくの如くして、公平無私寸毫の遠慮もなく、互に其作を批評したり。されど互に詩才を競ふに當つては、敢て憚かる所なく、全力を注いで他を凌駕せんとせり。

兩虎鬪へば、生を共にせず、二傑は、共に朝に立たざるは、古今皆一なり。然るにゲーテとシルレルとは、等しく希世の偉人なるに其間一點の私情なく、猜忌心なく、互に敬愛尊崇せしは、空前にして、又絶後なる可し。由來文人は、狹量を以て、目せらる。ゲーテ、シルレルの雅量は、廣大なること、海洋の如し、誠に千古の美談なり。

三五六

ゲーテは、シルレルと交はりて、第二の花期に遇ひ、新たなる春を迎へたる感ありと云へり。兩詩人は互に談笑し、互に議論するを以て、満足せず、シルレルは雑誌(ト)『ホーレン』を發刊し、ゲーテに乞うて、共に筆を執ることとなれり。ゲーテは、先づ舊稿『レーミッシュ、エレイギエン』を投じて、紙面の景況を賑はせたり。『ホーレン』に續ひて、他に(チ)『ムーゼンアルマナハ』誌創刊さる。かく二雑誌を發刊したるは、公衆一般の文學趣味を養成し、其見解を高めんとしたるなり。されど結果は豫想と反し、凡庸駄作依然として、讀書界に歡迎されたり。茲に於て、兩詩人は相謀かり、讀者の沒趣味にして、思想の幼稚なるを筆誅せんと企てたり。ゲーテは、其發議者にして、先づ諷刺詩十二句を『ムーゼンアルマナハ』誌上に載せ、シルレル之に賛して、續々連載し、其句忽ちにして、百を以て數ふるに至れり。此等の詩句に題して、『客への進物』(リ) (クセーニエン)と云へり。此名の起因は、羅馬の諷刺詩家マルチアルが、詩集の第十三卷に名づけしによれり。此等の諷刺詩の攻撃の標的に立ちしは、ニコライが、主幹たりし『獨逸文

庫』(ヌ) (アルゲマイネ、ドイッチェ、ビブリオテーク及びワイセの『美文學新文庫』(ル) (ノイエー、ビブリオテーク、デル、シエーテン、ホツセンシャフテン)なり。『クセーニエン』出で、文海に波瀾を生じ、痛罵に遇ひて、憤怨せる文士等は、躍氣となり、盛んに對抗の氣焰を擧げたり。此爭論は、一時文壇に火花を咲かせしが、久しくして鎮靜したり。

千七百九十七年の春、叙事詩の傑作『ヘルマン、ウンント、ドロテア』出づ、これゲーテが大に得意とする作なり。此年は翌九十八年と相續いて、ゲーテの第二巴拉ード製作の時代として、殊に名あり。ゲーテの第一期の巴拉ード『漁夫』、『魔王』等が、抒情的なるに反して、第二期の作『シヤックレール』、『ブラウト、フォン、コリント』等が、叙事詩的、劇詩的なるは、シルレルの感化其重きをなせり。これゲーテの詩才發展に關して注目す可き事項なりとす。

當時シルレルも、競ひて巴拉ードを書けり、名作は多く、此二年間に出版たり。ゲーテの巴拉ードの名作にて、第二期に屬するもの多し、就中『デ

ル、ゴット、ウント、デイ、バヤデーレ』、『シャツツグレイベル』、『ブラウト、フン、コリ  
ント』、『ツァッベルレールリング』等名高かし。

大部の教育小説(オ) 『非ルヘルム、マイステルス、レールヤール』の成り  
しは、千七百九十六年にして、此作は、ゲーテが、二十年來著手したる書な  
り、最初六卷は、伊太利旅行に先つて、既に書き終りしものにして、全篇八  
卷より成る。

此小説は、主人公非ルヘルム、マイステル(ゲーテ自身の假の名が、親の  
家を出て、諸國を巡り、都會に遊び、村邑を過ぎて、新奇の事實を見、諸種  
の經驗をなしたることを書けるものなり、書中マリアンテ、バルバラ、フ  
リーチ、ラエルテス等の諸種の人物現はる。歌にて名高かきミニオン、ハ  
ルフテル等は、非ルヘルム、マイステルが、旅行中邂逅したる人物なり、故  
國を去つて、南獨逸に流浪せる可憐の伊太利少女ミニオン及び人倫の  
道を破り、不徳をなせし大罪を悔ゆる樂人(ハルフンシュビール)の境遇  
は、之を叙する文致頗る巧にして、讀者をして全情の感を引きしむ。

叙事詩『ヘルマン、ウント、ドロテア』を終りたる千七百九十七年ゲー

テは、第三回の瑞西旅行をなせり、旅中女俳優クリステア、アーチ、ノイマン  
の訃音を聞き、哀悼の歌を作れり、此歌を、『オイフロジイチ』と云ふ、ノイマ  
ンとは、當年十九才の美人にして、嘗てゲーテが、『シェークスピアの作』、『キ  
ング、ジーン』のアーサーの役を演じたる時、始めて共に舞臺に現はれて、大  
喝采を博し、爾後梨園の寵兒となれり、オイフロジイチとは、もと愛嬌の  
三女神の一の名にして、ゲーテが特にノイマンに與へたるなり。

ゲーテは、叙事詩『非ルヘルム、テル』に筆を執り始めしも、暫時にして、之  
を廢し、佛文豪ホルテールの作『マホメット』及び『タンクレッド』を翻譯したり。  
千八百二年ツリロギアの第一部(フ)、『ドイツ、リッヒ、ト、ホテル』を出  
せり、此作は、遂に完結せずしてやみしのみならず、人物の描寫餘りに抽  
象的にして、簡性を備へざるを以て、非難さる。シルレルは、ホーヘ、シムボ  
リックの語を以て、此曲を評したり。

ゲーテが比較的閑散の月日を送りし時に當り、シルレルは、日夜怠ら



ず、劇詩に筆を染め、『非ムヘルム、テル』に次いで、『デメトリウス』の作を試みしが、未だ成らざるに、天は詩人に年を借さず、千八百五年五月遂に没す。ゲーテ深く其死を悼む、カ『エビログ、ツ、シルレルス、グロッケ』二篇は、句々肺腑より出て、詩人の真情紙面に溢れ、追慕の念長へに盡きず。

第五期 詩人の晩年（千八百五年—千八百三十二年）

ゲーテは、齡に於て十歳の弟なる親友シルレルを失ひて、失望落膽せしと雖も、年齒尙壯にして、人生の半を過ぐるに僅かに六七、英氣充滿したり。シルレル死後の二十七年間は、ゲーテが主として、科學研究に意を用ゐたる時代にして、光學、色學、植物學、オステオロギ、ゲオロギ、メテオロギ等、洽く講究したり。

第五期に成りし詩文の作は、其數取て多しとなさずと雖も、『ファウスト』の一曲は、優に詩人の事業を完ふせしめたり。若しゲーテをして、シルレルと等しく不幸短命を以て終らしめば、龍頭蛇尾の憾なきを保せざるなり。

千八百七年アマリリエ死し、翌年ゲーテは、慈母を失へり、吾人は肥瘠す可し、千八百八年は、十九世紀の初舞臺に現はれて、歐洲の天地を震撼せしめたる大魔王ナポレオンが、十八世紀後半の世界文壇を獨占したる大詩人ゲーテと、互に手を握りて談笑したる年なり。而して此時ナポレオンは、ゲーテを評して、『噫斯の如き人又世に在りや』ボアラ、アノンとの一言を發せしのみ、同年『ファウスト』の第一篇出で、翌年小説『ディアウルフ、フ、ワントシ、フテン』出づ。此小説は、我が文學に於ける近松の『戀八卦柱曆』に相似たるものにして、一夫婦と他の男女との間に起れる交又せる愛情を描ぐものにして、結婚により生ずる幸不幸を描ぐは、作の主眼とする所なり。愛情と徳義とが一致したる時は、結婚は極めて幸福なり、されど若し徳義の念欠くる時は、結婚は最も不幸なるものにして、眞正の快樂は、求むべからざるなり。ざるに愛情と徳義とは、屢兩立せざる時あり、單に人間自然の情に任かせて、徳義を顧みざる時は、人は終に情慾の奴隸となりて、其身を亡ぼすに至らん。人は人倫道德の信念によ

りて、能く一時の出来心、本能の要求を壓服するを得るなり。本篇中に二對の男女あり、男爵エドアルド及び夫人シャロットは、外見上幸福なる家庭を作れり。此家にオッチェリエなる可憐の少女あり、又大尉某の賓客として寄寓するあり。

爰に一場の波瀾起れり。情慾と徳義との衝突に於て、シャロットと大尉とは、能く情を情として、又人倫の道を貴び、私情を制御したりと雖も、オッチェリエとエドアルドとは、全く自然の子にして、嘗て情慾を制することを知らざりき。かくして、人生の幸福は破壊されしも、徳義を破りし者は、生を全うせず、遂に其死を以て、徳義は情慾を壓する最後の勝利者たることを證明せり。

ゲーテの自傳「假作と眞實」(「アイヒツング、ウント、ワールハイト」の第一篇は、千八百十一年に出で、完結せしは、千八百三十一年なり、四篇二卷より成る。題號を「假作と眞實」と名づけしは、ゲーテ自から其理由を説明して曰はく、此傳記は余が青年時代の事を後年に至り、記憶より呼び

1. Der Westfälische Divan.  
2. Des Epimenides Erwachen.  
3. Wilhelm Meisters Wanderjahre.

起して記したるものなれば、悉く真なりと保證する能はず、時として、想像に任かせ、之を虚飾したる所ありと云へり。實に此自傳は、詩人の生立ちより二十六才迄の傳記にして、千七百四十九年より千七百七十五年ワイマールに移りし頃迄の閱歷を述べたるものなり。之に加ふるに『伊太利紀行』『第三回瑞西紀行』『佛國戰役記』『マインツ市の包圍』及び『日記』を以てせば、詩人の生活の大半を知ることを得可し。

自由戰爭の間ゲーテは、世の動亂を雲烟過眼し去つて、東洋文學の研究に専心を注ぎたり。就中波斯亞刺比亞の詩歌を研究し、千八百十九年歌集(レ)『デル・エストロストリッヒ・ディ・ヴィーヴン』を出せり。

ゲーテは、國家の大事に冷淡なりしと雖も、獨逸が佛人の羈絆を脱して、ナポレオンがセント・ヘレナ島に流されし時に當り、劇詩(ソ)『デス・エビメニテス・エルツァヘン』を書きて、獨逸國の平和克復を祝したり。

千八百二十一年(ツ)『ホルヘルム・マイステルス・ワンデルヤール』の初篇出で、千八百二十九年に至り、全篇三卷完結したり。此小説は、先きに述

第四編

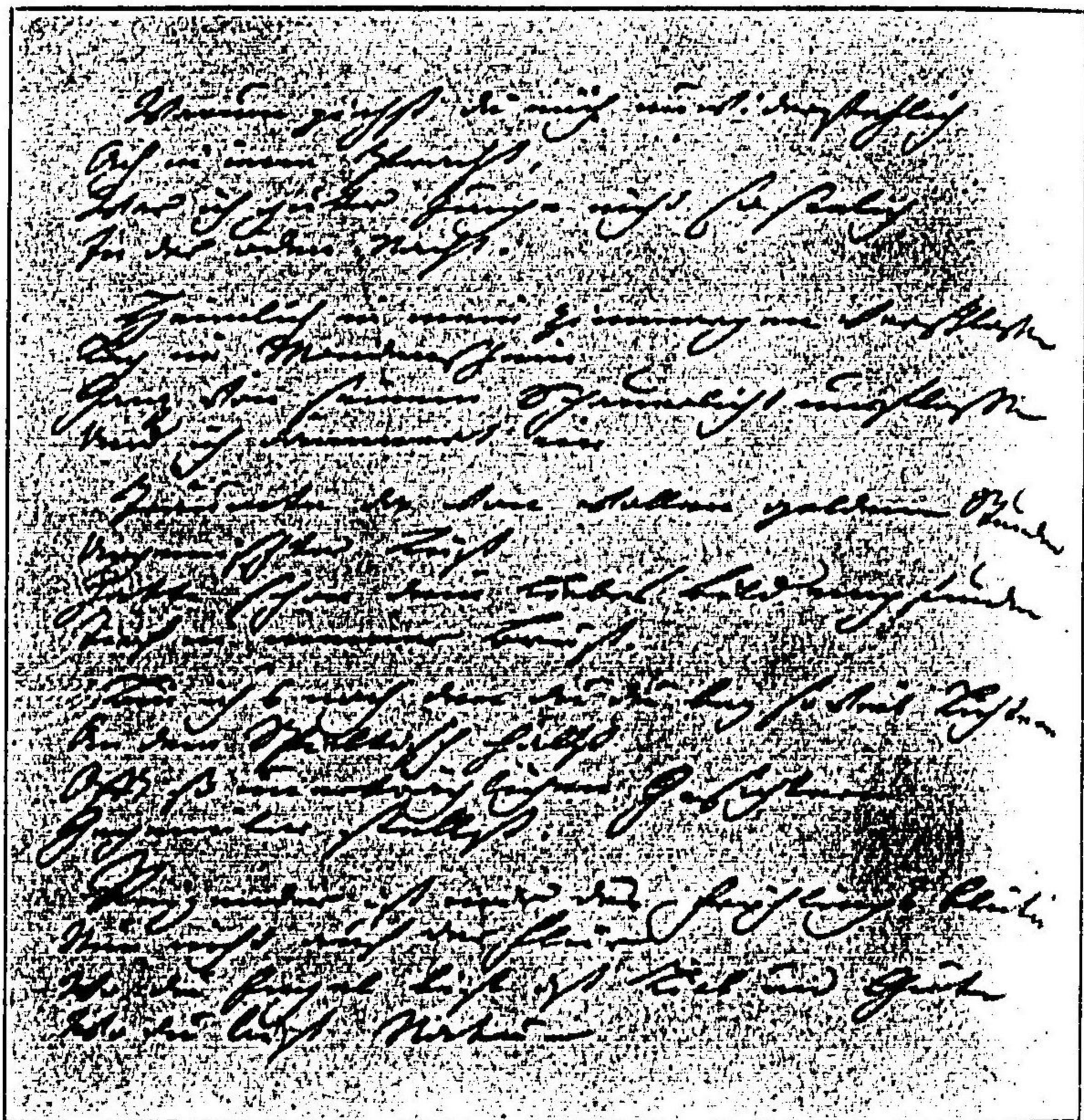
新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウシテス・ムス及びロマン・アイスマス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。)○クラウシテス・ムス。第七卷。ゲーテ。

べし』カールヘルム、マイステルス、レールヤーレ』の續篇の如きものにして、  
教育を論じ、社會に對する意見を述べ、國家に關する議論あり。

(子) 『ゲシブレーヘ、ミット、エッケルマン』は、ゲーテと、秘書官エッケルマンと  
の談話にして、ゲーテの平生を知るには良好の書なり。

千八百三十一年ゲーテは、八十二歳の高齡に達し、頭上白を戴いて、毫  
も倦怠の色なく、六十年來の宿志を遂げ、一代の大作『ファウスト』を完結せ  
り、茲に於て、ゲーテは天の使命を全うし、詩人としての事業を終へたり。  
バルナスの諸神急いで詩人を天上に招く。

『君のファウストは、どしした』と云つて、戯に展、ゲーテを苦しめたるシル  
レル逝いて茲に二十七年、千八百三十二年三月廿二日大詩人は長逝せ  
り、病床に侍せし人臨終の近きを知りて、窓の戸を閉ぢて、日光の直射を  
遮らんとするや、詩人は『も少し光』(メー、ル、ソヒト)と、かすかに響く最後の  
言葉を繰り返へして安らかに眠せり。遺骸は、ワイマール王侯墓地に葬  
る。



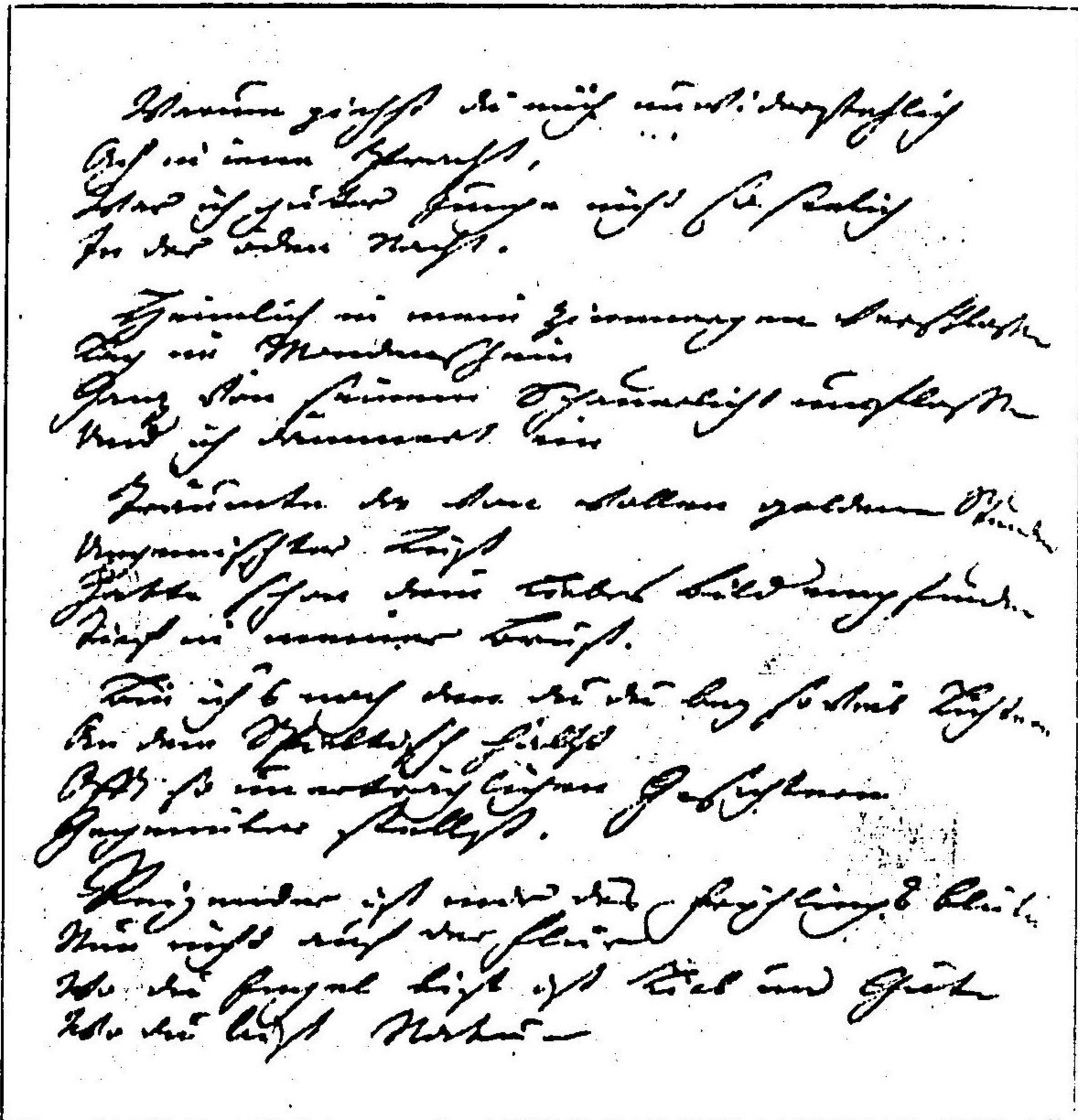
ゲ | テ | の | 筆 | 蹟

べし『非ルヘルム、マイステルス、レールヤーレ』の續篇の如きものにして、  
教育を論じ、社會に對する意見を述べ、國家に關する議論あり。

(子) 『ゲシブレーへ、ミット、エッゲルマン』は、ゲーテと、秘書官エッゲルマンと  
の談話にして、ゲーテの平生を知るには良好の書なり。

千八百三十一年ゲーテは、八十二歳の高齡に達し、頭上白を戴いて、毫  
も倦怠の色なく、六十年來の宿志を遂げ、一代の大作『ファウスト』を完結せ  
り。茲に於て、ゲーテは天の使命を全うし、詩人としての事業を終へたり。  
バルナスの諸神急いで詩人を天上に招く。

『君のファウストは、どしした』と云つて、戯に屢ゲーテを苦しめたるシル  
レル近いて茲に二十七年、千八百三十二年三月廿二日大詩人は長逝せ  
り。病床に侍せし人臨終の近さを知りて、窓の戸を閉ぢて、日光の直射を  
遮らんとするや、詩人は『も少し光』(メー、リヒト)と、かすかに響く最後の  
言葉を繰り返して安らかに眠せり。遺骸は、ワイマール王侯墓地に葬  
る。



歌 集 の 7 1 9

主要なる著作の評論

グーテの作にて、先づ指を屈す可きは第二期の作、劇詩「ゲッツ、フォン、ベルリッヒンゲン」なり、以下時代を追うて諸作を論評せんとす。

(ナ) 「ゲッツ、フォン、ベルリッヒンゲン」(千七百七十三年の作)

詩材は十六世紀のフランク族の武士ゲッツの自傳なり、三たび改作せられて、ワイマールの舞臺に上ぼる。先づ作の梗概を述べん。

主人公ゲッツは、忠實にして、徳義を重んずる中古の武士なり。世は文明に赴き、人は詐偽、陰謀を事とするに至れるを慨し、近き頃任命されたる裁判官を嫌忌すること、蛇蝎の如く、自己の武力を振うて、抑壓を排斥し、悪弊を打破せんとす。されど武士氣質の時代は既に去れり、ゲッツは、此類勢を挽回し、新制度に反抗せんとして、遂に斃るゝに至れり。政府は、ゲッツの暴横を憤り、軍隊を遣はして、ゲッツを其居城ヤックストハウゼンに圍みて、之を捕縛せり。されど爾後再び亂を起さず、干戈を手にせざるを誓はしめて放免せり。然るに久しからずして百姓一揆起り、ゲッツを首領に戴

かんとす。依つてゲッツは、其懇願を容れ、一揆の先導者となり、國家の爲めに一仕事をなさんとて立てり。されどゲッツは、負傷して捕はれ、獄中に死す。末期の水を飲み、「自由よ、自由よ」と連呼して瞑せり。殺伐亂闘の動作を飾るに、ゲッツの妹マリアとゲッツの仇敵にてバムベルグ僧正の手下なるワイスリンゲンとの戀愛談あり。これ一篇の梗概なり。

『ゲッツ』は天才時代の作なり。當時の理想の實現にして、天才主義の母も能く發揮したるものなり。主人公ゲッツは、替力人に過ぎ、或時敵と闘ひて、右手を失ひ、武器師に命じて鐵を以て之を補はしむ。而して腕力奮の如し。依て『鐵腕のゲッツ』と呼ばれたり。武士氣質の日に廢れ行くを慨嘆し、禍の身に及ぶを知りつゝも、身を挺して難に赴けり。武士ゲッツの自傳を借り來つて、ゲーテが胸中鬱物の氣焰を吐ける劇詩の主人公が、天才主義の化身なることは、疑を容れざるなり。ゲッツの貞節なる妻エリザベトは、ゲーテの母の倂を有し、其妹マリアは、ゼーゼンハイムの牧師の娘にて、ゲーテが慕ひしフリーデリケと相似たる性格を有し、レルゼは、ゲ

ーテがシントラースブルグに在りし頃の友人を描がきたるなり。

劇詩が描がき出さんとする終局の目的は、ゲッツの滅亡なり。而して滅亡を偶然の事柄とせずして、必然の結果となせり。ゲッツの自滅の源因に二あり。一は人物の性格にして、心理的原因と稱す可く、一は當時の狀態にして、歴史的源因と稱す可し。

翻つてゲッツの時代を考ふるに、新舊思想の衝突せる過渡の時代なり。中古武士の風漸く衰ふと雖も、未だ全く亡びずして、豪族各地方に城を構へ、祖先の遺風を傳へたり。されど世の大勢は、固陋なる武士制度廢たれて、新文明の思想に傾けり。此時に際して、ゲッツは舊制度の保護者として立てり。故に必ず新制度と衝突せざる可からず。大厦の覆へるは、一木の支ふ可きに非ず。ゲッツは武士氣質の最後の代表者として、遂に斃れたり。これ自然の勢と云はざる可からず。

劇中の人物の性格を考ふるに、根本的に相反し、氷炭相容れざるものあるが如し。眞實と虚偽とは、兩立す可からず。眞實勝たば、虚偽敗れ、虚偽

勢を得る時は眞實は壓せらる。世は虚偽者の支配する所にして、國は權謀家の左右する所なるは、古今皆然かり。古を慕ひ、我へ行く世を支へんとするものは、多く眞實なり。而して新に起らんとするものは、驕詐百端之を欺かんとす。依つて中古の武士氣質を貴べるものは、新時代の人に欺かれて、遂に亡ぶるに至る。ゲッツは中古武士の代表者なり。心に一點の虚偽なく、他迄誠實なる人物なり。而して武士道の衰頹を座視するに忍びず。滿身の英氣を鼓舞して、權謀詐術ある新時代の代表者と争へり。かくてゲッツは、一時徳義上に於て、勝利者なりしと雖も、舉世混濁の世に處しては、獨り身を清うする能はずして、濁流の渦中に葬られて、其身を亡ぼせり。茲に於て、一篇を通覽して、次の如き結論を下すことを得るなり。

意氣壯にして、然かも高潔なる人物が、初めは理想的自助の精神を以て、誤解したる權利を主張して、時勢に抵抗し、久しき間其名譽と赤誠とを全ふせり。然るに其志氣愛す可しと雖も、干戈を手にせずとの誓約を破り、自力を頼みて、粗暴の振舞をなし、遂に其身の滅亡を來たせりと。

『ゲッツ』面の欠點は、動作精緻にして、古代のものとしては、餘り複雑に過ぎ、且つアーデルハイトの身の上を詳述して、其役割多きに在り。此欠點は、ゲーテも夙に認めたり。斯くの如くなれば、『ゲッツ』面は、劇詩の法則より見る時は、多くの非難を免がれずと雖も、此詩の成りし翌年四月初興行の際は、大喝采を博したり。

井ーランドは、劇詩批判の眼なき人にあらずと雖も、靈活の文辭に眩惑して、敢て品評する能はざりき。文學雜誌『ドイッチェメルクル』に出でしクリステアーン、ハインリヒ、シュミットの批評を擧げんに、次の如く云へり。此劇詩は、三單一の法則を亂用したるものにして、吾人は、其喜劇なるか、將た悲劇なるかを判別するに苦む。されどこれ尋常一様の法則を以て、律す可き作にあらず。善盡くし美盡くせる怪物にして、在來の無趣味なる數百の劇詩を失ふとも、此一曲を存せば、敢て惜むに足らず」と。蓋し或は過賞なるべし。されど此批評により、當時の人の『ゲッツ』に對する賞賛の一斑を窺ふ事を得可し。世間一般の歡迎は、實に斯くの如し。此時に當り



冷酷なる批評を加へ、寧ろ敵意を以て此作を迎へし當代の二大人物あり、一を普魯西王フリードリヒ二世となし、一を大批評家レッシングとなす。

フリードリヒ王は、佛文學崇拜家なり、シェークスピアを摸範とせる『ゲッツ』を好まざるは、當然の事なり、されど排佛主義の本尊にして、等しく英文學に私淑せるレッシングが、シェークスピアを摸範とせる此作に向つて、冷々淡々なるは、甚だ奇異の事なり、世界其價値を認め、萬人之を賞す。レッシングが、之を排斥するは、其意を得ざるなり、然りと雖も、謂ふにレッシングは、ゴットシェッドと論争し、時勢の風潮を打破し、苦心經營して、獨逸劇界の刷新を企て、漸くにして、其基礎を固めたり、此時に當り、天才主義を標榜せる詩人の作出づ、而して世人は、狂喜して之を迎ふ、劇界は、大に動搖し始めたり、茲に於て、レッシングは、劇界の前途を憂慮して、反對の意見を有したるならん。

(ラ) 『ディライデン、デス、ユンゲン、エルテル』(一七七十四年の作)

劇詩『ゲッツ』の成りし翌年千七百七十四年ゲーテ二十五歳の作として、其名世界に轟き、泰西各國の語に翻譯されて、青年及び婦女子をして、殆んど狂殺せしめたる小説『若きエルテルの煩悶』(ディライデン、デス、ユンゲン、エルテル)は、ゲーテが、天才時代の傑作として、『ゲッツ』と並稱され、然かも其名『ゲッツ』の上に位せり、『ゲッツ』は、放逸豪壯の氣を以て優れ、『エルテル』は、多感多涙の情を以て秀づ。

エツラーの高等法院に在りて、法律研究中の事なり、ゲーテは、公使館書記官ケストレルの許嫁の女シャロツテに深き思を寄せ、狂奔して將に死せんとせしことあり、此頃友人エルサルムは、其知人の妻に戀慕して、失戀の結果非命の最後を遂げたり、是等の事實は、相集まつて、此小説の出づる動機となりしこと、傳中に述べたるが如し。

『ゲッツ』曲は、シュミットが評したる如く、固より尋常一様の作にあらずと雖も、亦劇詩として、多少の欠點あるを免れず、然かも事實は、中古の武士の事蹟にして、之を潤色するに、近世の趣向を以てすと雖も、尙天才主

義者の心性生活を寫して、餘蘊なしと云ふ可からず。然るに「エルテル」は、詩人自身の實際の閱歷遭逢を土臺とし、近く友人の變死を聞き、當時の青年文士の生活を最も適切に描がけるものにして、「ゲッツ」曲に比して、遙かに時代精神を發揚せるものなり。詞章の美、文辭の妙に至りては、到底「ゲッツ」の及ぶ所に非ず。若し「ゲッツ」を獨逸文學の美花とせば、「エルテル」は、世界文壇の寶玉と稱す可きなり。

箇人の要求と社會の制裁、豫想と現實との衝突を描きたる小説の主人公エルテルは、明かにゲーテ自身の性格を備ふるものなり。書中ケストナルは、アルベルト、其妻シャロットは、ロットの名を以て記さる。此外エルテルに忠告を與へて、屢反省を促がす友人ハルヘルムあり。此等四人は、書中の主なる人物なりとす。

ゲーテは、晩年に至り、「エルテル」を書きし頃の心中を自白したることあり。ゲーテは當時精神錯亂して狂氣となり、寢床に匕首を携へ、幾度か其尖端を胸に擬せしと云ふ。主人公エルテルは、英氣充滿せる熱血漢な

り、喜怒哀樂の情激烈にして、情の一たび發するや、狂氣の如くなれり。

エルテルがロットと、始めて相知りしは、晩春にして、狂蝶落花を追ふの候なり。再び三たび訪問の度重なりし内に、五月も早や過ぎて、六月の半となれり。エルテルは、心に一點の疚ましき所なく、ロットと親めり。されど容姿の嬋妍なるを見ては、魂忽ち奪ひ去られ、心臓の鼓動は、層一層に高まれり。此頃アルベルトは、用事ありて、家に在らざりしかば、エルテルは、日々ロットの許に至り、ロットを見ること、天女の如く、共に談笑して、時の移るを覺えず。晝夜の長短を辨へず、恍惚として自失することも、屢なりき。

さて此長き夜の夢は、破れたり。アルベルトは、七月の末に歸り來れり。エルテルも、茲に於て、大に驚き、情を制し、ロットと遠ざからんと決心せり。されどアルベルトは、心春の海の如く平穩にして、且つ高雅なり。嫉妬の念は、毛筋程もなく、寧ろ吾が妻が、エルテルの愛を受くる程の美人なる事を誇れるものゝ如し。依つてエルテルは、友人ハルヘルムの忠告をも、

却て論駁して聞き入れざりき。

アルベルトは、毫も嫉妬の念を起さず、ロッテの待遇は、舊に異ならずと雖も、アルベルト歸宅の後は、エルテルは、何となく面白からず、郊外に出て、散歩するも、少しも心を慰むるものなく、無限の生を托す可き淨土と思ひし自然は、今や悠久に葬らる可き深淵の如き感あり、エルテルは、自己の境遇を考へ、行末を思ひては、勇氣も消へ失せ、只涙に暮るゝのみなりき。

八月三十日に至り、エルテルは、井ルヘルムに書を送せ、「今の如く、果なき有様にてあらんよりは、寧ろ娼婆の苦を脱するに若かず」と云ひやれり。井ルヘルムは驚き、早くロッテと縁を断てよと熱心に忠告せり。エルテルは、勇を鼓して、燃え立つ思を翻へせり。此書簡は九月十一日の口附なり。これにて、第一篇終る。

第二篇の最初の書簡は、十月二十日なり。エルテルは、任官して、公使館書記官となれり。日々國務に執掌して、心を俗事を傾けしかば、激せし心

も、幾分か落付けり、されど尙快々として、内心樂まざりき。公使は萬事規則に拘泥する氣質の人にして、エルテルの自由放恣なる性質と全く相容れざるなり。

翌年二月に至り、アルベルトは、愈ロッテと結婚の式を擧ぐ。此時エルテルは、アルベルトに祝詞を述べたる手紙を贈る。されど文中一句の怨言なし。三月の中頃に至り、エルテルは、熱情再發して、抑ふ可からざるに至れり。蓋しエルテルの情は、例へば火山の如く、常に鳴動せずと雖も、一時鎮靜して、後更に烈しく爆發せり。

或日エルテルは、某伯の午餐に招かる。此日の晚餐には、他の來客あること、定まれり。然るにエルテルは、食卓を共にせし某嬢の美貌を見て、去ることを忘れて、食後久しく食堂に留まれり。主人の伯は已むを得ず、理由を述べて、エルテルを立ち去らしむ。此事交際社會に傳はりて、某嬢は、伯母の詰責を受けたり。之を傳聞したるエルテルは、烈火の如く怒れり。後間もなく、書記官を辭職したり。

## 第四編

新南國連邦時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウゼンテスマス及びロマンタイスマス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クラウゼンテスマス。 第七章。ゲータ。

六月の末に至り、情火再び燃え上がり、エルテルは、ロッテの許に走れり、去れど依然として、心中不愉快遣る方なかりき。

先づアルベルトの人物を考ふるに、冷静にして平穩、能く職務に勤勉なる人にして、圓滿なる暖かき家庭を作らんと、の希望もなく、さりとして妻を遇すること、苛酷なることもなし、云はゞ萬事無頓着の人なり、エルテルと、意氣投合したるロッテは、かゝる冷静なる夫と、胸中の琴線相調はざるの感に堪へざりき、されどロッテは人の妻として、貞節を重んずる、心清き婦人なり、一旦人の妻となりし上は、夫を疎んずることなく、操を守り、假にも、他人に劣情を向けんとする如き人にあらざるなり。

エルテルは、アルベルトとロッテとの關係の圓滿ならざるを見て、大にロッテに同情を寄せ、益、ロッテと離るゝ能はず、されど人の妻に、全情を寄するも、之を不幸の境遇より救ひ出すことは、到底なし得べからず、若しロッテを、己の意に従はせなば、自己の願望は、遂げらる可しと雖も、かくしては、ロッテは、貞操を全ふする能はざるなり。

さてエルテルは、元來情の人にして、世俗の事務を處理するの才なく、又氣力を缺きたり、これ公使館書記官たりし時の經驗によりて、明かなり、世に立ちては、盤望を失ひ、燃ゆる思も遂に遂ぐる能はず、かく四邊の境遇一として、意の如くならずして、煩悶憂慮の中に在るエルテルが進まんとする道は、唯一の死あるのみ。

「父よと、其頸にすがりつき、兒は歸り來れり、……年長く勉め勵めよとの教訓は、忘れしにあらざれど、世途の辛酸に堪へずして、業を半にして、やめ歸へれり、父よ、願くば、兒を責め玉ふ勿れ、世の中は、何處も、全じ事なり、苦あれば、樂あり、樂あれば、苦あり、兒は寧ろ父の膝下にありて、苦み又樂まんと云へる時、人の情ある人の父は、何と答ふ可き、……天國の父も、此愛す可き兒の言葉をば、聞き棄てには、し玉はじ」とは、エルテルの此頃の心事なり、世に容れられず、戀は遂げず、エルテルも、今は只管天國に行き、天の父の慰籍を得んと願へり、かくて十一月を過ぎ、十二月となれり、風吹き、天地蕭條として、雲黯澹、心の闇も霽れやらす、エルテルは、死を

決したり。明日は、冥途の旅路に上らんとする前日、エルテルは、最後の暇乞として、ロッテを訪問せり。此日は、日光僅かに濃霧を通じて、窓の戸を照らせり。アルベルトは、外出の後なりしかば、エルテルは、憚る所なく、ロッテと一室の内に密談せり。ロッテは、常に變はりしエルテルの舉動を察して、心様々に迷へり。

雖てロッテは、エルテルが譯せしオッシアンの歌を取り出して、共に歌はんとせり。ざるに此歌は、コルマルとアルピンの死を嘆く歌なり。ロッテとエルテルとは、落ち来る涙淵の如く、ロッテは、打ち俯して、顔を手巾にて覆ひ、エルテルは、涙にむせびて、暫時は、聲も出でざりしが、更に慄へる聲を絞り出して歌へり。今日を限りと覺悟せるエルテルは、歌の言葉を我が身の上に引きあて、深く感に打たれ、悲しさの餘り、ロッテの前に打ち臥し、ロッテの手を取りて、己が眼を抑へ、額を撫でたり。ロッテは、エルテルの心情を察して、只悲しげに首を俛るゝのみ。二人は、黙々の中に盡きせぬ情を取り交はせしが、エルテルは、突然、ロッテを抱き、熱血然ゆる唇を以て、ロッテを接吻したり。

ロッテは、夫ある身なり、人の妻なり、エルテルの此振舞には、大に驚き、少しく怒を帯びて、室外に飛び出てたり。

翌夜エルテルは、兼てアルベルトに借り受けし短銃を以て、自殺したり。盡きせぬ愛を以て、人生を觀察し、情に脆きこと、婦女子の如きエルテルは、嬰兒の如き清き心を以て、此世を去れり。

エルテル自殺の動機は二あり、第一は失戀にして、第二は、名譽心及び自尊心なり。エルテルは、一たびは、公使館書記官となれり、されど秩序拘束を受けて、痛く不自由を感じ、且つは事務の才なくして、青年として大汚辱を蒙れり。此大恥辱は、エルテルの世間に對する名譽を毀損し、且つ自尊心に、大打撃を加へたり。此時に際して、愛は遂げられず、此等二動機は、相集まつてエルテルの最後をなせり。

世の此小説を非難する者は、動機を一の情即ち失戀に限らずして、之に加ふるに、名譽心及び自尊心を以てせし事の非を擧ぐと雖も、附ふに

此非難は當らず、動機を多様ならしむるは、却て此作の名を爲す所以にして、主人公の性格は、それが爲めに、明かに描がき出さるゝなり。ゲーテの人物描寫の巧妙なるは、此點に在り。

小説一篇は夥多の書簡を以て成れりと雖も、其間連絡を保ち、戀愛は、一年有半斷へず連続せり。

小説の叙述法を見るに、自然の景を叙するに、場面は、書簡を追うて變はり、讀者は、乍ちにして、廣き自然、乍ちにして、ゾールハイムの旅舎、乍ちにして、牧師の庭、乍ちにして、裁判官の小供の部屋、乍ちにして、伯爵の華麗なる客間、忽ちにして、賤やしき村の宿屋に導かる。此小説は、晩春に始まり、翌年十二月に亘るものにして、四季の景色を叙すること、頗る巧なり。春の花、夏の風、秋の月、冬の雪、日光、月夜、雲、雨、霞、霧等の種々の自然現象は、主人公エルテルの心情と、内外相應じて寫さる。

人格の描寫に至りては、實に驚く可きものにして、就中ロッテが、洒落にして、健全なる心と、エルテルの病める如き情とは、好箇の對照なり。此二

人格に伴ふて、冷靜なるアルベルト、高慢なる貴族利口なる娘、偏屈なる牧師等、巧に描かる。

『エルテルス、ライデン』二たび、世に公けにさるゝや、青年婦女子先を争うて購讀し、其名は、讀書界を鳴動したり。されど又非難の聲も、處々に起れり。

靈妙の文辭に眩惑したるシーバルトは、次の如く云へり、『此人情の極微を寫せる大傑作に對する時は、批評の女神クリテ、カも、恍惚として、將に自失す可し。文辭の靈活は、驚くの外なくして、試みに二三の名句を擷出せんか。これ恰かも燒鏡を取りて、海綿に點火し、見よ、日輪の光玆に在りと云ふに異ならず。一言半句たりとも、之を他に移す時は、其妙趣を失ふ。實に靈妙不思議にして、能く捕捉す可からざるは、此小説なり。噫人は、エルテルたる能はずんば、將に藁を敷き、水を飲み、木根を食うて、一生を終るに若かざるなり』と。又ハインゼーは、云へり、『此小説を讀む人は、エルテルに深き全情を禁ずる能はざる可く、陽光一射して、曉霧の散ずるが

如く、心魂爲めに消ゆるの感をなす可し。婦人の讀者よ、心靜かに、氣落付ける時、一たび此書を手にせよ。干渴に潮の満ち来る如く、胸は、一時に迫まり、心臓の鼓動烈しきを覺ふ可し。これ天才詩人が讀者に與ふる尊き賜なり。讀者は將に之に向つて感謝す可し」と。此等の批評を以て見れば、『エルテルス、ライデン』は、實に文藝の最傑作なり。

されど一方より考ふる時は、此作は反道徳主義の文學として、且つ美至上主義の最も極端なるものとしての非難を招くの恐あり。果せる哉賞賛の聲鳴りも止まざるに、僧侶、道徳家、倫理學者等は、此作が士女の心に及ぼす可き影響に就き、頗る憂慮したり。本篇の人物に數へられしシヤロツテとケストテルとは、不快の感情を抱きたり。此作の文藝上の價値を否認したる、最も有力なる反對家は、レッシングなり。レッシングは、青年が失戀の爲めに自殺すと云ふ動機を、文藝上取るに足らざるものとなし、エルテルの如き人格の世に出でしは、耶蘇教の影響なりとして、大に耶蘇教の非を論駁したり。レッシングが、エツシエンブルグに與へし書中に曰

はく、『羅馬及び希臘の青年にして、エルテルの如き死をなせしものありや、余は之なしと確信す』と。されどレッシングの言は、少しく正鵠を失せり。若し人あり、ゾフグレスの作『アンティゴナ』曲中のヘーモンの自殺は如何にと、レッシングに反問せば、レッシングは、將に答ふるの辭なからん。ヘーモンが、愛人アンティゴナの生き埋めにされしを悲みて、死せしは、エルテルの自殺の動機と、更に異なる所あらざるなり。

レッシングが攻撃する新教の一派ピエティスムスが、獨逸に起りしは、『エルテル』の出づる凡そ百年前なり。ピエティスムスが、廣く人心を支配するに至りて、其弊は、多感多情の人物を出すに至れり。されど清淨なる心性、優美なる情緒の發展は、又ピエティスムスの賜なり。十八世紀に於ては、開明主義に伴うて、ピエティスムスの思潮盛んにして、クロップシュトックの如きは、此思潮を發揮して、傑作『メツシアス』を出せり。『エルテル』の如きは、一方より云へば、天才主義の化身とも云ふ可く、又十八世紀の思潮たりしピエティスムスの發現とも稱す可し。ゲーテは、天才時代の狂瀾怒濤の

中に入れり、而して、又ビエテ、スムスの精神を發揚せり、前者より見る時は、『エルテル』は、當時の心情の反映にして、後者より見る時は、一大思潮の凝結したる紀念碑なり。

『エルテルス、ライデン』は、道徳家、宗教家の非難攻撃ありしにも係らず、當時の人氣に投じたるものにして、洪濤の岸を洗ふが如き勢を以て、青年婦女子を狂奔せしめたり。多感の青年は、競うてエルテルが最後に著したると全様の衣服を作り、藍色の上衣、黄色の胴衣を纏ひて、互に相誇り、妙齡の女子は、皆エルテルの如き夫を得んと願へり、人は、ロッテを歌ひ、エルテルを歌ひ、殆んど狂殺せんとしたり。

或批評家は云へり、天才時代は、一種の精神的熱病、青年文士の間に流行せり、而して其最も熱度を高めて、病齋官に入りしは、エルテル熱なり。エルテル熱に冒されて、最も煩悶せしは、ゲーテなり、ゲーテの健全なる思想は、一時此熱によりて狂亂せしと雖も、遂に之に打ち勝てり、其結果として、現はれしものは、實に『エルテルス、ライデン』なりと。

由來獨逸の北人は、多感多情の性を有し、南人は、慍悍豪放の氣あり、而して此二性格は、文學上に著るしき對照をなせり、ゲーテの『ゲッツ』、『エルテル』は、此相反せる二性を代表したるものにして、南北兩思想の統一なり、ゲーテは、『エルテルス、ライデン』を、世に公にしてより、巨人の歩を以て、文壇に濶歩し、其名天日と光を争ふに至れり。

ゲーテが『エルテル』によりて、頭上に戴きたる名譽の冠は、最も光輝を放ちたるものにして、後年の作と雖も、能く及ぶものなし、世人は刮目して、此後の傑作を待てり、世人の豫望は満たされたり、『ファウスト』の一曲は、ゲーテの名を萬世不朽に傳へたり、されど翻つて考ふるに、『ファウスト』の根本的思想は、多くエルテル時代に養成されしものなることは、疑を容れざるなり。

(ム) 『クラギーコー』(千七百七十五年の作)

『エルテル』、『ゲッツ』は、再び『クラギーコー』、『ステラ』の二悲劇となつて、其餘光を放てり、ゲーテが、胸中の狂瀾怒濤未だ全く息まざるの時に當り、

4. Clavigo.



西班牙王の文書課長クラギーゴの情話を聞き、急ぎ筆を走らせて、僅かに七日間を以て成りしは『クラギーゴ』曲なり。此詩の出づるや、恰かも久しく地中に埋もれし種子の暖かき雨を得て、頓に萌え出づるが如く、詩人の胸中に來往せし情緒は、忽ち外界の刺戟に遇ひて發せり。

主人公クラギーゴはゲーテがフリッツ、ヤコービ、シェーンホルン等に與へたる書簡によりて知らるゝ如く、詩人自身と性格を全ふするは、明かなる事なり。ゲーテは、晩年に至り、クラギーゴ及び『ゲッツ』曲中のワイスリングンの二性格は、自己とフリーデリケとの交情の懺悔なりと云へり。一たびクラギーゴに愛せられ、薄情にも棄てられしマリーが、クラギーゴの實なきを知りても、尙戀々の情やまざるは、フリーデリケが、ゲーテに棄てられし後も、未練の情残りしと同一にして、ゲーテが、フリーデリケと、手を別かちし後、悔悟の念に苦しめられし如く、クラギーゴも、後にはマリーを痛く不憫に思ひたり。

ゲーテがクラギーゴを或時は大膽にして又小膽剛毅なるが如く

して實は情に脆く、野心満々として、然も全情ある人格となせしは、能く自己の性格を描寫せるものなり。マリーの眞實の友、ブエンコは、カルロスと全じく、ゲーテの新案の人物なり。されど或はフリーデリケと關係ありしレンツの人物を描がきたるにはあらざるか。

此曲は、固よりクラギーゴの事蹟を其儘に書きしにあらずして、クラギーゴがマリーと云へる婦人を愛しながら、青雲の志に驅られて、之と約を破り、更に他の良家の女と結婚せんとして、談判破烈し、法庭に相争ひて、遂に敗訴となりしと云ふ事實を改作したるなり。ゲーテの友人メルクは、『クラギーゴ』出づるや、『かゝる曲を再び出すこと勿れ、汝は、他に技を試むるを得可し』との忠告を與へたり。

(ウ) 『ステラ』 (千七百七十六年の作)

『クラギーゴ』の出でし後一年ならずして、『ステラ』曲出づ。此曲はフリーデリケの愛情衰へてリリーに對する深き思の萌し始めし時に成れり。フリーデリケがゼーゼンハイムに、愁の涙に沈みし時、ゲーテは、名さ

v. Stella.

へ仇なるリリーを見て狂蝶の如くなれり。此三人格は曲中明かに描かる。主人公フェルナンドは、ゲーテ自身にして、之に伴ふ二女人格の一なるステラは、リリーにして、他の一なるツェチーリエは、フリーデリケなり。ステラが、フェルナンドに始めて見染められしは、二八の盛の頃なり。紺青の眼、黄金の髪、一たび笑へば百媚生ず。實に秀絶の佳人なり。ステラとツェチーリエとの人格の高下あるは、實際に於て、優美なるリリーと、田舎じみたるフリーデリケとの相異あるが如く、概してフリーデリケは、リリーに比して、小形なり。ステラとフェルナンドとが逃亡を企てしは、リリーとゲーテとが亞米利加に落ち行かんと、の心ありしと同一なり。主人公フェルナンドは、婦人を誘惑して、恬として心に耻ぢざる如き、獸慾一方のドン・ジヤンの如くならず、さりとて又烈しき情を、大害の未だ發せざるに先じて制するを得たるゲーテ自身の如くならず、勇氣なく、意志弱く、目的定まらざる遊治郎に類する所あり。云はゞ、勇らしからざるの非難を免かれ難し。此曲は、千七百七十六年正月の末初版を出し、一週に版

井 Egmont.

を重ねること四回なりしと云ふ。ゲーテは、此作成るや、直ちに一咏を添へてリリーに贈りたり。

(井) 『エグモント』 (千七百八十七年の作)

詩材は、和蘭獨立戦争の歴史なり。少しく和蘭當時の國狀を述べんに、西班牙王フィリップ二世は、義姉マルガレーテを、ニーデルランド總督となし、政教の壓抑をなせしかば、オラニエン侯ホルヘルムは、大貴族の主謀者となり、小貴族等相合して、信仰の自由を懇請し、亂民到る處に蜂起し、寺院、教會を破壊したり。西班牙王は、アルバ公に、精兵二萬を授け、ニーデルランドに赴き、新教徒を併せんとせり。ホルヘルムは、難を獨逸に避け、再舉して、西國海軍を撃破し、勢日に隆盛となり、遂に千六百四十八年エストファーレンの條約に於て、オランダ共和國の獨立は公認されたり。

本曲の主人公、エグモントは、氣質全く純粹なるニーデルランド人にして、快活無邪氣なる樂天家なり。されど武士として、猛く勇ましく、交際に長じ、部下に對しては、驕慢ならず、兵士及び人民の輿望を負へり。樂天

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウチスムス及びロマンチスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラウチスムス、第七卷、ゲーテ。

家エグモントは己を以て人を推し、潔白の心を以て、權謀家に對し、遂に其身を亡ぼせり。ニーデルランドの人民擾亂を起して、西班牙政府に反抗せんとするや、フィリップ二世は、アルバ公を遣はして、鎮定の策を講ぜしむ。深謀遠慮ある、アルヘルムは、危難の將に到らんとするを察し、エグモントに忠告して、難を避けしめんとす。されどエグモントは、アルヘルムの言を用ゐず、國家の運命日に迫まるを見て、驚く色なく、自からアルバ公を訪問して、忌憚なく國狀を述べ、信仰自由の權利を主張し、アルバを見ること親友の如く、更に秘密を守らず、眞情を吐露して、アルバの同情を乞へり。エグモント今や囊中の鼠となり、談合終つて室の戸を開き、廊下に出でんとするや、劍戟を持したる兵士は、左右よりエグモントを脅迫して、直ちに之を捕縛せり。心に一點の邪氣なきエグモントは、逮捕の身となりて後も、西王フィリップ二世の公正を頼み、總督マルガレーテの友誼を信じ、アルヘルム及び人民の救助を待ちて、平然自若たりき。此時に當りエグモントの愛人クレールヘンは、日夜心を碎きて、市民を煽

動し、擾亂に乗じて、エグモントを助けんとす。されど人民は、國家の大恩人を救ひ出さんとする勇氣なし。處刑の前夜エグモントは、クレールヘンが自由の天女となつて現はれ、一身を國家に捧げなば、ニーデルランドの獨立自由は、悠久に得らる可しと云ひ、頭上に勝利の冠を戴かしめたりと夢む。クレールヘンは、エグモントが死刑の宣告を受けたりと聞くや、直ちに毒を仰いで死し、死出の旅路に先ちて、戀しき人の道連となれり。

シルレルは、此作を評するに當り、ニーデルランド人民の生活の狀態及び國狀等の敘述を賞賛せしと雖も、主人公エグモントが、歴史的な人格を備へざるの缺點を挙げたり。要するに、シルレルは、かゝる國事多端の時に際しては、之に應ず可き、確固たる品性の人格を望みたるなり。されどゲーテは、シルレルと反對の見地に立てり、エグモントを事業家とせずして、愛情多き人道主義の代表者として、描がきたるなり。故に劇詩のエグモントは、歴史のエグモントと全く相反し、未婚者にして、青年なり。

## 第四編

新南蘭逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラシチスムス及びロマンチスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラシチスムス、第七章、ゲーテ。

ゲーテは、自傳「假作と眞實」中に「エグモント」「ゲッツ」の二曲は、雙生兒なりと云へり。ゲッツは死に臨んで、世は不徳なる權謀家の左右する所となり、高潔なる君子人は、往々にして、其陥穽に陥るを慨けり。エグモントも、最後に於て、全様の感慨なき能はざるなり。ゲッツ、エグモントの二人は、共に高尚なる人物にして、強大なる國家の威力に反抗して、遂に自滅せり。自由は等しく兩人獄中の最後の言葉なり。双方相異の點は、ゲッツは、自由を得んが爲めに、現在の社會と争ひ、之を自力に訴へて改良せんとし、エグモントは、現在社會の弊害を攻撃すと雖も、更に進んで、之を改善せんとせずして、現在の社會中に自由を求めんとせり。ゲッツは、極端なる改進黨主義者にして、エグモントは、ゲッツより遙かに保守的なり。即ち知るゲーテは、伊太利に遊びてより、大に保守的思想を養成せり。されども、此作は、天才時代に於て、既に一たび草案成りしものなり。伊太利旅行中改作せしと雖も、エグモントとゲッツとが、性格を全ふするは、敢て疑ふ可からざるなり。

ゲーテ自身も公言したり、「エグモント」を余が目下の理想通りに作ることは至難の事なり。そは天才時代の主義未だ全く余が腦中を去らざればなり。此作が余がかくある可しと願ひたる豫想に反せしは、勢の然らしむる所にして、天才主義は深く余が腦中に侵入したることを證す可きなりと。

エグモント滅亡の原因は、一に無頓着に在り。一般に樂天主義の人は、不注意なり。萬事に無頓着なり。従つて大失敗を招くことあり。樂天家エグモントも亦實に不注意の結果身の大害を招きたり。

ゲーテは、エグモントの人格を寫すに、三様の觀察點を以てせり。第一、鬪弓術の場に於ては、人民の眼に映じたるエグモントを寫つし。第二、齣に於ては、西班牙政府の側より見、第三、齣に於ては、クレールヘンの愛の眼より見たり。即ち第一齣は、衆望を負へるエグモント、第二齣は、樂天家のエグモント、第三齣は、愛のエグモントを寫し出せるなり。エグモントは、不注意なり。依つて氣輕に見ゆ。されど此氣輕なる氣質は、最も愛す可

きものにして、エグモントは、老幼男女の別なく、兵士士民の分ちなく、萬人の愛を一身に集めたり。

『エグモント』曲は、上述せる如く、天才時代の思想尙依然として去らず、動作の単一の如き、『ゲッツ』曲に比して、少しく優れたたりと雖も、尙ほ圓熟の域に達せざること遠しと云はざる可からず。

(ノ) 『イフィゲーニエ、アウフ、ダウリス』(千七百八十七年の作)

トロイ戦争は、希臘詩人に、豊富なる詩材を供し、ホメールの二叙事詩を始めとし、希臘三大劇詩家と稱せらるゝエシルス、ソフオクレス、オイリビデス等の作は、トロイ戦争の神話傳説に關するもの多し。

『イフィゲーニエ、アウフ、ダウリス』は、もとオイリビデスの作なり、ゲーテは、詩材を希臘に求めて、更に之を改作したるなり。オイリビデスの他の一曲『イフィゲーニエ、イン、アウリス』は、シルレルによりて、翻譯さる。エシルスの『オレスタイア』、『ソフオクレスの』『エレクトラ』等も、亦イフィゲーニエ物語に關するものなり。

本篇の主人公イフィゲーニエとは、トロイ戦争の發頭人ヘレナの夫、メテラウス王の弟アガメムノンの長女なり、弟オレスト及び妹エレクトラ、クリソテミスクリソテミスの二人あり。トロイの王子パリスは、希王の宮に客寓し、歸國の時、メテラウス王の皇后ヘレナを奪ひ去れり、茲に於て王憤り、希人怒り、大軍を起し、戰艦數百艘相啣んで、トロイ遠征の途に上れり。此遠征軍の總大將は、イフィゲーニエの父アガメムノンなり。トロイ城は、十年の長日月を以て、落城せり。希軍は、凱歌を擧げ、纜を解いて、ヘレスポント海峡を去り、故國に向へり。然るに歸航の途次逆風に遇ひ、戰艦更に進むこと能はず。總大將アガメムノンは、大に憂慮し、豫言者をして、之を占はしむ。豫言者の曰はく、これ處女神ディアナの怒に觸れたるなり。此怒を宥めんには、人を以て、犠牲にせざる可からずと、依つてアガメムノンは、長女イフィゲーニエをディアナ女神に捧げ、以て無事歸航するを得たり。

ディアナ女神は、罪なきイフィゲーニエを殺すに忍びず、神の力を以てイフィゲーニエを救ひ、羊を以て之に代へたり。かくしてイフィゲーニエは、

第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クウシチヌムス及びロマンチスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クウシチヌムス。 第七章、ゲーテ。

女神に命を助けられしも、遠く北海の邊に持ち行かれたり。此海濱の地をタウリスと云へり。本曲の名は實にタウリスに於けるイフイゲーニエの意なり。現今の黒海中の半島クリミヤは、蓋しタウリスの事ならん。此地の住民をスキテンと云へり。

タウリスの地に女神の畫像あり、傳へ云ふ此像は、天より此半島に落下せしものなりと。

此國には、古代の埃土と同じく、奇異の習慣あり、他國人來る時は、其人物の高下善惡を問はず、直ちに捕虜となし、女神に犠牲となせり。

ディアナ女神は、終生處女の保護神として、清淨無垢の處女を愛護するを以て任となせり。さればイフイゲーニエは、タウリスに來り、直ちにディアナ神社の巫女となれり。

さてアガ멤ノン外征の間留守居せしイフイゲーニエの母クリテムテストラは、何時しか從兄弟たるエギステスと、不義の交を結び、夫アガ멤ノンの陣没せんことを願ひたり。アガ멤ノンは、トロイ遠征の大

任を全ふし、喜んで家に歸れり。然るにクリテムテストラは、夫を遇すること冷々淡々、遂に情夫エギステスと謀かり、アガ멤ノンの浴場に在るを窺ひ、衣を以て、其面を覆ひて刺し殺るせり。イフイゲーニエの妹エレクトラは、實母及び情夫に婢僕の如く、虐待されたり。父の留守中他國に遊びしオレストは、父の歸國を喜びて歸り來り、大變事の起れるを見て驚き、父の仇を報ぜんとして、實母クリテムテストラを殺るせり。愛子を犠牲にして、敢て意とせざるアガ멤ノンを子の敵なりとて殺るせしクリテムストラは、再び子の爲めに父の敵なりとて、殺るざる。因果應報は、遂に免がれ難し。

エシルス、オイリビデス二詩人の作にて、此迄の筋は全一なれども、オレストが實母を殺るしたる後の話は、二作全く相反せり。ゲーテは、オイリビデスの作を採用せり。オイリビデスの作によれば、オレストは、實母を殺るせし罪を以て、長髮蛇身の復讐の女神に追窮され、日夜非常に苦めり。さるに一日アポロ神は、オレストにタウリスに行きて、神社に奉納

せるディアナ女神の像を取り來らば、其罪を赦るし、復讐の女神の咎を免がれしめんと告げたり。依つてオレストは、親友ピラデスと語らひ、共に北方指して出て立ちぬ。

オレスト、ピラデスの兩人は、タウリスに著するや、國の習慣によりて、直に捕はる。兩人は、只死を待つのみなりしが、偶神社の巫女と言葉を交ふるに及んで、異國に自國の語を話す處女あるに驚き、其由來を問へば、正さしく、オレストの妹にて、一たびディアナ女神に犠牲となりしイフィゲイニエなることを知れり。二人は死せしと思ひし人の健在なるを見て、痛く打ち喜び、イフィゲイニエに渡來の意を告げ、三人協力して、女神の畫像を盗み出さんとす。然るに密計暴露して、三人は、將にトリアス王の激怒に觸れて、處刑されんとす。されどアテーテ女神は、三人の赤誠に感じて、王の怒を和らげしかば、オレスト、ピラデスの二人は、目的を達し、イフィゲイニエと共に三人船に乗りて、無事本國に歸る。寛大なる王は、三人を岸頭に見送りて、告別の辭レীবト、ゾールを述べ。

千七百七十九年「散文イフィゲイニエ」成るや、ワイマール宮に於て、全年三月廿八日に演ぜられたり。此時の役割は、ゲーテは、自からイフィゲイニエの弟オレストとなり、公爵の弟は、ピラデスとなり、ゲーテの親友クネーベルは、トリアス王となり、宗教裁判所秘書官ザイドレルは、王の侍従アルカスとなり、イフィゲイニエは、本職の名高かき女優コローナ、シュレitelが務めたりと云ふ。

今茲に論ぜんとするは、伊太利旅行中「散文イフィゲイニエ」を改作して、韻文となしたる「イフィゲイニエ」なり。されど人物の性格には、ゲーテがワイマール時代に交遊したる人の氣質明らかに反映せり。ゲーテは、ワイマールに在りし頃賢夫人シャロツテ、フォン、シュタインの舉止上品にして、氣品高尚なるに感じ、清き愛と、熱情とを以て交はれり。此頃ゲーテは、唯一の妹コルチリアを失ひて、痛く憂ひ悲みたり。されば此曲は、シュタイン夫人に對する清き愛情と、愛妹に對する追慕の念とが混和融合して一の劇詩となりしものにして、追慕の情は、此曲の裏面に、伏在する根本の思

## 第四編

新南獨逸諸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウシテスマス及びロマンティスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラウシテスマス、第七卷、ゲーテ。

想なり、かく眷戀の思想が、作の基本思想となれるを以て、此曲を其内容によりて、眷戀の劇詩と云ふ。

此曲が何故に眷戀の劇詩たるかは、劈頭に掲げたる主人公イフイグーニエの獨言を一讀せば、將に其然かるを知る可し。

第一齣の序幕に於て、主人公イフイグーニエ舞臺に現はる、古木森々として、神さびたるデアナ神社の森影に、只見る温容の中自から氣品高き妙齡花顔の一少女、少女は先づ嘆聲を洩らして、然る後に語り出でたり。「海は仇なり、年久しく岸に立ちて、希臘の方を望み、戀人を慕へども、寄せては返へず無情なる浪の音、我が嘆聲に和するのみ、親に分かれ、弟妹に離れて、遠國にさすらへる者程哀れなる者はなし、慈愛深かき王の殿裏に生ひ立ちて、弟妹と遊び戯れしも、今は夢となれり……と、かくて尙語を續けて、女の自立の精神に乏しくして、一に男子の命に唯々諸々たる可き運命を嘆き、怨むが如く、訴ふるが如く、女神に祈願して、一たび犠牲となりし時、助けし神は、二たび流竄の身となりし時、見棄つる事

は、よもあらじと云ひ、其怨は綿々として、盡きざるなり、第一齣の終及び第四齣の始と終とに獨言あり、イフイグーニエの性格及び心情は、一々此獨言に現はる、若し此曲より獨言を除かば、龍を描がいて、眼睛を點せざると等しかる可し、誠に獨言は、此曲の精髓なり、最後の獨言は、イフイグーニエが其生れし王家タンタルスの運命を回想し、遂に幼時媒母に教へられし歌を思ひ出して、歌へり、此歌の辭より見る時は、イフイグーニエ曲は運命の劇詩なり、此曲を難ずる者は曰く、グーテの「イフイグーニエ」曲は、オイリヒデスの作に比すれば、動作活氣を失ひ、觀衆の心を動かすこと少なしと謂ふに、此非難は一を知つて二を知らざるもの、言と云ふ可し、實に難者の云へるが如く、此曲には、外に現はれて、觀衆の目を惹き、心を動かす如き動作は欠けたり、されど、外面的動作のみを以て、劇詩を判じ、之を故を以て、劇詩が動作を欠きたりと云ふは、大早計なり、皮想の見なり、動作外に現はるゝは、心内に働けばなり、假令外面的動作に現はるゝこと、雖も、心内に働き、一精神と他の精神との衝突若くば連合



によりて、働とならざる可からず。劇詩終極の目的は、心的活動力が、外的動作の媒介によらずして、直接に互に相働くことにあり。語を換へて云はゞ、一の心と他の心との纏綿せる状態を直接に叙するは、蓋し希の劇詩の精髓なりとす。

シルレルは、此曲の特徴を心的の一語を以て評したり、蓋しシルレルの意も、此曲の精髓は、外面的動作に在らずして、心的動作なることを云へるならん。

千七百八十九年シルレルは、又『獨逸最近美文學評論』に於て、『イフ、グーニエ』曲を評せり。此評論は、完結せずして、『イフ、グーニエ』の梗概に附加したる註解的短評に過ぎずと雖も、文辭頗る壯快にして、議論も亦當を得たり、且つや、此評論は、單に、『イフ、グーニエ』一曲に關せずして、廣く考ふる時は、グーテ思想の變遷を窺ふことを得可きを以て、茲に之を録せん。

『イフ、グーニエ、アウフ、ダウリス』曲は、獨逸文壇に、新光彩を放ちたる作にして、其傑作たることは、何人も疑はざる所なり。『グッツ』の作家として、

始めて文壇に歩を進めし時に當りて、グーテは、一世を聳動する如き作家が、屢遭遇すると全一經驗に觸著したり。シルレルは、恐らく處女作『ロイベル』を出せし時、全様の感慨ありしならん。或批評家は、處女作『グッツ』一曲を以て、早計にも、詩人の本領を推測し、爾後續出す可き作の性質を豫測したり、而して天才を縛するに、形式法則を以てして、其逸足を延ばさしめざらんとせり。されど當時詩人の空想は、狹隘なる天地に踟躕するを得ずして、常規の外に奔逸し、シークスピアを祖述して、何人の批評にも敢て耳を傾けざりき。事情此の如くなれば、詩人が『グッツ』を誹謗せし批評家に、最も名譽ある復讐をなし、大汚辱を雪ぐは、此『イフ、グーニエ』曲に過ぐるものなからん。『グッツ』曲を非難するものは、詩人を以て、法則を守る能はず、故に之を破るとなせり。されどこれ甚だしき讒勝なり。詩人の創作の才は、法則の拘束に遇ひて、依然たるのみならず、法則を利用して、更に眞美の域に達せり。見よ、無法則を主張したる時の『グッツ』を以て、大英の詩人と名を争ひし作家は、今や法則を守つて、古希の詩人と競ひ、

ソフクレス、オイリピアスをして、一籌を輸せしめんとすと。

ゲーテが此曲及び「タツソ」曲に於て、登場人物を、五名の少数に限りしは、大に希の劇詩に模倣したるを證するに足るなり。

主人公イフ、ゲーニエの性格を考ふるに、神聖にして犯す可からざること神の子の如く何處となく俗界を離れ、人間以上の性を有せり。イフ、ゲーニエは、希臘の名高き王家の皇女にして、且つ處女神デアッの保護を受け、神と語り、神と交はり、俗界と絶ち、神聖なる神殿を以て居所となし、王の權威を以てするも、容易に其命に服せず、然かも一たび思を故山に馳せ、父母弟妹を慕ひ、身の不運を嘆ずるに當りては、正さしく此世の人なり、遠き世の希人に非ずして、近くワイマール宮妻の人たるなり。

トリアス王は、イフ、ゲーニエを愛したり、立て、后となさんことは、其一呼吸にあり、然るに之を断行するなきは、イフ、ゲーニエの神聖を汚すことを恐るればなり。ゲーテは、シュタイン夫人に愛情を向けたり、されど一度も人倫の道を破らんとせしことなし、此精神は、トリアス王とイフ、

ゲーニエとの關係となつて現はれたるなり。

序幕に於てイフ、ゲーニエが、故國を思ひ、望郷の念に堪へずして、海を隔て、遙かに南方の雲を望むは、恰かもゲーテが、古希の遺文を読み、遺蹟を尋ね、遠き昔を忍びて、古希の文化を欽慕渴仰すると、何を異ならん、論じ去り、論じ來つて、將に評論の終を告げんとす、此時に當りて、特に一言すべきことあり、四海を以て兄弟となし、博愛衆に及ぼし、國の内外を問はず、能く一致和合して、異邦人異教徒を遇するにも、寛大の所置を以てするは、人道主義の理想なり、此理想を鼓吹し、此主義を主張するを以て、劇詩の根本思想となせるもの、先きにレッシングの「ハータン、デル、ワイゼ」あり、而して今又ゲーテの「イフ、ゲーニエ、アウフ、タウリス」あるなり、兩劇詩に現はれたる人道主義の輕重大小を比較研究するは、最も興味あることなり、されど此研究は、他日に譲らんのみ。

「イフ、ゲーニエ」曲は、動作靜穩に過ぐるが如く、華々しき所なしと雖も、これ所謂希の美術の主眼とせる、簡潔にして高尚、沈靜にして偉大なる

の理想を描がけるものとせば、其詩的價值那邊にあるかを知る、蓋し難事にあらざるなり。

(ヲ) 『トルクワート、タツソ』 (千七百八十九年の作)

トルクワート、タツソとは、十六世紀の伊太利文豪トルクワート、タツソの事なり。タツソは、ダンテ、ボッカチオ、アリオストに次いで起り、其名伊太利文學に重きをなし、『ゼルサレムの救済』(ゼルサレムメ、リベラタ)の一作により名聲大に聞こゆ。ゲーテは、幼時此作を讀んで、タツソの文才を欽慕したり。

タツソは、フェラ公に仕へし頃、公の妹レオノーレ、フォン、エステに戀慕したることあり、之を離間せんとするものありて、タツソは、大に相争ひ、後發狂して、不遇の身を以て終れり。ゲーテも、嘗てワイマール宮に於て、タツソと全運命に遭遇し、天才主義と社會の制裁との衝突を經驗したり。此等が縁となりて、曲名を伊太利文豪の名に借り、タツソの情に托して、詩人自身のワイマール宮裏の心情を述べたるもの、これ『トル

クワート、タツソ』曲なりとす。

此曲も『イフ、ゲーニエ』曲と全じく、もと散文なりしを、後に改作して韻文となせしものにて、伊太利旅行より歸りし翌年千七百八十九年ワイマールに於て成れり。『タツソ』曲は、其妙所快活なる動作にあらずして、巧妙なる性格の描寫にありとす。先づ作の梗概を擧げん。

タツソは、大叙事詩『ゼルサレムメ、リベラタ』を携へて、アルフォンソ、フォン、フェラ公の許に至り、之を献じたり。公は深く其詩才を賞し、妹レオノーレ、フォン、エステをして、タツソの頭上に桂冠を戴かしむ。此時に當り内閣書記官アントニオは、樽俎折衝の間に、重大なる外交の任務を全うして、羅馬府より歸る。アントニオは、己の名聲タツソに凌駕されんとするを恐れて、タツソを侮辱し、天下の事は、明腦快腕によりて決すべし、空想に馳せ、感情を弄するの徒は、共に語るに足らずと嘲けり、只に誹謗するのみならず、フェラ公にも其意を通じたり。かくアントニオは、日夜タツソを悪口罵詈し、其名望を傷けんとせしかば、性來情に激し易きタツソ

は、憤怒して己を忘れ、佩劍を抜いて、公の殿中を駭かせり。公は、深くタッソの罪を罰せずして、頗る寛大の處置をなし、アントニオに説いて、奪ひ取りし劍をタッソに返へして、兩人を和睦せしめんとまで盡力せり。さるにタッソは、公の寛大なる取扱に尙不滿の心を抱き、公の宮廷を辭し去らんとせり。公はタッソの氣少しく常ならざるを見て、心ならずも、其願を容れて暇を與へたり。然るにタッソは、宮人已を讒すとなし、心愈狂亂し、公の妹レオノーレの許に至り、臆而もなく、戀愛の情を吐露して、其願を遂げんとせり。レオノーレは、タッソの舉止穩ならざるを見て、大に驚き其願を拒絶したり。茲に於てタッソは、世を怨み、人を呪ひ、全く絶望の淵に沈みたり。

測り難きは人の心なり。タッソが一度は、不倶戴天の仇とまで思ひしアントニオは、今やタッソを窮境より救ひ出す唯一の親友となれり。熱病患者が、其熱度極點に達して、後平癒するが如く、タッソの心の病は、頂巔に達して再び靜穩の状態に復歸したり。

此曲も「イフイゲーニエ」と同じく、登場人物僅かに五人にして、主たる役は、タッソ、アントニオ二人によつて、演ぜらる。全然相反せる兩人格は、問答によりて最も巧に描がき出さる。

タッソは、詩人なり、情の人なり、空想兒なり、熱情忽ち激し、神經過敏にして、克己の力乏しく、且つ現世を見ること夢の如くなり。アントニオは、理性の人にして、常識あり、實世間的の才を有し、心平靜にして、深慮事を處し、苟くも情に激することなし。タッソは、天才主義を以て、實世間と闘ひ、外界より獨立したる別天地を胸中に描がけり。アントニオは、世才に長じ、現社會に處するの道を知れり。

ゲーテは、此相距る霄壤の差ある二人格を捕へ來りて、タッソをして、一たび世間と争ひ、アントニオの翻譯する所とならしめ、遂に世間は、我が理想と異なり、嘗て期せし如く清らかならざるを悟らしむ。ゲーテは、アントニオ及びタッソの二人格を公の妹レオノーレの觀察に托して、巧に批評せり。兩箇の人物は、共通の性を有せず、依つて互に相容れざるな

## 第四編

新南國逸話時代の文學（宗教改革より現代迄）  
（クラウシテスマス及びロマンテイスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。）○クラウシテスマス。第七章。ゲーテ。

り、自然は兩人を各其人とならしめ、併て一致和合せる一人格となさず」と。蓋しレオノーレの言は、此曲の根本思想を暗示せるものなり。

アントニオ・タッソーの性格には、諸種の點に於てゲーテ自身の人と爲りを想望せしむ、二人の性格の著るしき對照は、ゲーテが詩人として及び實際家としての、自己の經驗を寫つし出したるものにして、アントニオとタッソーとの反目は、ゲーテの胸中に闘ひし理想と現實との衝突を舞臺の上の人として現はしたるなり。

謂ふにゲーテは、詩人なり、想像の大は、宇宙を包括し、感情の力は、鬼神を泣かしむるに足れり、されど秩序の中に棲息する能はずして、常に法則の外に奔逸し去らんとす、實に天は、ゲーテに世才を與ふるを惜んで、之に代ふるに、能く可き詩才を以てしたるなり。

ゲーテがワイマール宮に仕ふるや、公使館書記官の名譽職に就き、公の信任を一身に負うて、國事に參與するの權を有したり、然かも事務の功幾くも舉らず、一公爵の領邑すら、能く治むるの才なき、ゲーテは、到底

大國の臣となり、國政を執るの人にあらざりき。

ゲーテは、萬有の理を極めんとして、哲學、神學を始めとし、光學、物理學、動植物學等の自然科學は、悉く學ばざるなく、學んで大成せざるることなかりき、實に學識に於ては、優に専門家と議論を上下して、遜色なきなり、學才斯の如く、詩才又驚嘆の外なし、然るに世才は殆んど全く之を欠きたり、ゲーテは、智の人としては、大學者たるの資格を有し、情の人としては、古今獨歩なり、然かも意志の人としては、比較的劣等の地位にあり、ゲーテ自身も、夙に此短を悟り、常に苦心焦慮して、己の弱點を匡正せんことを努めたり、然かも遂に能はざりき。

ゲーテの胸中を來往して、日夜其心を痛めたる思想は、屢其作に反映したり、天才時代の寶典と稱せらるる、『エルテルス、ライデン』及び一生の大傑作として、晩年に成りし、『ファウスト』の二作に徴するも、此曲と全様の感慨あるを見るなり。

ファウストは、天地間萬有の理を極めんとして、然かも安心立命を得ず、

第四編 新南獨逸時代の文學（宗教改革より現代迄）  
（クラウジウス、ムス及びロマン、ゲイムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄）  
○クラウジウス、ムス、第七卷、ゲーテ。

ゲーテの胸中を來往して、日夜其心を痛めたる思想は、屢其作に反映したり、天才時代の寶典と稱せらるる、『エルテルス、ライデン』及び一生の大傑作として、晩年に成りし、『ファウスト』の二作に徴するも、此曲と全様の感慨あるを見るなり。

地神の一喝に辟易し、メフストフェレスの誘惑によりて、處女の神聖を汚  
がし、遂に多感多涙の文士を以て終る可しと思ひしに、其最後の目的は、  
北海の濱に荒蕪の地を耕すにあり、これゲーテが、智情の人を離れて、意  
志の人たるんことを熱望せしによれり。

エルテル自殺の動機は、失戀に在りと雖も、亦青年として、世務を執る  
の腕なくして、不名譽を招きしを、深く慨嘆せしにあり、ゲーテは、己の長  
所を發展せしむると共に、其短所を知り、之を補ひ助けんことに、鞠躬盡  
力怠らざりしなり。

『タッソー』曲に於ては、詩人が自己の性行、境遇と、頗る相類したる智情  
の人タッソーを以て主人公となし、之と全く相反せる意志の人アントニ  
オを以て之に配したるを以て、殊更に兩者の衝突巧に描かれたるなり。

ゲーテが自己の閱歷と、タッソーの歴史とを合一したる作中の人物を  
見るに、アルフォンス公は、カール、アウグストに外ならず、公の妹レオノー  
レは、シユタイン夫人及び公爵夫人ルイーゼーに相類するを見ん、レオノ

ーレは、幼にして、母を失ひ、身體虛弱にして、瀕死の病に罹かりしこと屢  
なりき、されば、感情強くして、愛憐性の女なりき、レオノーレを夕日に萎  
む薔薇の花とせば、朝露を帯びたる百合の花にも譬ふ可き伯爵夫人サ  
ンピターレは、愉快なる氣輕るき女なり、これ又二女人格の面白き對照  
なり。

ゲーテが伊太利旅行によりて得たる感化如何は、『イフイゲーニエ』を  
論ずるに當りて、再三繰り返へしたり、試に、『イフイゲーニエ』に續いて、其名  
を列する『タッソー』曲を一讀せば、蓋し層一層の感あらん。

(ク)『ヘルマン、ウント、ドロテア』(千七百九十七年の作)

一河の流、其源を山間幾多の清泉に發す、天地の聲、自然の樂を傳ふる  
詩歌は、そも其源を何處に發するや、叙事詩『ヘルマン、ウント、ドロテア』は、  
其詩材一にして足らず、宗教、政治、戰爭等の歴史に基づけり、梗概を述べ  
るに先んじて、順次詩材の出處を略述せんとす。

時は千七百三十一二年の交、埃太利の一都邑ザルツブルグの新教徒

は、國教を奉ぜざるの故を以て、舊教の大僧正の壓抑を受け、其命に服従するを好まず、老若男女悉く相率ゐて、總數凡そ三萬余人故郷の地を去つて、他國に移轉を企てたることあり、これ歴史上ザルツブルグの移轉民の名を以て著名なり。

さてアルトミール市に富有なる市民あり、一人の男子を有せり、父は屢子に説いて、早く結婚せん事を勧めし、子は、容易に父の命に従はざりき、ザルツブルグの移轉民は、隊を組んで、アルトミール市を過ぎたり、好奇心を以て、此行列を眺めつゝありし富家の男子は、忽ち列中の質朴なる田舎娘のやさしき姿に不圖思をかけたなり、男子は平素反抗したる父の許に至り、かの女と結婚する能はずんば、終生獨身なる可しと云ひ、切に懇願したり、父は其女がザルツブルグの移轉民なりと聞き、容易に承諾せず、二三の親友及び牧師に乞うて、子の心を翻へさんとしたり、されど子の志は、斷乎として動かす可からざるなり、牧師は子の決心の固きを見て、かゝる奇縁は月下氷人の命なるべしとて、父を説得せり、茲に

於て男子は、かの女を欺き、父の家の召仕にす可しと云ひて、伴ひ來れり、父は子の秘密を知らず、明らさまに女に向かいて、男子を愛するや否やを問へり、女は始め父が己を擲捨するなりと思ひて、返答を與へざりしが、男子の誠意の存するを知りて、遂に出來得る限りの貞節を盡さんと誓へり、愈結婚の約成るや、女は財囊を男子に渡せり、此囊中金貨二百ドカールテン、これ宗教的詩材なり。

千七百九十二年より、九十四年に亘り、佛蘭西大革命始まり、佛の國境に於て、人民動搖し、佛人の難を避けて、獨逸内に逃げ來るもの多かりき、ゲーテは、前に挙げし古き宗教上の事變と、此最近の政治上の出來事とを合一して、更に一段の感興を添へたり。

以上政治的及び宗教的詩材の外に、又一の詩材あり、これ詩人自身の經歷なり、千七百九十二年ゲーテは獨逸が佛の國境に兵を出せし時、カール、アッグスト公に従うて、戦地に入り、戦争の實況を觀察したり、翌年マインツ市に在りて、佛軍に包圍攻撃を受けたることあり、此間に於け

## 第四編

新南獨逸諸時代の文學（宗教改革より現代迄）  
（クワシテス、ムス及びローマニテイスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄）○クワシテス、ムス、第七卷、ゲーテ。

るゲーテの觀察は、直接間接に詩材となつて現はれたり、ゲーテ最初の考にては、此等の詩材を以て、劇詩を作らんとせしも、中途にして、之を改めて叙事詩となせり。

ゲーテは、早くよりフォッスの叙事詩「ルイーゼ」を読み、其文法、句法の流麗なるに感服せり。依つてゲーテが此詩を書くに當りて「ルイーゼ」に負ふ所大なるは、否定す可からざるなり。先きに「ルイーゼ」無かりせば「ヘルマン、ウント、ドロテア」出でず、後人ゲーテの傑作出で、先人フォッスの名更に顯著なるに至れり。

キルヘルム、フムボルトは、特に「ヘルマン、ウント、ドロテア」の一篇に就き、審美的研究をなして出版せり。シルレルは、此叙事詩を以て、近世に於ける詩歌の完璧となし、且つ近古の歴史及び變動を巧に結合したるの妙技を嘆賞したり。

晩年ゲーテは、秘書官エッセルマンに語つて曰はく「ヘルマン、ウント、ドロテア」は、少なくとも、余が傑作の一なり、反讀する毎に愉快の感更に

加ふるは、實に此作なりと。

抒情詩が主觀的に情を抒ぶるものにして、叙事詩が客觀的に事を叙するものなることは、今更説くことを要せず、讀者の情を動かすを主とするは、抒情詩にして、平靜に事を語り出すは、叙事詩たること又明かなり。「ヘルマン、ウント、ドロテア」は、此點に於て、叙事詩の模範と稱す可し。此詩もとは、六歌なりしを、後に改めて九歌となせり。各歌に名づくるに、文藝の女神ミューズの名を以てせしは、昔アレキサンドリアの學者が、歴史家ヘロドの作に用ゐたる命名法なり。

「ヘルマン、ウント、ドロテア」の文法、句法が、ホメールより出づることは、模範をホメールの翻譯家たるフォッスの「ルイーゼ」に取りしによりても、容易に推測し得可しと雖も、其特徴を彼此相對照せば、更に明亮ならん。

文法の特徴として、先づ數ふ可きは、枕詞(エピトロン)を用ゐることなり。ホメールの「オディッセー」によるも、テレマコスを呼ぶに、單に其名を以



てせずして、必ず其前に『伶俐なる青年』の語を加へ、又アテーチと云はずして『紺青眼のアテーチ』と云ひ、其美目なることを現はせり、ゲーテも之に倣いて、『働ある旅宿の主人』、『温良なる母』、『如才なき家婦』、『察しよき牧師』等の語を用ゐたり。

次に三人稱の代りに、屢二人稱を用ゐ、詩人と其作中の人物と對話せる如き躰となせることなり、第六歌の第二百九十八行、三百二行、及び第七歌の百七十三行参照以上の特徴は、フォッスの『ルイーゼ』にもありて、ホメル流の句法なりとす。

形容詞は、希文、獨文の別なく、名詞の前に置くを通例の法則とす、然るに此叙事詩に於ては、之を名詞の後に於けり、第一歌第十、十七、六十六、百九十九行参照)

次に著るしき點は、二格ゲニテ、イフの語を、之に關係する名詞より分離して、其間に形容詞及び副詞を入るゝとなり、第一歌第九十四、九十五、百九行参照)

其他數へ來れば夥多ありと雖も、實例によらざれば説明し難き箇所多きを以て、茲には其最も顯著なるものを擧ぐるに止めん。

クroppシュトックの『メツシアス』及びフォッスの『ルイーゼ』の句脚は、此詩と相類する所多しと雖も、二詩人は、ゲーテの如き靈活の筆を有せず、フォッスの如きは、後世の批評家をして『何人かゲーテの快活の文字を措いて、勢なきフォッスの辭を誦せん』との冷淡なる語を頭上に加へしむるに至れり、これより詩の梗概を、各歌につき略述せん。

時は千七百九十五年八月の頃、殘暑尙威を逞ふすと雖も、農民皆收穫の期將に近きに在るを喜びつゝあるの候なり、場所はライン右岸の小邑なり、全篇の動作は午に始まり夕に終るものにして、凡そ六時間にて終結す、各歌は文藝の女神、『ミューズ』の名を以て題辭となせり。

第一歌、カリオーベ(叙事詩の女神)

ライン川に程近き村に『ツーム、ゴルゲン、レーエン』と呼ぶ一小旅舎あり、主人は、妻と共に店先に座して、日常の物語をなせり、佛蘭西よりの

第四編 新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クリシチアスムス及びロマンタイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クワンテスムス、第七章、ゲーテ。

落人夥多此町を過ぐ質朴なる村の住民は悉く出て、其不遇の運命に同情を寄せ、あらゆる手を盡して、救助を法を講ぜり、旅舎の一子ヘルマンは、自から衣服、食料を車に積み、逃亡者に分與せんとて出て行けり。隣に住める藥劑師及び近所の牧師は、主人を訪ひ來りて、各見聞せし様子などを話す。主人は、兩人を奥の涼しき部屋に通し、倉より出せし葡萄酒を傾けて、暑氣を散ぜんとす。三人鼎座、舌鼓打ち鳴らして、幾度も杯を傾く。主人は、早く世の泰平無事に復するを望むと云ひ、話の序に一子ヘルマンに眞縁を求めんとの意を語たり出でたり。

第二歌、テルプシヒヨレ(舞蹈の女神)

第一歌の静かなるに反して、第二歌は活氣を帶べり、主人公が二客と對座して、談漸く熟するの時、ヘルマンは汗を拭ひつゝ、空車を牽きて歸り來れり。炯眼なる牧師は、ヘルマンの顔色によりて、其心を看破せり。ヘルマンは直に母に向かいて、持ち行きし食料衣服は悉く列中の憐む可き産婦に與へたりと告げ、且つ深切に此産婦を勞はりつゝありし一婦

人を見しことを語り出でたり。藥劑師は、機を逸せず、ヘルマンの心を試めせしに、案に違はず、ヘルマンは、此婦人に深き思を寄せ居れり。茲に兩親の意見衝突せり。母はヘルマンの味方すと雖も、父は、或富家の女を娶はさんとの意を告げて、ヘルマンの願を許可せざるなり。茲に於てヘルマンは、不平に堪へず、滿面朱を漲ぎて、家の外に出て行けり。

第三歌、タリリア(喜劇の女神)

溫良にして察し善き母は、ヘルマンの不機嫌を氣遣ひて、父の言に反抗せんとす。されど世間慣れし藥劑師は、父の言に相槌打ちて、生計日に高まる世に於ては、家計の事も熟考せざる可からざる旨を告ぐ。

第四歌、オイテルペ(抒情詩の女神)

母は、ヘルマンの跡を追ひて、出て行けり。レッシングの「ラオコオン論」に於て、ホメールはアキレスの橋を叙するに完成のものとせずして、之を作り上げんとする動作によりて記述せしことを云へり。且つ又此點に於て、ホメールの詩才が、非ルギールに、一頭地を抜けることをも述べた

り。此歌に於てゲーテは、レッスングの説に倣ひ、旅舎の所有物を、其儘に叙ぶるの無趣味なるを避けて、母がヘルマンを探がし廻はる動作によりて之を述ぶ。母は此處彼處と導ね廻はりしが、何處にも見當らざりしかば、不圖裏の畑中の小高き丘上に登れば、ヘルマンが平常屈楚の隠れ場所と定めたる梨の木の下に愛に沈み、目に涙を浮べて、黙座せるを見出せり。母はヘルマンに近づき、色々と慰めて、其真意を聞けば、ヘルマンは、遂に白状し、かの女と結婚すること叶はずば、兵士となりて、一生家に歸らざる可しと告ぐ。母は愛子を兵士となすを好まず、ヘルマンの味方して、父の意見を枉げんことに助力せんと約せり。

#### 第五歌、ポリフムニア(讚美歌の女神)

後に残りし三人の友は、互に談笑して時を移せり。纏て母は、ヘルマンを伴ひて歸り來れり。牧師、藥劑師は、母の苦心に同情を表し、ヘルマンを氣の毒に思ひ、ヘルマンと共にかの女の素性を探ぐらんと發議せり。ヘルマンは大に喜びて、逃亡者が休息せる隣村に出て行けり。牧師、藥劑師

は、一先づ逃亡者中の裁判官と談合せんとて出て行き、ヘルマンは村の入口に待ち居れり。

#### 第六歌、クリオ(歴史の女神)

藥劑師が彼の女を探がし廻る間に、牧師は裁判官と佛國の大變事の模様など語る。裁判官は、此騒動起りし時に一婦人あり、女に似ず勇氣ありて、能く働き夥多の全僚を救助せりと物語れり。ざるに此女こそ、ヘルマンが戀ひ慕ふドロテアなれ。此話を聞きて、兩人は、報知を待ち詫びたるヘルマンに事の由を告ぐ。ヘルマンは、親しく其女と語らんと乞へり。依つて兩人は、氣をさかし、ヘルマンを残して、先きに歸り行けり。

#### 第七歌、エラト(愛の歌の神)

ヘルマン及びドロテアの二人が清き泉に姿並べて、其影を寫つせし時は、天にミューズあらば、愛の歌を歌ふべきなり。ドロテアは、賢き女なり。泉の傍に息らひて、ヘルマンと清き談話に耽りしが、泉の傍に長居するは、若かさ女の非難の種子」と云ひて、ヘルマンを誘ひ、共に立ち出て

たり。ヘルマンは、心の底を打ち明くる勇氣なくして召仕の女となすべしとて、ドロテアの承諾を求む。ドロテアは、ヘルマンの願に従ひ、跡を慕ひてつき纏ふ小供等をだまして、同行の群集に別を告ぐ。

第八歌、メルボメテ(悲劇の女神)

夕日の光小山の頂上を輝らすのみ。ヘルマン及びドロテアの二人は、畑道を過ぎて、家に急げり。途中ドロテアは、ヘルマンに向ひ、家に在りて、如何なる務をなす可きやと問へど、ヘルマンは尙躊躇して、其眞意を洩らす能はざるなり。二人は、相並んで暫時梨の木の下に立てり。先きにヘルマンが、失望の眼を以て眺めたる梨の實は、今や好望の色を呈せり。此時空に雲起りて日の光を蔽ふ。二人は畑中の坂を下らんとせしが、ドロテアは、躓きて將に倒れんとす。正直なるヘルマンは、倒れんとして思はず胸にすがりつきしドロテアを助けしも、愛情溢るゝ己が胸に抱くことを敢てする能はざりき。

第九歌、ウラーニア(天文の女神)

ヘルマンはドロテアを伴ひて家に歸れり。牧師に托して、ドロテアに其本意を傳へんとせり。然るに父は、直にドロテアに、花嫁の挨拶をなしたり。ドロテアは父の言を聞き少しく不審を抱きしも、遂に事情明かになりしかば、ヘルマンの望に従へり。茲に叙事詩は芽出度き終局を結ぶ。

フムボルトの語を引用して、茲に此詩の評論に代へんとす。フムボルトは云へり、あらゆる詩歌中「ヘルマン、ウント、ドロテア」の如く完全なるはあらず。ゲーテの詩才は、他の傑作に於て更に華かに活氣を帯びて、發揮せしならん。されど諸種の單獨なる詩材を捕へ來つて、能く此等を綜合融和して、一完結となせること、此作の如きは、他に比類なかる可し。

(ヤ) 『ファウスト』

ゲーテが『ファウスト』に、始めて筆を執りしは、千七百七十四年即ち天才時代に在り。千七百九十年、斷篇の『ファウスト』出で、千八百八年第一篇出で、而して完成せしは、千八百三十一年死期に先つこと僅かに八月の頃

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クウンツァス、ムス、及びロマンタイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クワシサス、ムス、第七卷、ゲーテ。

にして、此間凡そ六十有餘年なり。

『ファウスト』は、ゲーテが最後の傑作たるのみならず、十八、十九二世紀に跨がれる最も長年月を要したる大作なり。詩材は、十六世紀の魔術家ヨハン・ファウスト博士の傳記に出づ。魔術家ファウストとは、傳記によれば、智力上無限の要求をなし、常に満足する能はずして、魔術を學び、惡魔に誘惑されて滅亡したる人なり。千五百九十年の頃英人マ、ルローは此傳説によりて、一悲劇を書けり。此悲劇は英國俳優(エングリッシュ・コメディアンテン)の渡來と共に、獨逸に傳來し、其後人形芝居にて屢演せられ、ゲータも幼時之を見しことありき。レッシングは、嘗てファウストを主人公として、劇詩を書かんとせしも完成せずしてやみぬ。天才主義者のミューレル、クリンゲル等を始めとし、其他多くの文士は、ファウストを劇詩の題目とせしも、皆失敗に終りたり。かく夥多の文士によりて試みられ、然かも一人も成功せざりしファウスト傳説は、大詩人ゲーテの靈筆によりて、大劇詩となり、古今無比の名聲を博するに至れり。

『ファウスト』に關する評論、註釋、翻譯等の書は、積んで山をなし、諸説を參酌して、論評を試みんと欲せば、數百頁を以てして、猶足れりとせず、されどこれ到底紙幅の許さざる所なり。獨逸文學史に筆を執るは、此書を以て最後となすにあらざる可し、他日更に研究を重ねて大に論ずる所あらんとす。茲には僅かに其梗概を擧げ、之に添ふるに短評を以てして、甘んぜざるを得ざるなり。

『ファウスト』曲は、二篇より成る。第一篇の劈頭に『ツィアイグマンク』あり、次いで『フェールシュピール、アッフ、デム、テアーテル』あり、されど是等は本文に直接の關係なきを以て、茲に述べず。『天上の幕』(プロローグ、イム、ヒムメル)を以て、曲の梗概を叙述し始めんとす。

此幕に於て天帝と惡魔(メフィストフェレス)との問答あり。天帝は惡魔に向かひて語り玉はく、ファウストは勇往邁進の氣象に富み、何事にも満足せざるも、彼は善良なる目的を以て進む故、一度は失敗すとも、再び正道に復歸す可しと、ざるに惡魔は、天帝の言に反對して曰はく、然らば我ファ

## 第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クワシナスマス、及びロマンタイスマス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クワシナスマス、第七章、ゲータ。

ウストを墮落せしめんと。茲に於て悪魔は、天帝と賭をなせり。此次に来るは、本文第一篇にして、ファウストの獨言なり。博士ファウストは、孤燈の下に書を開き、深更に至る迄、書齋に在りて、孜々忘らざるなり。忽ちにして嘆聲を發して曰はく、『噫、我は宇宙の真理を究めんとし、哲學、法律、醫學、神學等全力を盡くして學べり、然かも何の得る所ぞ』と。蓋しファウストは、宇宙間のあらゆる真理を究めずしては、満足する能はざるなり。されど高遠幽玄の理を究めん事は、人間一生の智力にては、容易の事にあらず。茲に於てファウスト謂へらく、如何に專心一意に勉強すとも、天地間萬有の理を究むること難しとせば、書冊堆裏に心を勞せんよりは、若かず魔術を學んで、世間を自由自在に動かし、社會を氣儘勝手に弄ばんにはと。ファウストは、魔術書を開き、其一節を讀んで、呪文を唱ふ。地神(エルドガイスト)其聲に應じて、室の一隅に火焰と共に現はる。ファウストは地神の恐ろしき姿を見て、魂を失へり。地神は怒つて消え失せたり。魔法を授く可き地神出てしも、忽ち去りしかば、ファウストは、大に失望落膽して、毒を仰い

て死せんとす。時に東方白を呈して、曙光將に屋上を射らんとし、街上は復活祭の初日にて、曉を待ち兼ねし童男童女が『イエスは蘇生せり』と、一齊に歌ふ聲聞こゆ。死を決して煩悶の中に在りしファウストは、此喜ばしき童謡を聞きて、幼時の事を想ひ起し、直ちに其意を翻へせり。

ファウストは、弟子を伴ひて、市中を散歩せり。然るに悪魔は、猶に姿を變へて、ファウストに従ひ來り、共に其家に行けり。ファウストが呪文を唱ふるに及んで、猶は正體を現はせり。悪魔は天帝との約束を實行せんと欲し、先づファウストの心を試めさんとして曰はく、『我終生汝に仕へん。されど若し余が汝に對する行爲が、汝の意に適し、汝が夫に満足せし時は、余は汝の魂を奪はん』と。ファウストは承諾せり。茲に於て悪魔は、先づファウストを萊府の『アウエルバハスケルレル』(酒屋、今猶盛なりと云ふ)に導き、酒に酔はせて、前後忘却せしめんとせり。されどファウストは、一向に喜ぶ様子見へざりき。依て悪魔は更にファウストを、『ヘキセンキッツヘー』に伴ひ行き、て、魔藥を飲ましむ。鶴髮亂れて絲の如き老翁。ファウストは、忽ちにして、婉

## 第四編

新南國遊歷時代の文學(宗教改革より現代迄)

(ツラシチヌス、ムス、及びロマンテイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○ツラシチヌス、ムス、第七章、カーア。

轉たる蛾眉の青年となれり。ファウストは悪魔と共に、市中を散歩し、一人の田舎娘に遇ひ、燃ゆる如き戀慕の情を起せり。これより第一篇の終り迄は、有名なる「グレイチヒェン悲劇」にして、主人公ファウストよりは、戀人のグレイチヒェンが、却て觀客の同情を惹くこと多し。これグレイチヒェンが女性格を描がくに巧なりしによるなり。ファウストに慕はれし爲め、清淨無垢のグレイチヒェンは、純潔の心を汚がして、大罪を犯せり。可憐の少女は子殺の罪にて、牢獄に投ぜらる。されど一度邪道に入りし少女は、遂に身を殺して贖罪をなせり。グレイチヒェンの臨終に際して、天上に聲あり、救はれたり」と、而してグレイチヒェンは上天せり。然るにファウストは、我と共に來たれ」と云へる悪魔に誘はれて何處へか消え失せたり。此時聲あり、ハインリヒよハインリヒよと連呼せり。これグレイチヒェンが、戀人ファウストの名を呼びたるなり。ファウストは、グレイチヒェンと共に上天の榮を得ざりしと雖も、未だ全く棄てられず、他日は共に眞如の月を賞するの望ありき。これにて第一篇終る。

第一篇二十四幕は、終始一貫して、動作の連絡を保てりと雖も、第二篇五齣は、各齣更に連貫せずして、箇々獨立せり。而して文藝上の價值も、第一篇より遙かに劣れりとは、一般の批評家の云ふ所なり。

ファウストは、悪魔に伴はれ、雲霧に乗じて、何方へか連れ行かれ、大なる苦痛を受けたり。然るに山川天地の聖靈出て來りて、様々にファウストを慰籍せしかば、ファウストは、氣分漸く回復せり。次の齣にて、ファウストは、悪魔と共に獨逸國の或王家に行けり。時に此王家は、財政困難して國庫缺乏を告げんとせり。悪魔魔術を行ふや、巨萬の富、立るに現はる。次いでファウストは、幻術を試みて朝廷の群臣を驚かさんとす。香の煙の中より、トロイ國の王子美少年パリス現はる。次いで希臘の王后ヘレナ現はる。ヘレナは、パリスの臥せる側に近寄らんとす。パリスは眼を覺まし、ヘレナは驚ひて退く。かくする間にパリスの姿は消えて、之に代りて鎧武者現はれ、美人ヘレナを見るや、之を奪ひ去らんとせり。物に感じ易きファウストは、飛び立ちて、己が魔術を行ひしことを忘れ、鎧武者をヘレナより引

き離さんとす。ファウスト近づくや大なる爆聲を發し、人物は煙となりて消え失せ、ファウストは氣絶せり。かくて悪魔はファウストと共に、王家を去りて學者ワグネルを訪問せり。ワグネルは、手細工にて人間を作るの術を發明せり。此人間を「人工の人」(ホムンクルス)と云ひ、非常に才智あり。ファウスト及び悪魔は、此人工の人に誘はれて、希臘に行けり。ファウストは、希臘に行くや、直ちにヘレナの在所を尋ねしに地下に在りと聞きて、遂に地下の女神ヘルセフォテに乞うて、ヘレナに遇へり。ファウストは、ヘレナと相携へて、地上に出づ。ざるに希臘は、今やトロイ戦争に勝ちて、メテラウス王が王后ヘレナを取り戻し來れる時なり。ヘレナは年久しく異郷に在りて歸り來り、身の安全を喜びつゝあるに豈圖らんや、將に殺害されんとす。ヘレナは大に恐懼の念を抱きしが、偶人あり、北方の王希臘に攻め入らんとす。而して此王はヘレナを救ふ可しと告ぐ。ヘレナは、喜び行いて見るに、これファウストなり。

ファウスト、ヘレナ二人は、大に其奇遇を喜び直ちに婚禮の式を挙げ、其

間に二人の男子を擧ぐ、其一人オイフォリオン天死す、これゲーテが、熱血薄命の詩人バイロンを寫せしなり。其後間もなくヘレナも死せり。ファウストは、ヘレナが地下に返らんとする時、別を惜みて、互に抱き合ひしが、掌中には、只其衣服のみ残り、此衣服は、雲となり、ファウストを乗せて、北方さして飛び行けり。焉んぞ知らんこれ夢なり。ファウストは、夢頓に覺めて大に不快ならんとする時、早くも悪魔は來りて、ファウストを術中に陥れたりと考へ、ファウストに向ひて、希臘旅行中面白き事ありしやと問ひしに、ファウストは、猶満足の色を現はさずして、海岸荒蕪の地を開墾せんとの希望ありと答へたり。依て悪魔は、再びファウストを伴ひて、嘗て魔術にて、財政整理の恩恵を施したる王家に赴きしが、時恰も此王家は、敵軍に圍まれ落城の日近きに在るの時なり。悪魔は再び魔術にて圍を解きて、王家の難を救ひ、其報酬として開墾すべき土地を得たり。ファウストは、苦心して開拓すと雖も、悪魔が弟子を伴ひ來りて、傍より破壊せしかば、開墾事業は幾年を経るとも効果擧らざりき。されどファウストとは、死に



至る迄其業を廢せざりき。ファウストは、死に臨んで云へり、かくして立派なる村落が出来しならば、余は満足すべしと。かくファウストは、死に至る迄安心を得ず、先へ先へと進まんを欲する心已まずして、遂に逝けり。悪魔はファウストの魂を奪ひて、地獄に持ち行かんとせしが、天使天下りて、悪魔と争ひ、悪魔は遂に此争に敗る。天帝の言は遂に動かす可からざるなり。時に聖母マリア及び戀人グレイチヒェンも出て來りて、ファウストを天國に連れ行けり。傳説のファウストは、地獄に落ちしも、此の曲のファウストとは上天の光榮を得たり。以上は「ファウスト」曲の梗概なりとす。

單に梗概を叙する時は、大劇詩「ファウスト」も、駄作と擇ぶ所なく、大理想那邊に存するやを疑ふ可くして、又興味頗る索然たらざるを得ざるなり。然りと雖も、ゲーテの人生觀、世界觀、思想の變遷等一に此作に現はるものにして、世界文學中最大傑作の一に數ふ可きは、何人も疑はざる所なりとす。

「ファウスト」第一篇の女主人公グレイチヒェンに對して、第二篇にヘレナ

あり。グレイチヒェンは、ゲーテが實際戀慕したる少女なりと雖も、ヘレナは遠き古の美人にして、詩人の理想的の愛人なり。「ファウスト」曲の立案始めて成りしは、千七百七十四年にして、天才主義絶頂に達したる時代なり。前年「ゲッツ」曲成りて、此年「エルテル」出で、翌年「ウルファウスト」出づ。而してゲーテが「ファウスト」曲に、最後の筆を下せしは、十九世紀新思潮勃興の時代に在りとす。茲を以て吾人は「ファウスト」曲により、ゲーテの青年時代より、晩年に至る迄の思想の變遷を伺ふことを得るなり。即ち第一篇は「ゲッツ」「エルテル」等に比して、文辭平穩なりと雖も、最初の獨言「グレイチヒェン悲劇」等には、シントラノスブルグ時代の豪放にして多感なる心情は、自から現はるゝなり。ヘレナとの愛は、伊太利旅行の感化にして、古希追慕の思想の發現なり。第一篇に於て、ファウストが、グレイチヒェンと相見で、戀慕禁ずる能はざるは「エルテルス、ライデン」中のロッテとエルテルとの關係に外ならず。ファウストが多感多涙の人たることを證するなり。エルテルは戀愛の遂げられざるや失望落膽して、遂に自殺せり。され

どファウストはグレイチヒェンを死より救はんとせしも、共に命を擲たんとせず。エルテルは、失戀を以て死し、ファウストは、愛人死して尙死する能はざるなり。エルテルの死せしは、天才主義なり。ファウストの死する能はざるは、天才主義が歩を轉じて、更に遠き理想に向つて進まんとするなり。グレイチヒェン死して尙死する能はず、諸國を流浪せるファウストは、タクリスに禁錮されたるイフ、ゲーニエと全じく、此世に在りて、猶求む可き一の理想を有せり、而して遂に希臘に行けり、茲に於てクラシチスムスの理想は成就せり、されど頭上雪を戴いて尙衰へざるファウストは、茲に留まる能はざるなり。古希欽慕のクラシチスムスと、近世思想のロマンチスムスとを合一融和せんとせしは、ゲーテ獨特の創見に非らずと雖も、其著一世を變動して、華々しく此理想を唱導したるは、實にゲーテの『ファウスト』を以て嚆矢となさざる可からざるなり。

ファウストは、古代の希臘に行けり、而して更に進んで、地下にヘレナを尋ねて、地上に招き、遂に親しき契を結べり。ファウストとヘレナとの結婚

は、クラシチスムスとロマンチスムスとの美しくしき融合一致の比喩なること明かなり。されど兩者の合同は、單に理想に止まりて、遂に自滅の已むを得ざるに至れり、即ち知るファウストとヘレナとの間に設けられしオイフリオンは、薄命を以て終り、ヘレナは、再び地下に歸れり。さは云へ、ヘレナは去るに臨んで、纏ひし衣を殘せり。これロマンチスムスがクラシチスムスより讓與さる可き『愛美』の理想なりしなり。

ファウストは、富を得んことを願はず、事業をなさんことを願へり、而して世の無趣味を開發せんと企てたり、即ち美術を以て、世道人心を開發せんとするは、單に理想に止まらずして、實踐躬行せんと欲したる所なり。グレイチヒェンと交はり、ヘレナと親みたるファウストは、其美を慕ひ、美が積極的にして且つ建設的なることを知れり。ファウストは、又惡魔と語らひて、其醜惡を忌み、醜惡の消極的にして、破壊的なることを知れり。醜を棄て、美を好むは、蓋し人の至情なり。豈獨りファウストのみならんや、茲に於てか知る、ゲーテがファウストによつて鼓吹せんとする大目的は、

實世間を離れたるオイフリオンの理想にあらず、又地上に實現す可からざる悪魔の實利主義にあらずして、他に在るなり、即ち實際を理想化し、理想を實現化せんとするフューストの世界救済的事業にありとす。

第八章 シルレル

詩才は、天の附與する所にして、詩人は自然の生ずる所ならん、宜なる哉、キルテムブルグの地たるや、氣暖かにして、山險しからず、谷深からず、牧野平坦にして、森林繁茂し、而して清泉到る處に湧き、天然の風光一として、人目を慰めざるはなし、夏季に於て炎暑の威なく、時秋に及んては、葡萄野に満ちて、珠玉を運ねたるが如し、地上の樂園とは、此地をしも名づけずんば、將た何處をか名づけん、詩人シルレルは、此樂園中に生まる。

第一期 青年時代(千七百五十九年—千七百八十五年)

(1) ヨハン、クリストフ、フリードリヒ、シルレルは、千七百五十九年十一月十日キルテムブルグのテューカル燐中のマルバハに生まる、父ヨハン、カスバルは、嘗て外科醫なりしも、七年戦争に際して兵役に服し、シルレルの



予が愛する詩人シルレル

實世間を離れたるオイソンの理想にあらず、又地上に實現す可からざる悪魔の實利主義にあらずして、他に在るなり、即ち實際を理想化し、理想を實現化せんとするフッストの世界救済的事業にありとす。

第八章 シルレル。

詩才は、天の附與する所にして、詩人は自然の生ずる所ならん。宜なる哉キルテムブルグの地たるや、氣暖かにして、山險しからず、谷深からず、牧野平坦にして、森林繁茂し、而して清泉到る處に湧き、天然の風光一として、人目を慰めざるはなし。夏季に於て炎暑の威なく、時秋に及んては、葡萄野に満ちて、珠玉を連ねたるが如し。地上の樂園とは、此地をしも名づけずんば、將た何處をか名づけん。詩人シルレルは、此樂園中に生まる。

第一期 青年時代千七百五十九年——千七百八十五年

(1) ヨハン、クリストフ、フリードリヒ、シルレルは、千七百五十九年十一月十日キルテムブルグのツァルザウグのマルバハに生まる。父ヨハン、カスバルは、嘗て外科醫なりしも、七年戦争に際して兵役に服し、シルレルの



予が敬愛する詩人シルレル

生れし頃は中尉なりき、後累進して大尉となれり、母をエリザベートと云ひ、資性温良にして、文學を嗜み、詩人の母としてゲーテの母に劣らず、然かも其名の同一なるは、偶合にして、偶合ならざるが如し、父は屢轉隊せしかば、幼兒シルレルも、之に従ひて居所を變へ、各地に於て教育を受けたり、千七百六十四年の始め、父カスバルは、徵兵事務官となり、小都邑ロルヒに行けり、シルレルも隨行し、牧師モーゼルの教を受けたり、後にシルレルは、處女作『ロイベル』中にモーゼルの人物を描がけり、シルレルはロルヒを去りて、ルード非ヒスブルグの羅甸學校に入れり、蓋し神學を學ばんが爲なりしなり、舊約全書を始めとし、ルテル、パウ、ゲルハルト、ゲルレルト等の歌は、シルレルが早くより吟誦したる所なり、ルード非ヒスブルクに移りて間もなく、シルレルは、神學の研究を廢するの已むを得ざるに至れり、當時公爵カール、オイゲンは、ソリティエ、イデ城内に、陸軍學校を設立して、部下の士官の子弟に、軍事教育を施さんとせり、さればシルレルも、父が軍人たるの故を以て、無理に此學校に

4. Über den Zusammenhang der tierischen Natur  
des Menschen mit seiner geistigen.

入學せしめられたり。シルレルが此學校に入りしは、千七百七十三年にして、千七百八十年迄在學したり。千七百七十五年校舎ストットガルトに移轉すると共に、名もアカデミーと變じ、醫學の講義をも加へられたり。依てシルレルは、始め法律を學ばんとせしも、直に醫學に變更したり。校則嚴重にして、全く陸軍風の壓制を受け、世間との交通遮断され、窮屈なる境遇にありしも、シルレルは暇を盗みて、ルソーの作、オッシアンの歌、クロツプシュトックの大叙事詩、メツシアス、ゲーテの『ゲツツ』及び『エルテル』、ゲルシステムベルグの『ウゴリノ』、ライゼキッツの『ユリウス』、フォン、ダレント、『ミューレルの』、『ファウスト』等を受讀したり。シルレルは『メツシアス』を讀んで、叙事詩を作らんとの考を起し、シエクスピアの研鑽によりて劇詩家となれり。

千七百八十年(イ) 『人類の獸的性質と精神的性質との關係に就いて』の論文出て、千七百八十一年シルレル十八歳の時、處女作劇詩『群盜』(ディロイベル)出づ。翌年一月十三日マンハイムに於て初興行をなし、大喝采

を博したり。然るにカール、オイゲン公は、此作が自由思想を以て充ちたるを見て大に喜ばず、シルレルに隣書の外、如何なる作をも出版することを嚴禁したり。シルレルは、公爵の許可を得ずして、『ロイベル』興行の様様を見んとて、マンハイムに赴かんとし、逮捕されて十四日間禁錮の身となれり。公爵はシルレルに詩歌を作ることと嚴禁せり。されどシルレルは『ロイベル』を終はりて、直ちに第二の曲を試みつゝありき。

千七百八十二年九月二十二日シルレルは、軍醫の職を去つて、友人にて音樂師なるアンドレアス、ストライヒルと共に、奥都維也納に逃げ、更にマンハイムに赴けり。シルレルは、此地の領主ダグベルグ男に、カール、オイゲン公と和解の事を托し、且つ其保護を得んと欲したり。然るにダグベルグ男は無情にもシルレルの懇請を容れざりしかば、シルレルは去つてオッゲルスハイムに至りしも、尙心を安んずる能はず。フルツォーゲン夫人の招聘に應じて、パウエルバハの別荘に避難所を見出せり。此家に移りて後シルレルは、大に寂寞を感じつゝありしが、幸にして、圖書館

α. Die rheinische Thalia.  
β. Die Schaubühne als moralische Anstalt betrachtet.

員ラインワルドと友となりて親交を重ね、後其妹を娶はせり。かくする間に、劇詩「ゲヌア」に於ける「フェスコの陰謀」「ディ、フェルシユエールング、デス、フェスコ、ツィ、ゲヌア」千七百八十二年に成れり。これ天才時代第二の産なり。翌千七百八十三年悲劇「陰謀と戀愛」「カパーレ、ウント、リーベ」成る。此作はストットガルトの禁錮中既に草案成りしものにて、オッゲルスハイムの賤やしき旅舎にて修正を加へ、パウエルバハに來りて完成したり。これ天才時代第三の産なり。以上三作は年を逐うて世に出でたり。第四の作は第三の作に後るゝこと四年餘なり。

「カパーレ、ウント、リーベ」曲が、マンハイム劇場の舞臺に上ぼらんとせし時、此地の領主ダルベルグ男は、シルレルを招きて、此劇場の座附作者となせり。シルレルが宮中御用書肆の娘マルグレーテ、シヨロオンを愛したるは、此頃の事なり。シルレルは、演劇評論の雜誌(ロ)「ディ、ライニッシュェ、タリーア」後にノイエ、タリーアと改名すを發刊したり。此誌上に出でし最初の論文は、「勸善懲惡の場所として見たる劇場」(ハ)「ディ、シャウピ、

ーテ、アルス、モラリッシェ、ア、ンシタルト、ペトラッハテット)なりき。「フェスコ」曲は、千七百八十四年一月十一日に、「カパーレ、ウント、リーベ」曲は、全年四月十五日に興行されたり。此時既にシルレルは、新曲「ドン、カルロス」に筆を染めつゝありき。此曲の初篇は、タリーア誌上に載せられ、第一齣は、シルレル自からダルムシュタットに於て、當時滞在中なりしソイマール公カール、アウグストの前にて朗讀して賞賛を得、ザクセン、クイマール評議員の名譽ある稱號を得たり。此朗讀會に於てシルレルは、シャロット、フョ、ン、カルプ夫人と友誼を結べり。

活計の裕ならざるは、文士の常なり。シルレルは、文壇に聲名を博したること斯の如し、されど大に生計に窮せり。依て一日も早くマンハイムを去らんことを欲せしも、其時を得ざりしが、偶々親友ケルテルが萊府に在りて、頻りにシルレルの來府を望みしかば、シルレルは、喜んで行けり。而してケルテルの世話によりて、財政上の苦痛を免がれたり。

第二期成熟時代 (千七百八十五年——千七百九十四年)

第四編

新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クワシテ、スミス及ビ、ロマンテ、イ、スミス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クワシテ、スミス、第八卷、シルレル。

シルレルは、ケルテルの招きに応じて、千七百八十五年四月マンハイムを去り、萊府に至れり。ケルテルは、シルレルの著後間もなくドレスデンに轉任せしも、其際シルレルの爲めに、萊府の隣村ゴロリスに居室を構へしむ。夏を過ぎてシルレルは、ケルテルの後を追うて、ドレスデンに行き、ケルテルの家族と共に、一家團樂の仲間入をなし、幸福なる生活を送れり。シルレルは此頃「歡喜の歌」*ゲス、リード、アン、デイ、フロイデ*を作れり。ケルテルはドレスデンに近かき、エルペ川に沿へるロシュカッツ村に、一の葡萄園を有したり。シルレルは、此の園内の小屋にて、千七百八十七年「ドン、カルロス」曲を完成したり。此の曲は先きの三曲とは、大に其趣を異にするものにして、暴力に訴へ、革命主義を唱ふるものにあらざるなり。先きの三曲は、消極的にして、舊制を打撃し、破壊するにありと雖も、此曲は、然らずして積極的なり。既存の状態を破壊すると共に、之に代ふるに更に新らしき物を以てせんとす。故に舊物舊慣の破壊は、無闇に目的なく、なざるゝにあらずして、一種の理想によりて行はるゝなり。「ロイベル」

「フィエスコ」、「カバール、ウント、リーベ」等の曲は、一種の理想を描がけるには相異なきも、詩人が血氣の勇に任せ、青年の新氣に乗じて、鬱勃の氣を散じたるの跡歷々たり。然るに此曲に至りては、徒らに暴力を主張せず、革命的氣焰を擧げずして、智識の光、言論の刃を以て、世界を改造せんとするなり。「ドン、カルロス」曲の稿を終へて、シルレルは、全年の七月廿一日ドレスデンを去り、文學の淵藪地たるワイマールに行けり。當時ゲーテは伊太利旅行中なり。シルレルは、ワイマールよりマイニンゲンに至り、ラインワルドに嫁したる妹を訪ひ、又パウエルバハにヨルツォーゲン夫人を訪へり。歸途シルレルは、ルードルシュタットを過ぎ、嘗て一面の識ありしレンゲフェルド夫人及び二人の娘に會合し、妹シャロッテとは、後に鴛鴦の契を結ぶに至れり。シルレルは、レンゲフェルドの家族と親交を重ねんとて、千七百八十八年の夏秋の候は、ルードルシュタットに近き、一邑に居をトしたり。レンゲフェルド夫人は、文學の嗜好に富める婦人にして、ゲーテも屢來訪したり。依てゲーテ、シルレルの二人は、此の婦人の家に相見し

## 第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウチテムスス及びロマンティスムス。千七百四十八年より千八百四十八年迄。) ○クラウチテムスス。 第八章 シルレル。



二. Geschichte des Abfalls der  
vereinigten Niederlande.  
三. Was heisst und zu welchem Ende  
studiert man Universalgeschichte.

ことありしも、未だ親交を結ぶに至らざりき。當時シルレルは、ケルテルに書を寄せて、ゲーテを評して云へり、「彼の性質は、余と全然相反せり。彼の世界観は、余と同じからず、事物の概念に於ても相異なれり」と。シルレルは、ワイマールに歸りて後、ヘルデル及びハイランドと意氣最も能く相投じたり。さればシルレルは、ハイランドに勵まされて古希の文學を熱心に研究じ、オイリビダスの作「イフイデーニエ、イン、アウリス」及びギール「エチイデー」の第二卷及び第四卷を翻譯したり。シルレルが古希の文化を追慕したるを明かに證するは、「希臘の諸神」(ディ、ゲッテル、ギリ、ヒュンランツ)及び「藝術家」(ディ、キユンストレル)の二詩なり。二篇共に希臘文藝の壯嚴優麗なることを賞揚したるものなり。前者は希臘主義を盛んに鼓吹したるものにして、後者は、人類の發展は、一に藝術の美にあり、美術を以て世道人心を啓發すべし、眞の美は、眞理に到達すべき階梯なり、美術は、人類の最初の開發者なり、而して美術家は、人類の教育者なり、美術の門を過ぎて、智識の堂上に達す可しと云ふにあり。

第四曲「ドン、カルロス」を終へて後、シルレルは、専ら心を歴史の研究に用ゐて、暫く詩文と親まざりき。シルレルの歴史研究は、ブルタークの傳記物に始まりしものにして、千七百八十八年には「和蘭共和國謀叛史」(ニ) (ゲシヒテ、デス、アプファルス、デル、フライニヒテン、ニ、デルランデ) 出て、翌千七百八十九年ゲーテの紹介によりて、イエーナ大學の歴史の講座に立つことゝなれり。第一回の講演は、全年五月廿六日にして、其題目は「世界史とは何ぞや、而して之を研究する目的如何」(カ) 「ワス、ハイスト、ウント、ツ、エルヒエム、エンデ、シュト、デルト、マン、ウニベルザールゲシヒテ) なりき。此講義は、シルレルが、最も其心を苦めたるものにして、當時の状況は自から書せり。シルレルは、始めて教授となり、未だ自己の講座を有せず、一教授の講座を借り受けしが、聽講者意外に多くして、場所の狹隘を告げ、更に大講堂に移りしが、猶廊下、玄關等人の山を築きたりと云ふ、これシルレルが最も得意として傳ふる所なり。シルレルは、歴史家として、獨特の見識を有し、詩文以外に一の抱負を有したり、「人民移轉」(十

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
「クラシチスムス」及び「ロマンチスムス」千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラシチスムス 第八卷、シルレル。

字軍、「中古」第一十字軍時代に於ける歐洲國勢要覽等は、歴史に關する論文中最も著名なるものにして、歴史の大作にては、先きに擧げたる和蘭共和國謀叛史及び三十年戦争史(へ)、(ゲシヒテ、デス、ドライシヒエーリゲン、クリーグス)の二作最も名あり。

かくシルレルは、歴史に關する夥多の著書をなし、優に斯界の學者を以て、目せらるべしと雖も、其研究法は、専門の歴史家と頗る其趣を異にし、又自から専門の歴史家たるの名譽を負はんことを願はざりき。シルレルの歴史は、叙述巧妙にして、文牋優雅且つ一種の理想を有したり。シルレルの歴史研究の立脚點は、一般人類のなり。シルレルは、劇詩に於けると同じく、歴史に於ても、人類の自由、人類の價值、人類の權利を主張したり。されば一事件を述ぶるも、事實の正確を主とせずして、政治上及び宗教上の抑壓に反抗の意見を述べたるなり。「和蘭共和國謀叛史」は、民權自由を呼號したるものにして、「三十年戦争史」は、信仰自由を唱道したるものなり。従つて歴史上の人物も、著者の考によりて左右され、一人物を

寫さんが爲めに、過大の勞を取りしこと多く、且つ此人物を取り除かば、歴史は大に興味を減殺することを免がれざりき。茲に於て「和蘭共和國謀叛史」は、アルバ公の權威の扶植を叙するを以て終り、「三十年戦争史」は、グスターブ、アドルフ死し、ワルレルシュタイン暗殺されて後は、大に簡約さる。

イエーナ大學に於て、歴史の講義に名聲を擧げたる翌年即ち千七百九十年、シルレルは、シャロット、フォン、レンゲフェルトと婚し、マイニンゲンの宮中顧問官の職に就きしが、後幾ばくもなくして、重病に罹れり。病は長年月を経て、容易に癒えず、加ふるに生計窮乏を告げたり。幸にして、クリステイアン、フリドリヒ、ホルシュタイン、アウグステンブルグの太子及び丁抹の宰相シムメルマンの好意によりて、四ヶ年間年々一千ターレルの贈與を得て、債鬼の難を免がれたり。

病漸く癒るや、シルレルは歴史研究をやめて、哲學の研究に移れり。ドレスデンに在りし頃より、シルレルは、ケルネルに、カント哲學の研究を

v. Schiller als Historiker. x. Über das Erhabene.  
 カ. Schiller als Philosoph. ル. Briefe über ästhetische Erziehung des Menschen.  
 \* Die Abhandlung über naive und sentimentarische Dichtung.

f. Über den Grund des Vergnügens an tragischen Gegenständen.  
 7. Über die tragische Kunst.  
 4. Über Anmut und Würde.

勸められしも、未だ意を決せざりしが、イエーナに至り、ラインホルドと交はるに及んで、愈カント哲學を研究するに至れり。シルレルは哲學に於ても、純正哲學よりは、倫理及び審美學の方面を主としたり。カントの『判断力の批判』は、其最も力を盡くして研究したる所なり。

歴史は、人類の外的生活を教へ、而して哲學は、内的生活を教ふ。シルレルが歴史研究を終へて更に哲學に移りしも大に故あるなり。

ゲーテが、伊太利に旅行し、古希の美術を見て、思想の圓熟をなしたるが如く、シルレルは、哲學及び審美學の研究によりて大に悟る所ありたり。シルレルが、審美學を研究せしは、主として、悲劇の精髓を明らかにせんが爲めなりき。従つて哲學的審美的の論文夥多出てたり。

- (ト) 『ユーベル、デン、グールド、デス、ブルグニエーゲンス、アン、トラギッ  
 シェン、ゲーゲンシユテン、デン』
- (チ) 『ユーベル、デイ、トラギッ、ジョー、クンスト』
- (リ) 『ユーベル、アン、ムート、ウン、ト、非、ル、デ』

- (ル)(ス) 『ユーベル、ダス、エル、ハーベチ』
- (ル) 『ブリーフ、ユーベル、エステイ、ツシエー、エル、チーフ、ング、デス、メン  
 シェン』
- (オ) 『デイ、アッ、ブ、ハンド、ル、ング、ユーベル、ナイ、エ、ウン、ド、セン、テイ、メン  
 タリ、ツシエー、デイ、ヒ、ツ、ング』

最後の論文は、最も著名なるものにして、近世の感情的詩歌と古代の自然的詩歌との關係を論じたるものなり。

かくシルレルは、歴史家及び哲學者として、斯道の學者の班に列す可きものなり。ヨハンテス、ヤンゼン、は『歴史家としてのシルレル』(フ) (シルレル、アルス、ヒストリー、ケル)の書を著はし、クローノ、フィッシャーは『哲學者としてのシルレル』(シルレル、アルス、フイ、ロゾーフ)の著あり。

第三期 詩人の晩年——ゲーテとの親交時代(千七百九十四年——千八百五年)

シルレル傳の第三期は、ゲーテ傳の第四期シルレルとの親交時代に

第四編 新南獨逸語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
 (クラシチスムス、及びロマンチスムス、千七百四十八年より  
 千八百四十八年迄) ○クラシチスムス、 第八章 シルレル。

當り、二詩人が親交に親交を重ねて、同心協力したる時代なること、ゲートを傳するに當りて、詳述したるが如し、依て此章に於ては、兩詩人の關係は、多く簡約して、再説の勞を避けん。

千七百九十三年の夏、シルレルは、轉地療養の爲め故郷に歸りしも、翌千七百九十四年五月再びイエーナに來れり。此頃シルレルは、雜誌『デイ・ホーレン』を創刊せんとし、詩人、學者等の贊助を得、ホルヘルム、フォン、フムホルトも之に加入し、遂にゲーテも仲間に入り、引き入れられたり、爾後ゲーテ、シルレルが親交を結ぶに至りしこと、前章に述べたるが如し。

『詩人は眞の人なり、眞面目の哲學者は、滑稽に屬す』とは、シルレルが嘗てゲーテに與へて云へる所なり、シルレルは、歴史、哲學及び美學を研鑽せしと雖も、歸する處は、詩歌の熟達にありき。

『デイ・ホーレン』誌は、千七百九十五年より九十七年迄續きたり、此紙上には、主として散文の論説を載せしなり。中にも、人類の美的教化に關する書簡、『自然及び感情的詩歌に關する論文』等は、此誌上に光彩を放ち

たるものなり、千七百九十六年に至り、シルレルは、新たに『ムーゼンアル・マナハ』誌を發刊せり、此誌上に現はれしは、散文に非ずして、哲理的詩歌なりき、『藝術家』、『デイ・キュンストレル』、『散策』、『デル・シニパチール・ガング』、『理想と生活』、『ダス・イデアール』、『ツント』、『ダス・レーベン』、『幸福』、『ダス・グリツク』等は、其最も著名なるものなり。

『散策』は、人類教化の發展に關する所見を述べたるものにして、人生と自然との關係を叙べ、社會生活の狀態を説き、美術及び學術の隆盛及び衰亡の時代を記し、そが救済の唯一の方法として、自然に復歸すべきことを以てせり、而して此理想は、自然の叙景に伴うて叙述せらる。

『理想と生活』は、人は地上の苦痛を忍んで、未來悠久の幸福を得んことを願ふ可し、身體の快樂と精神上の愉快とを融合し、人生を美術によりて、形作るべしとの理想を説けるものなり、『幸福』は、耶穌教的思想を歌へるものにして、最高の幸福は、自己の力によりて得られずして、一に神の惠與するものなり、人は謙讓の徳を以て、神より此幸福を受く可し

と云ふにあり、婦人の品格『ディ、フェルデ、アル、フラウエン』に於て、シルレルは大に婦人を尊重し、世に婦人無かつせば、世は殺伐亂闘に終らん、男子の意氣の衝突を調和するは、婦人の勢力なることを云へり。

『ホーレン』、『ムーゼンアルマナハ』等は、當時の讀書界に歡迎されずして、寧ろ冷遇されしかば、シルレルはゲーテと共に、『クセーニエン』誌を創刊して、盛んに當時の凡庸作家及び其著作を批評したり。これゲーテの傳中に詳述せし所なれば、今更に説かず。

當時シルレルは、ゲーテと競うてバラードを作れり、『手袋』、『デル、ハン、ドシュー』、『ポリクラテスの指輪』、『デル、リング、デス、ポリクラテス』、『騎士、ドッ、ゲンブルグ』、『リッテル、トッケンブルグ』、『潜水者』、『デル、タウヘル』、『イビクスの鶴群』、『ディ、クラニヒヒ、デス、イビクス』、『デル、ガング、ナッハ、デム、アイゼンハムメル』、『龍との闘争』、『デル、カムプフ、ミット、デム、ドラッヘン』、『保證』、『ディ、ビュルグシャフト』、『エロイシスの祭典』、『ダス、エロイジッサー、フェスト』等の諸篇は、聲調、語辭共に優ぐれ、詩中の句は屢引用さるゝ所なり。以上の詩は、千七百九十八

年及び九十九年の兩年相續いて、『ムーゼンアルマナハ』誌上に載せらる。千七百九十九年には有名なる『鐘の歌』、『ダス、リード、フォン、デル、グロッケ』成る。此後に出でしは、『ヘロとレアンデル』、『カッサンドラ』、『ハプスブルク伯』、『デル、グラーフ、フォン、ハプスブルグ』、『勝利の宴』、『ダス、ジーゲスフェスト』、『山の歌』、『ダス、ベルグリード』、『アルプス山の獵夫』、『アルベンエーゲル』等の諸篇なり。

シルレルは『鐘の歌』の成りし同年、劇詩中の大作『ワルレンシュタイン』曲を書けり。此作を終へて、シルレルはゲーテとの友情を一層温めんとして、ワイマールに移れり。此後シルレルは、銳意劇詩に筆を執り、年毎に新作を出せり。即ち千八百年に、『マリア、ステファルト』、千八百一年に、『ディ、ユングフラウ、フォン、オルレアン』、千八百三年に、『ディ、ブラウト、フォン、メツシナ』、千八百四年に、『ホルヘルム、デル』出でたり。

以上五曲と青年時代の四曲『ロイベル』、『カバレー』等とは、シルレル劇詩の傑作と稱せらる。シルレルは、又シェイクスピアの『マクベス』、『ラシーン』の

第四編

新南國逸話時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウシチアス、ムス、及びロマンテイス、ムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クラウシチアス、ムス、 第八章、シルレル。



試筆のルレル

『フェドラ』及びゴッテの『テランドー』等の外國劇を翻譯したり。

四五六

『非ルヘルム、テル』を興行することとなりて、シルレルは、千八百四年の四月より五月迄伯林に赴けり。晩年シルレルは、家計裕かになり、青年の頃より屢心を悩ませし貧の苦を免かるゝを得たり。且つやワイマール公の知遇を得て、文學上の功勞大なりとし、獨逸皇帝より、華族に列せらる。公の太子が、太公爵の女マリア、パンロブナと婚姻の式を擧ぐるに際して、シルレルは『ディフルデグ、デル、キンステ』の一詩を賦して、祝賀の意を表したり。當時『非ルヘルム、テル』舞臺に上ぼりて、好評噴々たりき。此時に當り、詩人は、毫も倦怠の色なくして、新曲(『デメトリウス』)を書きつゝありしが、積年の心勞は、漸く健康を害し、加ふるに宿痾襲ひ來り、四十六歳を一期として、溘然長逝せり。時に千八百五年五月九日なり。莫逆の友ゲーテに後れて生ること十年。然かも先つて世を去ること二十年なり。幾度惜みても、猶盡きざるは、詩人が人生の半に達せざるの短命よりは、寧ろ『デメトリウス』曲が稿半にして、終りたることなり。千八百

『プロドラ』及び『ゴッチのテラランド』等の外國劇を翻譯したり。

四五六

『非ルヘルム、テル』を興行することとなりて、シルレルは、千八百四年の四月より五月迄伯林に赴けり、晩年シルレルは、家計裕かになり、青年の頃より屢心を悩ませし貧の苦を免かるゝを得たり、且つやソイマール公の知遇を得て、文學上の功勞大なりとし、獨逸皇帝より、華族に列せらる。公の太子が、太公傅の女マリア、パンロプナと婚姻の式を擧ぐるに際して、シルレルは、『デインルデイグ、デル、キュンステ』の一詩を賦して、祝賀の意を表したり、當時『非ルヘルム、テル』舞臺に上ほりて、好評噴々たりき。此時に當り、詩人は、毫も倦怠の色なくして、新曲ヨ、『デメトリウス』を書きつゝありしが、積年の心勞は、漸く健康を害し、加ふるに宿痼瘵ひ來り、四十六歳を一期として、溘然長逝せり、時に千八百五年五月九日なり、莫逆の友ゲーテに後れて生ること十年、然かも先つて世を去ること二十年なり、幾度惜みても、猶盡さざるは、詩人が人生の半に達せざるの短命よりは、寧ろデメトリウス曲が稿半にして、終りたることなり、千八百

Die gütige Vorstellung ist mir unendlich  
und dem Ganzen ist schon gungener  
dass ich die Sammlung der Gesetze  
unserer aufstehenden Kunst der  
Zukunft muss. Ich würde mich sehr  
wegen an die Kunst der Kunst der Kunst  
die die Kunst der Kunst der Kunst  
mit so gutem Erfolg gelungen  
sein lassen, und die Kunst der Kunst  
unserer Kunst der Kunst der Kunst  
zu zeigen, ist in der Kunst der Kunst  
finden, jedes mal, mein Dank  
dafür abzugeben.  
Ich bin die Kunst der Kunst der Kunst  
vermöge, Kunst der Kunst der Kunst  
finden. Ich ganz ergeben  
Irene  
d. 20. März 1803. Pöhlke

シルレルの筆蹟

五十九年、詩人の一百年の誕生日に際し、獨逸國民舉て祝賀せりと云ふ、  
主要なる著作の評論、

概論、

『自由』は、シルレルの總ての作を終始一貫せるの理想なり。シルレルは、  
青年の間、身軀上の自由を得んことを努め、後年に於ては、精神上の拘束  
を脱せんことに盡力せり』とは、ゲーテがシルレルを評したる語にして、  
シルレル詩才の發展は、略ぼ此言によりて推測することを得るなり。青  
年時代の作に於ては、獨立自由の思想極端となり、外界の總ての抑壓を  
排除して、社會の秩序に反抗せんとせり。實にシルレルは、ルソーの所謂  
自然人に非らざれば、得べからざる如き自由を理想となせしなり。此破  
壞的にして、霸氣滿々たる思想の最も能く發揮せるは、初期の三作『デー  
ロイベル』、『フィエスコ』、『カバール』なり。『ドン・カルロス』に至りて、思想の一  
轉を示せり。此曲に於ては、箇人的革命的自由の思想を脱却して、社會的  
政治的獨立の精神を唱へ、前の三作よりは、其思想遙かに高尚となれり。

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラシチスムス及びロマンチスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クラシチスムス。 第八章 シルレル。



學識進み、詩才熟するに及んで、シルレルの思想は大に發展せしなり。成熟期の作は、青年時代の作の如く、豪放ならずして、愛國心の爲めに自由を主張し、又は暴力に壓せらるゝ者を救護せんとするの赤誠を吐露せり。『ユングフラウ、フォン、オルレアンの如き』、『カールヘルム、テル』の如きは、即ち此高尚なる思想の發現なり。又時として自己の厄運を排せんとする『ワルレンシタイン』、『ブラウト、フォン、メツシナ』、『デメトリユス』となり、又私情の弱點を制せんとする『マリア、ステュアルト』となれり。

シルレルは、劇詩に於て道義的の主義を貫かんとせり、此主義は主として、カント哲學の研究より得たるものにして、感覺的の自然兒よりは、道義的有理の人を以て優ぐれたるものとせしによれり。

ゲーテが終世好運兒なりしに反して、シルレルの生涯は不斷の闘争なり。青年時代はカール、オイゲン公の權威の下に屈する能はずして、幾度か自由の爲めに泣き、名聲漸く文壇に現はるゝに及んでは、財力の缺乏と激甚なる争をなせり。かく一生を威力と自由との間に處して、意

志の闘争をなしたるシルレルは、悲劇の最大要件たる意志の衝突を叙するに最も適合したる性質を有したり。ゲーテが生まれながらにして、抒情詩人の資格を備へたるが如く、シルレルは、天性劇詩人殊に悲劇詩人に適したりき。ゲーテの詩才は、劇詩に於てよりは、叙事詩、抒情詩に於て最も光彩を放ち、シルレルは、ゲーテの不得意とする劇詩に最も妙を得たり。而してシルレルは、純然たる悲劇詩人にして、純然たる喜劇は、其性に適せず。ゲーテは之に反して、眞の悲劇は、嘗て書く能はざりき。見よ、『ファウスト』の第一篇は、悲劇的なりとするも、第二篇は如何に、世に夢幻の如き悲劇はあらざるなり。『ゲッツ』、『エグモント』二曲にも、悲劇的分子無きにあらずと雖も、これ極めて薄弱なり。シルレルも、年長じ詩才回熟するに及び、悲劇的の情を抒ぶること、青年時代の作の如く激烈ならずして餘程溫和となれり。

謂ふにシルレルは、意志の人にして、ゲーテは情の人なり。ゲーテ、シルレル共にカントの哲學殊に『判断力の批判』を研究したりと雖も、シルレ

## 第四編

新南獨逸時代の文學（宗教改革より現代迄）  
（クウンテスマム及びロマンテイスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄）○クウンテスマムス。第八章、シルレル。

ルは、常に道義的、倫理的の方面より人類を観察し、之に加ふるに審美的研究を以てせり。されどゲーテは、自然の眞理に到達するを以て目的とせば、遂に眞美の域に達すとせり。

シルレルが意志の人となり、ゲーテが情の人となりしは、其生育の境遇に職由せずんばあらざるなり。ゲーテは幼時温かき家庭に育ち、生計幸に裕かにして、金の爲めに苦しむことは、生を終ふる迄嘗てなかりき。シルレルは、然らずして、殆んど終生を貧と争へり。ゲーテは氣儘に天才主義を唱へて、放浪の生活を送り、後ちワイマール公の優遇に至らざるなかりしも、シルレルは幼時カール、オイゲン公の壓制を受け、爲めに其目的の學課さへ、修業する能はず、且つは軍隊教育に其心を勞せり。

獨逸文學史上の二大詩聖として、シルレルの立つ所、ゲーテ立てり。ゲーテの座する所、シルレルを見ざるなしと歌はれし兩詩人は、其境遇思想に於て、シルレルがゲーテと會見の後ケルナルに語たりし如く、黑白相反する所ありしなり。歸する處は、同じく注ぐ海洋なりと雖も、流域を

異にするは、豈獨り河川のみならんや。

兩詩人に就き、美しくしき譬を取らんか、ゲーテは、野生の薔薇の如く、シルレルは園生の百合に似たり。自然に任せて、生々發展したるは、ゲーテにして、自然の發育に一任せずして更に人力を加へたるは、シルレルなり。雨に逢ひ、風に逢うて、時に害を受くと雖も、朝に露を帯びて、陽光花瓣の上に輝くは、野生の薔薇なり。外物の侵し來ることなしと雖も、其技を挽められ、其蕾を失ふは、園生の百合なり。ゲーテが天才主義の渦中に葬られんとしたるは、薔薇の雷雨に打たれしが如く、ワイマール公の宮裏に厚遇されしは、例へば野生の美花朝日の光に浴せるが如し。シルレルが、ソリテ、ユーデの陸軍學校に在るや、外界の惡習に感染せざること、園内に藏せられたる百合の如くなりしと雖も、カール、オイゲン公には、幾度か其枝、其蕾を折られしなり。

境遇は人を作れり。兩詩人の詩才も亦斯くの如くなりき。自然に任せ悠々として迫まらざるは、ゲーテの雅量にして、自力によりて大に發

展せんとしたるは、シルレルの氣慨なりとす。

ゲーテ嘗てシルレルを評して曰く、「シルレルの詩想は、之を外に求め得たるの觀あり、詩藝の深底より徐々として舒達し來る如きことなし。シルレルは、一の題目を捕ふるや、一層深く觀察し、種々に吟味をなし、様々に研究をなせり」と依て考ふるにシルレルは能働的に詩材を選択し、自から進んで、詩材を捕ふることを努めたり。之に反して、ゲーテは、其作を「大なる懺悔の断片なり」と云へる如く、受働的に詩材を其儘に詩藝に入れ、情に動き感に打たるゝに従ひ、興に乗じて、歌ひ出せり。さればゲーテの作は、多く其閱歷遭遇と遠ざからず、茲に於て、ゲーテは生得の抒情詩人なり、之と正反對の理由に於て、シルレルは劇詩家なりき。

シルレルは歴史家として獨特の所見あり、又哲學者として優に一見識を有したり。ゲーテの多方面なるに及ばずと雖も、シルレルを只に一悲劇家なりと考ふるは、抑迂の極なり。されど此等を詳述するを得ざるは甚だ遺憾とする所なり。

以上論ずる處は、決してゲーテ、シルレルの優劣を論じたるに非ずして、シルレルを論ずるに伴うて、兩詩人を比較對照したるに過ぎざるなり。當時に在て既に人往々兩詩人を各好む所に従つて批評せり。ロマンスムス派の抒情詩人ノゾリスは、ゲーテの作を反道德の文學なりとして罵倒し、全派の驍將たるシュレーゲルは、シルレルの作を自然に遠ざかり、實際に厭れるものとして非難せり。同派全主義の人にして、兩詩人に對する所見を異にする事かくの如きなり。

かくの如くなれば、親密なる二友も世評に對して胸中時として穩かなる能はざりき。ゲーテ嘗て云へり、「世人は、我等兩人の優劣を定めんとして相争へり、されど余は却て喜ぶ兩人相共に文豪の名譽を負へること」と。實にシルレルにシルレルの長所あり、ゲーテにゲーテの長所あり、其優劣を論ぜんとするも得可らざるなり。

ゲーテ、シルレルの二人が相携へて、當時の文壇に嶄然頭角を現はし、爲めに十九世紀の始めを「被先偉人時代」(エビゴーションツァイト)と呼ぶ

## 第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウジウスムス及びロマンスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラウジウスムス。

第八章 シルレル。

Sonntag den 13. Jänner 1789

auf der hiesigen National-Bühne

# Die Räuber.

Ein Trauerspiel in sieben Handlungen; für die Mannheimer Nationalbühne vom Verfasser Herrn Schiller neu bearbeitet.

## Personen.

Martian, regierender Graf von Moor	Herr Kriehobill
Karl, sein Sohn	Herr Fied
Frau, seine Mutter	Herr Siffert
Amalia, seine Tochter	Herr Zerkow
Spiegelberg, Schmelzer	Herr Wolf
Grumm, Schlichter, nachher Bandit	Herr Reinfeld
Kofer, Knecht	Herr Franz
Wagner, Knecht	Herr Zerkow
Kaplan, Bedienter	Herr Peter
Herrmann, Bedienter	Herr Meyer
Der Magistratepfeifer	Herr Gern
Donat, ein alter Diener	Herr Wolfend
Ein Lehrling	Herr Gern
Räuber	
Ball	

Das Stück spielt in Deutschland im Jahre, als Kaiser Maximilian den ewigen Landfrieden für Deutschland stiftete.

Die bestimmten Eingangsgelder sind folgende:

In die vier ersten Plätze des Parterres zur linken Seite	45 kr.
In die übrigen Plätze	25 kr.
In die hinteren Logen im ersten Stuck	15 kr.
In die drei ersten Logen des zweiten Stucks	40 kr.
In die verbleibenden Gallerie des ersten Stucks	15 kr.
In die Seiten-Plätze	5 kr.

Wegen Länge des Stückes wird heute präcise 5 Uhr angefangen.

(一其)

文 告 廣 の 衆 興

\* Die Räuber.

に至り或詩人の如きは己の詩才遠く、兩詩人に及ばすとなし、精神病に罹れりと云ふ。此事實は、兩詩人の頭上より動かす可らざる光榮の冠と云ふべし。最後に或批評家の半ば洒落れたる評を擧げて、此評論の局を結ばんとす。

ゲーテに劇詩「ファウスト」字義上祭の意あり、シルレルにバラード「ハンドシュー」字義上手袋の意あり。茲に於て語をなして曰はく、「シルレルの「ハンドシュー」手袋はゲーテが「ファウスト」祭を覆ひ盡さずと。蓋し最も巧なる批評と云ふ可し。

シルレルの作の特徴及び一般の性質は、概ね上述の如し。順次九傑作の梗概を擧げて此章を終らん。

『群盜』(タ) (デ、ロイベル) 千七百八十一年作

シルレルの劇詩を論ぜんと欲せば、先づ處女作「群盜」を以て始む可きなり。十八歳の青年が、外界の抑壓に遇ひて激憤し、天の稟詩才に任せ、萬丈の氣焔を吐きたるは、實に此曲なり。水清ければ大魚住まず、法則

Sonntag den 13. Jänner 1782

wird

auf der hiesigen National-Bühne

aufgeführt

# Die Räuber.

Ein Trauerspiel in sieben Handlungen; für die Mannheimer Nationalbühne vom Verfasser Herrn Schiller neu bearbeitet.

## Personen.

Maximilian, regierender Graf von Moor	Herr Kirchhöfer.
Karl, seine Sohn	Herr Bock.
Franz, seine Nichte	Herr Jßland.
Amalia, seine Nichte	Herr Toscani.
Spiegelberg,	Herr Pöschel.
Schwäizer,	Herr Weil.
Stimm,	Herr Krenschüb.
Schusterle, Librettist, nachher Bandit,	Herr Frank.
Keller,	Herr Toscani.
Kaymann,	Herr Deter.
Kosinold,	Herr Weil.
Herrmann, Wastard eines Edelmanns	Herr Meier.
Ein Magistratsperken	Herr Stern.
Daniel, ein alter Diener	Herr Walhaus.
Ein Bedienter	Herr Opp.
Räuber.	
Volk.	

Das Stück spielt in Deutschland im Jahre, als Kaiser Maximilian den ewigen Landfrieden für Deutschland stiftete.

Die bestimmten Eingangsgelder sind folgende:

In die vier ersten Plätze des Parterres zur linken Seite	45 fr.
In die übrigen Plätze	24 fr.
In die Gallerie-Kage im ersten Stod	1 fl.
In eben eine solche Kage des zweiten Stoda	40 fr.
In die verbleibende Gallerie des dritten Stoda	15 fr.
In die Gallerie-Kage des vierten Stoda	8 fr.

Wenn Länge des Stückes wird heute präcise 3 Uhr angefangen.

*Am 13. Jänner 1782*  
*Maximilian, regierender Graf von Moor*  
*Joseph Schiller*  
*1782*

\* Die Räuber.

に至り、或詩人の如きは、己の詩才遠く、兩詩人に及ばすとなし、精神病に罹れりと云ふ。此事實は、兩詩人の頭上より動かす可らざる光榮の冠と云ふべし。最後に或批評家の半ば洒落れたる評を擧げて、此評論の局を結ばんとす。

ゲーテに劇詩「ファウスト」字義上翠の意あり、シルレルにバラード「ハンドシュー」字義上手袋の意あり、茲に於て語をなして曰はく、「シルレルの「ハンドシュー」(手袋)は、ゲーテが「ファウスト」翠を覆ひ盡さずと、「蓋し最も巧なる批評と云ふ可し。

シルレルの作の特徴及び一般の性質は、概ね上述の如し、順次九傑作の梗概を擧げて此章を終らん。

『群盜』(タ、デ、ロイベル) 千七百八十一年作

シルレルの劇詩を論ぜんと欲せば、先づ處女作「群盜」を以て始む可きなり。十八歳の青年が、外界の抑壓に遇ひて激憤し、天の稟詩才に任かせて萬丈の氣憤を吐きたるは、實に此曲なり。水清ければ大魚住まず、法則

Der  
Verfasser an das Publikum.

---

**D**ie Räuber — das Gemälde einer verirrten großen Seele — ausgerüstet mit allen Gaben zum Fürtrefflichen, und mit allen Gaben — verloren — zügelloses Feuer und schlechte Kammerabsicht verdarben sein Herz, rissen ihn von Laster zu Laster, bis er zuletzt an der Spitze einer Mordbrennerbande stand, Gräuel auf Gräuel häuften, von Abgrund zu Abgrund stürzte, in alle Tiefen der Verzweiflung — doch erhaben und ehrwürdig, groß und majestätisch im Unglück, und durch Unglück gebessert, rückgeführt zum Fürtrefflichen. — Einen solchen Mann wird man im Räuber Moor beweinen und hassen, verabscheuen und lieben.

Franz Moor, ein heuchlerischer, heimtückischer Schleicher — entlarvt, und gesprengt in seinen eigenen Minen.

Der alte Moor, ein allzu schwacher nachgebender Vater, Bergärtler, und Stifter vom Verderben und Elend seiner Kinder.

In Amalien die Schmerzen schwärmerischer Liebe, und die Folter herrschender Leidenschaft.

Man wird auch nicht ohne Entsetzen in die innere Wirthschaft des Lasters Blick werfen, und wahrnehmen, wie alle Vergoldungen des Glücks den innern Gewissenswurm nicht tödten — und Schrecken, Angst, Reue, Verzweiflung hart hinter seinen Fersen sind. — Der Jüngling sehe mit Schrecken dem Ende der zügellosen Ausschweifungen nach, und der Mann gehe nicht ohne den Unterricht von dem Schauspiel, daß die unsichtbare Hand der Vorsicht, auch den Bösewicht zu Werkzeugen ihrer Absicht und Gerichte brauchen, und den verworrendsten Knoten des Geschicks zum Erstaunen auflösen könne.

---

の束縛を受くる時は、偉人となる能はず、男子は獨立獨行して、世事を顧みる可らず、放浪自ら楽しんで世を送る可し、混濁の世を救はんと欲せば、暴力に訴へざる可らず、人權は、無法則の下に保護さる可しとは、蓋し當時シルレルの胸中に來往したる思想なりしなり、此恐ろしき思想は、主人公カール、モールの感慨に託して、極端に主張されたり、然れども、世は箇人の私憤によりて動かす可からずして、一人の要求は、社會の制裁の爲めに壓服さる。カール、モールの血氣に馳せし理想は、實行されざりき。

翻てカールの性質を考ふるに、カールは一朝小弟の奸策に罹りて、父の信用を失ひ、悪友に誘惑されて、強盜の張本となり、遂に身を亡ぼすに至れりと雖も、一旦自己の理想の非なるを自覺するや、公明正大の心を以て、走つて大義明分の裁斷を受く、其心は實に至正至高なり。

世の批評家が此曲を難じて、徒らに豪放の辞、粗大の言を連ぬるのみにして、未だ劇詩の傑作となすに足らずと云ふは、恐らくは皮想の見解なり。

梗概 モーレル伯マキシミアンに、カール及びフランツの二子あり。兄カールは國を出て、萊府大學に遊び、弟フランツは、父伯爵と共に其城に在りき。カールは熱血漢にして、青年の盛なる意氣に任せ、悪友に誘はれて、娛樂に耽りたり。されど一旦大に悔悟して、父伯爵に書を贈り、此迄の私行の修まらざりし事を悉く打ち明けて、謝罪をなせり。蓋しカールは、父の怒を解き、赦るされて、早く家に歸り、愛人アマールリエと、樂しき生活を送らんことを切望せしなり。恩愛深き老伯は、愛子の懇請を容れて、カールを呼び還へさんとせり。されどフランツは、兼て兄カールが、父の寵兒にして、且つ容貌の己より優れしことを怨みしかば、今や機逸す可らずとなし、父及び兄を欺きて、自から家を繼がんと、の悪心を起し、父の考を翻へさんと努めたり。フランツは、惡魔のなす如き計を案じて、父を欺き、カールをして失望落膽せしめ、世を呪ひ、人を怨むに至らしめたり。

フランツは、カールの監督者の書面と稱して、類齡の老伯に自から涙

を飲んで、之を読み聞かせたり。此手書はフランツが、父を欺かんとて偽造せしものなれば、カールに無き罪を負はせ、或は數千金の借財をなせりと云ひ、或は富める銀行家の娘と私通せりと云ひ、剩さへ其筋よりは、カールの逮捕狀を發し、其首に懸賞ありとの無き事實を虚構し、表面は深くカールを不憚と思へる様を裝ひ、伯爵家の爲め、父の爲め、かゝる不徳の子は、近づく可らずと云ひて、徐々に父の心を動かせり。父は其書の偽造なることは、夢にも知らず、悉く事實なりと信じ、遂にカールの願を許さざりき。カールはフランツが、かく腹黒き弟なることを知らず、父が己の願を聽許せざるを見て、父の恩愛さへ無き世なり、此世に在りて、正道を蹈むは愚なりと考へたり。茲に於て善良溫和なりしカールは、精神狂亂して、暴威を振ふに至れり。カールは盜賊の長となり、ボヘミヤの森林中に出沒して、強盜をなし、穢れたる世を、利劍に訴へ、猛火によりて改良せんと企て、夥多の人を虐殺せり。

閑話休題老伯は、奸邪なるフランツによりて、城内の或高塔に幽閉さ



れ、將に餓死せんとしたり。此時カール歸り來り、老伯は事の次第を聞き、フランツの悪計を知りしも、間もなくして死せり。茲に於てカールは、本心に立ち返り、復讐の劍を以て、人を殺ろし、財を奪ふの非道なるを思ひて、深く自から悔ひ、フランツの誘惑に遇ひても心を動かさず、節操を守りたる愛人アマリーエを手づから殺ろし、従容として法律の制裁を仰げり。これ一篇の梗概なりとす。

「ゲヌアに於けるフイエスコの陰謀」(レ) (ディ、フェルシュエールング、デス、フイエスコ、ツ、ゲヌア) 千七百八十三年の作

此曲は天才時代第二の作なり、第一の作「群盜」に於てカールは、私怨に乗じて、暴力に訴へ、社會を改良せんとして成らず、此曲に於て、フイエスコは謀反心を起して、社會の舊制度を打破せんとして、却て其身を亡ぼすに至れり。此曲は、單に文辭の過激なるのみならず、革命の氣運を助長して、國家主義に反抗するの恐あるを以て、當時の劇界に好評を博せず、且つ今日に於ても、他の曲に比すれば、大に聲價低し。

梗概 シルレルは、此曲に於て、舞臺を共和政治の都市なる伊太利のゲヌアに取れり。ゲヌア市は、アンドレアス、ドリリアの在世中隆盛に赴きしと雖も、其甥ジャチッティノが後を繼ぐに及んで、素行修まらず、國政亂れ、共和政治も、其實を失ふに至り、憂國の士無きにあらずと雖も、意見衝突して國內擾亂を極めたり。

亂世には、奸雄出づ。ラバンヤの領主フイエスコ伯は、國內の紛亂に乗じて、徒黨を糾合し、ドリリア家を亡ぼし、ゲヌアの獨立を回復せんとせり。さるにフイエスコは、漸次勢力増加し來るに及んで、野心を起し、自己の權威を振うて、國政を左右せんと欲するに至り、共和政治を再興せずして、君主獨裁政治となし、自ら王冠を頂上に戴かんと欲せり。伯の夫人レオノレは、伯の野心が身を危くせんことを憂ひ、其心を翻へさんとして、諫言せしも聽かれず。又フイエスコと共謀して、義軍を起せし共和黨の一人エリナは、他迄共和政治を主張して、フイエスコの意に賛成せざりき。かく兩人が、一は夫婦の愛情を以て説き、一人は國家の利害を以て説きしと雖

も野心に驅られしフィエスコは、決心を翻すの勇なく、遂に私情の奴隷となりて、身を亡ぼすに至れり。

『陰謀と戀愛』(カバール、ウント、リーベ) 千七百八十四年の作

此曲の舊名は『ルイーゼ、ミルレルン』と云へり、イフランドの忠告によりて現名に變更されたり。天才時代第三の作にして、前二曲よりは、一層深く實際社會に近づけり。『ロイベル』曲は、空想的にして、此世に求む可らざる社會を夢想せり。『フィエスコ』曲は、實際の社會を寫せりと雖も、舞臺を伊太利に取れり。獨逸當時の心性生活を最も能く發揮せるは、『カバール、ウント、リーベ』なり。青年時代の三作に於て、シルレルは、革命的氣焔を高むるを以て、或批評家の如きは、シルレルの『ロイベル』は、佛國革命の豫言なりと云へり。

梗概 獨逸國の某公爵家の重臣(プレジデント、フォン、ワルテル)の子にフェルディナントと云へるあり。此國に一時公爵の寵を一身に集めて、衆人の嫉妬を受け、今や寵衰へて、空閑を嘆じつゝある美人レディ、ミルンフォード

あり。父は、此婦人を、一子フェルディナントに娶はさんとす。假令君主にせよ、一たび他人の慰物となりて、身を汚せし婦人と婚するは、青年の情として忍ぶ可らざるなり。フェルディナントは、父の嚴命に従はずして、音樂師の娘ルイーゼ、ミルレルに、深き思をかけ居たり。専制なる父は、互に相愛せる交情を裂かんとし、ルイーゼの父を捕縛せり。ルイーゼは、子として父の罪なきに捕はれしを憂ひ、哀訴して、父を救はんとせり。父に孝ならんとせしルイーゼは、愛情を犠牲として、死より一層苦しき事を敢てしたり。

ワルテルの命を受けたる秘書官ウルムは、ルイーゼを強迫して、侍従武官カルプに艶書を贈らしむ。然かも文辭は、ルイーゼに言はしめて、ウルム自から代書せり。これ此書簡をフェルディナントに贈りて、ルイーゼを断念せしめんと企なりしなり。フェルディナントは、密計にかゝり、ルイーゼを實なき女と思ひ、此世の望、絶え果てたりとなし、ルイーゼを殺るして、自殺せり。ルイーゼは、フェルディナントの怨の刃を身に受けて、最後の息

も絶えくゝなるに臨みて、フルディナントに、事の成行を物語れり。二人は共に無念の涙を飲みつゝ、瞑目せり。

(ツ) 『ドン・カルロス』千七百八十七年の作

梗概 舞臺は、西班牙の王宮なり、皇太子ドン・カルロスは、幼にして母を失ひしが、早くより、エリザベート・フォン・ボロアと云へる婦人と許嫁の約を結び居たり。然るに父王フィリップは、かくと知りつゝ、父の威力を以て之を奪ひ、立て、后となせり。王后の侍女エボリは、太子に情を通せんとせしも、カルロスは、一向にエボリに意を向けずして却て屢々現王后を懇慕せるの意を洩らせり。依てエボリは、女の情として嫉妬心を起し、カルロスと王后との關係今だに淺からぬ由を王に密告せり。

茲にカルロスの親友マルキ・ポーザは、一大事の起らんことを恐れ、自ら太子に代つて難に赴けり。ポーザは、王の手蹟に擬したる書簡を王后に與へたり。王は此書簡を見て、直ちにマルキ・ポーザを射殺せしむ。カルロスは、國外に逃れ出でんとせしも、途中に捕はる。親友の苦心は水

泡に歸し、太子は、父の爲めに、戀の敵となりて、處刑を受けたり。

(チ) 『ワルレンシュタイン』千七百九十九年の作

『ワルレンシュタイン』曲は、ゲーテも、かゝる大作は、再び出づることなからんと評せし如く、シルレル劇詩中最大の作なり。詩材は、三十年戦争より取れり。此曲は所謂『三曲合一』(トリロジー)にして、三部に分かる。第一部は『ワルレンシュタインの陣營』、ワルレンシュタイン、ラーゲル、第二部は『デイ・ピコロミニ』、第三部は『ワルレンシュタインの最後』(ワルレンシュタイン、トート)なり。

第一部『ワルレンシュタイン』は、ワルレンシュタインの陣營の有様を叙するものにして、當時の獨逸兵及び士官の生活の状態、氣風、習慣等最も巧に描寫さる。

第二部『デイ・ピコロミニ』に於て、始めて主人公ワルレンシュタイン出て、第一部の如く、簡單なる幕にて終はらず、五齣に分かれ、ワルレンシュタイン及びピコロミニ父子の性格を叙述せり。

第四編 新南獨逸諸時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラシテスマス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より千八百四十八年迄) ○クラシテスマス、第八卷、シルレル。

ワルレンシュタインは、國防軍の大將と仰がれ、大軍の總指揮官となり、威望日に高くなるに及び、國難を排し國家を泰山の安きに置くは、一己の力に在りと信ずるに至れり。隨を得て蜀を望むは人の常なり。勢力日に加ふると共に、ワルレンシュタインの望みも、更に大となれり。一たび鞭を揚ぐれば、雲霞の如き大軍立ちに動き、一號令の下に將卒意の如く働くを見て、ワルレンシュタインは、野心を起し、自からベーメンの王たらんと欲するに至れり。されど瑞典の大軍を前に控へては、己の不利なるを知り、敵軍と聯合して、大望を成就せんとせり。

ワルレンシュタインは、胸中の畫策既に成りしと雖も、大に躊躇せり。蓋し埃太利皇帝に反旗を翻へさんことは、心中大に忍びざる所あるなり。ワルレンシュタインは、武將の習として、毎夜天文を案じて、大事を決せんとす。然るに星座常に悪しくして、時期尙未だ至らざるを示せり。ワルレンシュタインは、かくして日夜肝膽を碎きしが、部下の將イロー及びテルツキーは、頻りにワルレンシュタインを勸誘して、其野心を挑發し、遂に連

判狀を調へ假令皇帝の怒に觸れ大罪を負ふとも、二心を抱くことなしと誓へり。此時に當り、ワルレンシュタインの帷幄に參せし副將オクタオ、ピコロミニーあり、性頗る陰險にして、ワルレンシュタインの大望あることを察知するや、表面上己も共に一臂の力を振ふべき裝をなし、竊に維也納の朝廷に密告して、雄將の新圖を妨げんとせり。

オクタオ、ピコロミニーの子に、マックス、ピコロミニーあり、父と性質全く相反して、人と爲り、正直公平、深くワルレンシュタインの器量に感じ、且つ其娘テクラを愛したり。

ワルレイシュタインは、最早や決心を翻す能はざるに至れり。茲に於てマックス、ピコロミニーは、進退何れに決す可きかに惑へり。第二部はマックスが「我と彼(ワルレンシュタイン)との關係は、清淨なる可し。此日の暮るゝ迄に、我が友と手を分つか、我が父に背を向くべきか、何れにか決せねばなるまい」と云へる語にて終る。

第三部「ワルレンシュタイン、トート」は、悲劇なり、五齣より成る。ワルレ

## 第四編

新南國邊境時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クワシチス、ムス及びロマンタイスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クワシチス、ムス。 第八卷 シルレル。

ンシュタインは、大英断をなすに至る迄に久しく迷ひしが、テルツキト夫  
人の勸告に動かされ、且つ瑞典軍の大佐ランゲルと會見して、干戈を運  
ぬるの約を結び、遂に皇帝に謀反の計書をなすに至れり。マックス、ピコロ  
ミニーは、誠意誠心を以て、ワルレンシュタインを説きしも、其決心の頑と  
して動す可らざるを知るや、心中名譽と戀愛との久しき争の後、大義を  
重んじて、愛人テクラー及びワルレンシュタインと別かれ、勇ましき戦を  
なして戰場に斃る。

オクタボオは、皇帝より密使を以て、軍の總指揮官たるの命を受けし  
かば、ワルレンシュタインに心を寄せし忠勤の將士ブットレルを説服して  
己の味方となし、機を伺うて、ワルレンシュタインを殺さんと圖れり。かく  
と知らぬワルレンシュタインは、ビルゼンの陣營を出て、エーゲルの砦  
に向ふ途中、計略にかゝりて斃れ、雄圖茲に空しくなれり。

(ナ) 『マリア、ステュアルト』 千八百年の作

シルレルは、此曲を書くに當り、ロバートソンの蘇格蘭史及びヒューム

ナ. Maria Stuart.

の英國史より、詩材を取れり。蘇格蘭の女王にして、絶世の美人と呼ばれ  
しマリア、ステュアルトは、千五百四十二年に生まる。全年父ジャコブ五世死  
し、母后攝政たりし間、佛國に行きて教育を受けしが、王フランツ二世と  
結婚するに至れり。本國にて母后薨し、王フランツも、千五百六十年に没  
せしかば、マリアは、蘇格蘭に歸りて、従兄弟ダーンレーと婚して王位を  
継ぎ國政を執れり。ざるにダーンレーは、マリアを虐待し、且つマリアが  
信任したる秘書官リッチオを殺したり、マリアは其殘暴を怒かり、復讐  
の念絶えざりしも、良心の力を以て、之を制したり。千五百六十七年ダー  
ンレー病を得て、別荘に療養中突然薨去したり。茲に於てマリアは、國人  
より嫌疑を受けしが、ダーンレーの死後間もなく、其暗殺者を以て目せ  
られしボスエル伯と結婚するに及んで益其疑を招けり。マリアは新教  
の一貴族の家に捕はれ、王位を其子ジャコブ一世に譲る可しと迫まられ、  
牢獄に投ぜられしも、逃れて英國に來り、エリザベス女王の救を乞へり。  
エリザベス女王は、始めマリアを優遇せしも、忽ち囚人として取り扱ひ、

第四編

新南國遷都時代の文學(宗教改革より現代迄)

(クラウシテスマス、及びロマンティスム、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラウシテスマス、第八卷、シルレル。

屢居所を移し、遂に千五百八十六年フザリングヘー城に幽閉したり。

これマリア女王に關する歴史上の事實にして、シルレルも此事實に基いて、此曲を書けり。されど、レッシングが云へる如く、劇詩は歴史と異なりて、一に事實の正確を主とせず、人物の實際の性情を寫すよりは、寧ろ人情の赴く所を描くにあり、シルレルも亦此考によりて、歴史上の事實を潤飾したり。

此曲の筋によれば、マリア女王が王位を奪はれて、英國に逃げ來りし時、エリザベス女王は、マリアが舊教の保護者なるを忌み、且つ非望を抱けるに非ざるやを疑へり。

かくしてマリアは、英國の王位を覬覦せりとして告發され、將に死刑の宣告を受けんとせり。會計監督官パーレーは、切に女王に宣告を決行すべしとす。めしも、エリザベスは躊躇したり。ざるに又此時に當りレイセスター伯及びモーターマー二人は、マリアを助けんとて盡力せり。レイセスター伯は兩女王の和解を計かり、モーターマーは竊かにマリアを逃

れしめんとせり。されど、兩人の斡旋は共に成就せざりき。

第三齣第四幕にて、兩女王がフザリングヘー城に會合の場は、觀客の最も心を動す所なり。マリアは、己を制して大に謙遜し、身を屈してエルザベスの足下に伏して、憐憫を乞へり。されど、冷淡なるエリザベスは更に同情の念なく高慢なる態度を以て、マリアを辱かしめしかば、マリアも遂に堪ふる能はずして、エリザベスを誹謗せり。エリザベス女王の自負心は、痛く傷けられ、其怨によりて、マリアは、哀れ果かなき最後を遂ぐるに至れり。

(ラ) 『オルレアンの少女』ユングンラウ、フォン、オルレアン) 千八百一年の作

オルレアンの少女ヨハナ(佛名ジアン、ダーク)が、一少女の身を以て、敵の大軍を追ひ拂ひ、佛蘭西の爲めに、國難を除きたる義舉は、大にシルレルの意に投じたり。ざるに、ポルテールは、滑稽的敘事詩を書きて、愛國の少女を嘲りたり。依て此汚名を雪ぎ、芳ばしき名を後世に傳へんとした

## 第四編

新舊國語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラシチスムス及ヒロマンチスムス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クラシチスムス。 第八章 シルレル。

るシルレルの義侠心は、遂に一曲の劇詩を替くに至れり。

梗概 本曲の主人公オルレアンの少女は、性來物に感じ易くして、幼より神を信ずるの心深かりしが、餘りに感情に強くして精神少しく錯亂し、感極つて時々空想に馳せ、人界を離れて夢幻の世界に入り、聖母マリアと語らへり。聖母の御告げなりとて、ヨハナは自から本國の危難を救ひ、國王の心を安ずるの任ありと信じたり。されど此大任を帯ぶる時は、世間の慾情及地上の愛情を全く去らざる可らざるなり。

「人の世の愛と情とを斥けて、清淨無垢の少女となりてこそ、此世は救はるれ。我に手向ふものは、容赦なく殺戮すべし」とは、此少女が守る可き重要な心得にして、又自からも此世の望みを断ちて、天の命に従ふ事を夙に覺悟したり。

されどこれ、少女ヨハナに取りては、餘程の難事なり。ヨハナは容貌端麗なりしかば、求婚者夥多ありて、屢情を動かし、心を苦めたり。レイモンと云へる人の申込を拒絶せし時などは、痛く父の感情をも害したり。切

なる愛の情をも顧みず、男子と手を断つ程の勇氣あるヨハナは、國難を救はんとて、故郷の地を去つて戰場に赴けり。自から信じて天の使となせる愛國の少女は、戦地に入りて、佛軍の將卒を督勵せり。ヨハナは、戦の場にも愛なく、憐なく、勇氣を鼓して働き、女々しき所業更に無かりき。かゝる中にも佛國の猛將デュノア及びライールの二人より思をかけられたり。されどヨハナは躊躇することなく、之を拒絶せり。モントゴメリと云へる青年が、憐を乞ひし時は、ヨハンも暫時逡巡せしが、遂に情に勝ちて初志を貫けり。

かくヨハナは、幾度も誘惑に遇ひて、決して其心を動かさざりしも、遂に此世の人たるの情を現はすに至れり。英軍の或隊長にて、氣高き士官リオテルを見ては、ヨハナも大に心を動かせり。宗教熱心の爲めに、天女となりしヨハナは、愛情の爲めには、世の人に歸れり。敵軍の將なり、佛國の仇なり、されどリオテルは、愛の敵に非ず。ヨハナも愛の力には、遂に抵抗する能はざりき。されどヨハナは、大なる嘆を以て大罪を犯せしこと

## 第四編

新南國邊語時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クラウチスマス、スミス及びロマンティスム、スミス。千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クラウチスマス。 第八章 シルレル。

4. Die Braut von  
Messina.

を自覺せり、妾は何を爲せしか、妾は誓約を破りたりと叫べり、これより後ヨハナは贖罪せんとて、深く謹慎せり、さるに佛軍の將卒等は、ヨハナが魔力によりて、敵軍を追ひ退け、名譽を一身に負へるを嫉み、人を迷はす魔術者なりとて、ヨハナに救助を與へざりき、ヨハナは國人に見棄てられ、諸方を流浪する間に敵軍に捕はれたり、此間もヨハナは、一念に罪を滅さんとせしが、祈禱によりて、勇氣と力とを回復し、縲纆の苦を脱して、佛軍最後の勝利を以て、敵軍を國外に追ひ拂へり、されど又自からも命を擲ち、國人に代つて死せり、苦痛は須臾にして、歡樂は悠久なり」と云ひて、ヨハナは、地上の苦を避けて天國に遊べり。

(ム) 『メッシナの花嫁』(ディ、ブラウト、フォン、メッシナ)、千八百三年の作

此曲はシルレルが、ソファクレスの『ケーニヒ、エディブリス』の研究より、之に類する作を試みんとして、案出したるなり、シルレルは『エングフラウ、フォン、オルレアン』に於て、ロマンティスムスの精神を發揮せしと雖も、此曲に於ては、全く古希の思想に溯れり、祖先の罪過が、後世子孫の滅亡を來

たすと云ふ如き、運命を以て作の根本思想となすは、古代の思想なり、而して又コールを加へたるは、大に希臘風に倣へることを證するものなり。

梗概 メッシナの王家には、古來後世子孫に大禍難起るべしとの傳説ありき、數代の後、家君或夜の夢に二本の檻櫓樹の間に、一の美しくしき百合の花咲けりと見しに、此百合の花は、忽ち變じて、一團の火焰となり、二本の木と共に、悉く周囲の物を焼き拂へり、家君は驚きて、天文學者の亞刺比亞人を召して、此夢を判斷せしめたり、然るに亞刺比亞人は、此夢を凶事と判じ、且つ君に此後女王子生れ給はゞ、此女王子は、兄君の二王子を殺ろし、且つ至王家を亡ぼし給ふ可しと云へり、王は此卜占により、痛く恐怖心を起し、其後間もなく生まれし女王子を殺害すべしとの命を發せり、然るに又此頃王后も或夢を結べり、此夢によれば、天女の如き美しくしき小供獨り草原に遊べり、森の中より獅子出て來たりて、獲物を其子供の膝の傍に置けり、又空を翔けりし鶯は飛び下りて、獅子と同じく、



捕へし鳥を子供に供せり。而して獅子も驚も、共に子供の足下に跪きて、恭しく座せり。王后は王の命を聞き、愛女を殺すに忍びざる時なりしかば、兼て懇意なる僧侶を召して、此夢を判せしめたり。此僧は王后の意を迎へんと欲し、女王子は二人の兄君の反目を調停し、其間を親睦ならしむ可しと告ぐ。王后は大に喜び、王に秘して、竊に女王子をツィーリエ寺院に養育せしめたり。父王の死後も女王子は依然として、寺院に留まれば、さて二人の兄弟は、年漸く長ずるに及んで、其仲悪しく互に相敵視するの念日一日に増加せり。父王存命中は、此睨み合も、父の威力にて鎮壓されしと雖も、其死後争は激烈となりたり。されど王后の盡力にて、兄弟二王子は、再びメッシナの城に歸りて、和睦せり。王后は此日出度祝日に當りて、秘密を保つ能はずして、兄弟には、一人の妹あれど、故ありて寺院に預けて養育せしことを語り、

茲に於て祝日は、忽ち變じて凶日となれり。二人の王子は妹と知らずして早くより女王子を愛したり。兄王子ドン、マヌエルは、狩に行きて此

鹿を追ひ、寺院の庭に追ひ行きしが、此寺院は王女子ベアトリーチェが養育されし所なり。マヌエルは、ベアトリーチェを一見して、戀慕の情禁ずる能はざりき。弟王子ドン、ツィーザルは、父王の葬式の日、かの女を見て深き思に焦がれたり。

兄弟の二王子會見の即夜、兄のマヌエル王子は、走つてベアトリーチェの許に至り、寺院より誘ひ出して、寂しき庭園に語らひ、立て、妃となさんと約束し、共に祖先以來の居城に急ぎたり。弟のツィーザル王子は、兄君が何處へ行きしかを探ぐらせしに、ベアトリーチェと相携へて、既に親しき契を結べることを察知し、嫉妬の餘り悪意を生じ、戀の敵なりとて同胞のマヌエルを刺し殺るせり。されど骨肉たる兄を殺るせしツィーザルは、最早此世に長らふ可くもあらざれば、自殺して相果てたり。實に運命の神の仕業こそ恐ろしけれ。

(ウ) 『井ルヘルム、テル』 千八百四年の作

此曲に現はれたる自由思想は、かのカール、モールが現社會に反抗し

て革命的の闘争をなしたるとは、頗る類を異にし、既存の状態を理由なく打破せんとするに非ずして、舊態を保存せんとするにあり、即ちテルは、カールの如く、私憤の爲めに現社會を破壊せんとせず、公憤の爲めに、舊社會を維持せんことを願へり、雙方共に腕力に訴ふる點は同一なりと雖も、カールは自己の爲めに無辜の民迄も虐殺し、テルは然らず、公衆の爲めに身を犠牲となさんとして難に赴けり、カールも善人なりと雖も、一たび精神異状を呈して、其處置當を失ひたり、テルは終始變る事なく、義侠の爲めに働き、公安の爲めに力を振へり、テル曲に於ける自由思想は、シルレルの作中最も高潔なるものにして、シルレルの詩才が成熟の頂點に達したると共に、思想も圓熟の域に達したることを證するなり。

シルレルはゲーテと異なり、足一たびも瑞西の地を踏まざりしと雖も、地理書の研究によりて、風土氣候等は、最も能く描くことを得たり、而して詩材は、ヨハンテス、フォン、ミルレルの『瑞西同盟の歴史』(井) (ゲシヒテ、

シコワイツェリッセル、アイドゲノッセン)より取れり。

梗概 瑞西國の三部落シコイツ、ツォーリ、ウンタルワルデンは、後にアルブレヒト一世として、獨逸皇帝千二百九十八年より千三百八年迄となり、埃太利の公爵アルブレヒトの鎮壓に反抗したり、古來此地方は、帝國直轄にて、大名の壓制を受けず、獨立自由の社會をなせり、然るにアルブレヒトは、此三地方の自由權を奪うて、ハブスブルグ家に隸屬せしめんとせり、而してヘルマン、ゲスレル、フォン、ブルチック及びベリッングル、フォン、ランデンベルグの二臣を瑞西に派遣し、威壓して、人民を其命に服せしめんとせり、されど瑞西の人民は、祖先以來の獨立を主張して、公爵の命に従はざるなり。

此時に當り、カールヘルム、テルは奮然として起ち、他の同盟者と共に武力を以て、公爵の使臣に抵抗して、獨立自由の爲めに争へり。

老貴族のアッティングハウゼンは、人民に同情を寄せしも、其勳なる青年貴族のウルリヒ、フォン、ルーデンツは、伯父と其志を異にし、自身の名譽

第四編

新南獨逸諸時代の文學(宗教改革なり現代迄)  
(クワンテスマス及ヒロマンテスマス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄) ○クワンテスマス、第八卷、シルレル。

と家名とを得んことに汲々として自由の敵となれり。

愛國の念溢るゝ如きテルは、遂に同盟者中より、身を挺して大事に當り、公爵の使臣ゲスレルの横暴を憤慨して、故國の自由を唱へたり。

ゲスレルは、アルトルフの公場に、公爵の帽子を一竿頭に掲げ、人民をして、此帽に跪いて敬禮せしむ。此報を傳へ聞くや、テルは、子息を伴うて此場に臨みしも、空朝に對して、毫も尊敬の意を表せざりき。茲に於てかの有名なる幕となり、テルは、子息の頭上に林檎を載せ、之を射らしめらる。

テルが、心に神を祈願して放ちたる矢は、誤たずして林檎に中りて、子を傷づることなかりき。然るに殘忍なるゲスレルは、テルが初め二の矢を箠より抜き取りて、胸脇に挿みしを詰りしに、此時テルは、答へて曰はく、「我若し誤つて、我子を射りしならば、此二番目の矢は、足下の胸を貫きしならん」と。ゲスレルは、其無禮を憤り、テルを捕縛して、キッスナハトに護送して、獄に投ぜんとせり。途中湖を渡る、暴風遽かに起り、船動搖し

て進まず、テルは船を操縦するの術に長けしかば、繩目を解かれ、舟子を指揮して一巖角に漕ぎ寄らしめ、一躍巖頭に上りて、ゲスレル一行を再び波浪の掀翻に委ねたり。かくて微行して、キッスナハトの方に赴き、幸にして波浪の厄難を免れたるゲスレルを途に要して射殺せり。

此報を傳へ聞きたる瑞西の人民は、大に勢を得、閔を擧げて、自由回復を祝賀せり。時恰もアルブレヒト皇帝が、其甥公爵ヨハン、フォン、ジューターンに私怨を以て暗殺されたりとの報あり、瑞西の人民は、擧つて國の保護者、自由の回復者たるテルに感謝の意を表せり。

天に輝く星雲を貫くアルプスの峯、共に自由獨立の標號なり、朝に此の山を望み、夕に此星を眺むる瑞西の民は、一致協力して終に獨立を回復することを得たり。

「非ルヘルム、テル」が、舞臺の上の作として、シルレル劇詩中隨一なることは、衆人のまさしく認むる所にして、シルレル自身も亦公言して憚らざりき。

稿半ばにして終りたる『デメトリウス』曲に就いては、今茲に評論することを敢てせざる可し。二大詩傑ゲーテ、シルレル時を全うして出づ、文學史上の偉觀なり。今や二詩人評論の筆を擱かんとするに臨み、所論の散漫として沒要領を以て終りしを甚だ遺憾となす。されどシルレルに就ては、他日更に筆硯を洗うて論ずるあらん事を期す。

第九章 散文家

(1) ユスツス、メーゼル、千七百二十年十二月十四日オスナーブリックに生まる。イェーナ、ゲッティンゲン二大學に法律を學び、秘書官、顧問官として、其技倆を振ひ、世人の敬愛を得て、千七百九十四年一月八日故郷に死せり。

メーゼルは、又文才を有し、(イ) 『オスナーブリック、ツッキン、ゲシヒター』及び(ロ) 『パトリオティッシュ、ファンタジエーン』の二著あり、共に文辭明晰なり。當時開明主義盛なりしも、メーゼルは、時勢に反して、耶穌教を信じ、又四海同胞主義に賛同せずして、獨逸主義を唱へたり。

4. Osnabrückische Geschichte. 1. Justus Møser.  
n. Patriotische Phantasieen.

2. Johann Georg Forster.

(2) ヨハン、ゲオルグ、フォルステル、千七百五十四年十一月廿六日ダシヒに近き、ナッセンフリーベンに生まる。父ヨハン、ラインホルドの威化により、自然科学に大なる趣味を有し、又人生を悠々として送る能はざる一種の悲觀的の性を有したり。フォルステルは、父に伴うて、南露西亞に旅行し、ザルガ川及び裏海の邊を過ぎ、首都聖彼得堡に行きて、冬を過ごし、此地の小學校に入れり。後祖先の國たる英吉利に遊びしが、麴麩の爲めに劇務に就き、青年の間を不愉快に送りたり。財政大に窮乏して、數年を過ぎしが、父ラインホルドは、冒險心に富み、かの有名なる航海者キャプテン、クックの第二回の世界周航に隨伴を乞へり。クック承諾して、ラインホルド父子は、千七百七十二年七月より、千七百七十五年の夏に至る三ヶ年間を以て世界を一週したり。此航海記は、フォルステルの筆に成りて、大に文壇に名を揚げたり。さて夥多の年月を航海に送りたるフォルステルは、漸くにして故郷の地に身を安んずるに至れり。カッセルの貴族専門學校は、フォルステルを聘して、博物學の教授を囑托せり。此校に教授たる

第四編 新舊國邊時代の文學(宗教改革より現代迄)  
(クワンテスマス及びロマンテイスムス、千七百四十八年より  
千八百四十八年迄。) ○クワンテスマス、第八卷、シルレル。

ハ. Reise um die Welt.  
ニ. Ansichten vom Niederrhein.

時フオルステルは、歴史家ヨハンテス、フオン、ミュレルと會合したり。フオルステルは、長く此校に留まることを好まずして、波蘭に行き、閑暇自適の生活を送らんと欲し、千七百八十四年、フルナの新設大學に轉任せり。此時夫人も同行せり。此夫人は、有名なるゲッティンゲン大學教授博言學者ハイチの娘なり。フオルステルは、自から好んで、任に赴きしも、波蘭人は彼の意に適せずして、カッセルに在りし時よりは、一府不愉快を感じたり。千七百八十八年の秋、マインツに移轉して、此地の選帝侯の圖書館員となれり。翌年佛國革命起る。フオルステルは、當時の獨逸の國狀を好まずして、別に一種の理想的社會を夢想したり。

かくフオルステルは、大に不平を抱きしが、貧困と苦痛とに迫まれ、身を寄するに母國なく、歸るに故郷なくして、千七百九十四年一月十二日巴里に客死せり。

フオルステルの著にて『世界周遊』(ハ) (ライゼ、ウム、ディエルト) 及び『下萊因の風光』(ニ) (アンジヒテン、フム、ニールデルライン) の二作は、散文として、文

## 3. Wilhelm von Humboldt.

辭流暢なるのみならず、科學上の價值も大なりとす。

(3) フルヘルム、フオン、フムボルト、千七百六十七年六月二十二日ボツダムに生まる。フムボルトは、博言學者ハイチの指導により希臘古典の研究をなせり。而してハイチの家にてフオルステルとも屢々會談したり。されどフムボルトは、ハイチよりは、ハルレ大學教授のフリードリヒ、アウグスト、ラルフと親密なる交際をなせり。フムボルトは、希臘語を世界言語中の最も完全なるものとなし、二十八歳の頃既に希詩人の作にて殆んど反覆せざるものなかりき。希詩中最も文辭の難を以て稱せらるるピンダール、エシクルスの作は、彼が最も愛讀したりしを見れば、フムボルトが、希文に精通せしことは、自から明かなり。ピンダールの十五の頌歌及びエシクルスの悲劇『アガメムノン』は、韻文を以て翻譯したり。フムボルトは、語學に非凡の才を有し、獨り古文のみならず、梵語、支那語、日本語等世界各國の語に通じたり。就中英、佛、西、伊語は、其得意とする所なりしと云ふ。

フムボルトは、シルレルと親交あり、遂にイエーナに移轉して、日常の交際を重ね、カント哲學の研究を共にせり。フムボルトは、又ケーデとも年久しく交遊をなせり。『ヘルマン、ウント、ドロテア』の審美的研究(ホ) (エステティツシェー、フェルズーヘー、ユーベル、ヘルマン、ウント、ドロテア)の著は、フムボルトが親友ゲーテの叙事詩に就き、審美的研究をなしたる論文なり。

フムボルトは、頗る多方面の學識を有し、獨り真理の討究者及び言語學者たるに止まらずして、外交的手腕を有したり。濃かなる情緒を以て文學者たりしフムボルトは、又冷かなる頭腦を以て、世間的の人なりき。フムボルトは、千七百九十七年、普魯西國より公使として羅馬に遣はされ、法王ピウス七世の厚遇を受けたり。伊太利より歸りて後は、柏林大學創設の事に盡力したり。普魯西國の進歩發達は、實に獨り宰相シタインの功に非らずして、フムボルトの力又大なりと云ふ可し。

かの有名なる維也納會議の節、フムボルトは、獨逸國の使節として赴

き、佛のタレイラン同ひ、埃相メッテルニヒと共に、外交家間に名聲高かりき。此後英京倫敦に公使となり、歸國の後、柏林に在りて、千八百十九年内務大臣の榮職に任ぜらる。職にあること久しからずして、フムボルトは、職を辭して野に下り、千八百三十五年、柏林に死せり。フムボルトの作には、『女友に與ふる書簡』(へ) (ブリーフ、アン、アイテ、フロインディン)最も著名なり。

(4) アレキサンデル、フォン、フムボルト、キルヘルムの弟、アレキサデル、フォン、フムボルトは、千七百六十九年九月十四日、柏林に生まる。兄と同じく、フランクフルト及びゲッティンゲン兩大學に修業せしが、後、非ルヘルム、フォルステルと共に、萊因河地方、和蘭、白耳義及び英國に旅行せり。フライベルクの鑛山専門學校に入り、エルテルの弟子となり、地質學及び植物學等の研究をなせり。後、哲時職にありしも、再び旅行を思ひ立ちて、瑞西、伊太利、佛蘭西等を週遊したり。

フムボルトは、巴里に在る時、エーメ、ボンブランと相識り、共に千七百

四九六  
九十九年南亞米利加に研究旁旅行をなせり、而して千八百四年迄エチ  
ズエラを始め、ペルー、リマ等を経て、遂に墨西哥を巡遊したり。千八百二  
年テムボラソコ山に登り、海拔五百九十三尺の高處に達せり。千八百九  
年より千八百二十七年までは、巴里に在りて、科學的研究をなせり。千八  
百二十九年露帝ニコラスの命を奉じて烏拉、亞爾泰の地方より裏海の  
邊へ旅行を企てたり。此後は専ら伯林に在りて、フリードリヒ、カールヘル  
ム三世及び四世の恩遇を蒙れり。千八百五十九年九十歳の高齡に達し  
全年五月六日に没す。

フムボルトは、死する前一年、一代の傑作『宇宙』(コスモス)を書き終  
れり。此書と『自然の觀想』(アングヒテン、デル、ナツール)の二作は、フム  
ボルトが獨逸學藝界に貢獻したる著述なり。フムボルトは廣く世界を  
週遊して、博覽洽聞且つ熱心に事物を討究せしを以て、自然科學の開祖  
と稱せらる。然かも其文辭流麗にして、自然を愛するの情自から其作中  
に現はる。

(5) レオポルド、フォン、ランケ、千七百九十五年十二月二十一日テュー  
リンゲンのキーヘに生まる。千八百九年ブフォルタの學校に入り、後萊府  
大學に遊び、ゴットフリート、ヘルマンの門に入りて、歴史、哲學及び言語學  
の研究をなせり。千八百二十五年以後伯林大學の歴史教授となりしが、  
千八百八十六年五月二十三日に死す。

ランケは、歴史家として、其名斯界に轟き、歴史研究に關して、一派を開  
きたる人にして、其見識の卓越せることは、世人一般の普ねく認むる所  
なり。ランケの著作は、其數多くして、悉く擧ぐる能はずと雖も、就中著名  
なるもの數種を列記せん。

一、『第十六及び十七世紀に於ける羅馬法王』(デイ、レミツシエン、ベ  
プステ、イム、ゼヒツエーント、ン、シ、フツエーント、ヤール、フン、デル  
ト)  
二、『宗教改革時代に於ける獨逸歴史』(ス) (デイ、ドイツ、チ、ゲシヒテ、イム、  
ツァイト、アル、テル、デル、レ、フォルマチオン)







カ  
フ  
ト  
ル  
ゲ  
シ  
ヒ  
テ  
イ  
ム  
ノ  
イ  
ン  
ツ  
エ  
ン  
テ  
ン  
ヤ  
ー  
ル  
フ  
ン  
デ  
ル  
ト

カ. Historische und Politische Aufsätze. 1. Deutsche Geschichte im 19. Jahrhundert.

ア. Französische Geschichte im 16- und 17. Jahrhundert. ヲ. Weltgeschichte. 6. Heinrich von Treitschke.

三、『特に十七世紀の英國史』(ル) (エングリッシュ、ゲシヒテ、フォルキーム  
リヒ、イム、ジーブツェンテン、ヤールフンデルト)。  
四、『十六及び十七世紀に於ける佛蘭西史』(オ) (フランツェジッシェ、ゲ  
シヒテ、イム、ゼヒツェンテン、ウント、ジーブツェンテン、ヤールフンデル  
ト)。

五、『世界史』(フ) (エルトゲシヒテ)

(6) ハインリヒ、フォン、トライチュケ、千八百三十四年九月五日ドレス  
デンに生まれ、千八百九十六年四月二十三日伯林に死す。トライチュケは  
ランケと共に、獨逸歴史家の第一流中の一人に數へられ、文才非常に優  
れ、且つ大に愛國の精神を發揮せり。著作中『歴史的及び政治的論文』(カ)  
(ヒストリッシェ、ウント、ポリティッシェ、アウフゼツツエ)及び『十九世紀獨逸  
史』(ドイツチエ、ゲシヒテ、イム、ノインツェンテン、ヤールフンデルト)等  
最も名あり。

第十章 ジアン、パウ、フリードリヒ、ヘルデルリン

ゲーテの「ゲッツ」、シルレルの「ロイベル」出て、武士氣質の小説續出し、「エルテル」、「キルヘルム、マイステル」等も、亦同種の小説流行の基を開けり。かくの如く小説夥多出づるに及んで、英のリチャードソン、フィールディング等の家庭小説スワフト、スターン、スモレット等の滑稽的の作も大に獨逸文壇に歡迎せらるゝに至れり。

滑稽小説家にて名を知られしは、リヒテンベルグ、ヒッベル等なり。就中ジアン、パウルの隨一となす。

(1) ジアン、パウルの「フリードリヒ、リヒテル」、リヒテルは小説家としては、一般にジアン、パウルとして知らる。千七百六十三年三月二十一日ウインジーデルに生まる。父は始め學校教師なりしが、後小村の牧師となりしかば、パウルは、幼時より孤獨生活をなし、社交的の事に携はらざりき。されば空想に耽けるの習慣は、早くより養成され、田園平穩の生活は、自から其作に反映したり。パウルは、ホーフの高等學校に在りし頃、才智群を抜いて、學術、詩文等長足の進歩をなせり。未だ學校を終へざるに、パウ

4. Grönländische Prozesse.  
11. Auswahl aus des Teufels Papieren.  
12. Die unsichtbare Rose.

ルは父を失ひ、家甚だ貧しくなりたれば、學事の傍ら教鞭を執りて、生計を資せんと欲し、萊府大學に入り、神學及び文學を學ばんとせり。されど事志と違ひ、學資を得る能はざりしかば、已むなくホーフに歸り、母と共に小なき活計を立てたり。外界よりは貧に迫られ、心中又大に安んぜざる所あつて、パウルは、辭を文筆に散ずるに至れり。

パウルが、模範と仰ぎしは、本國の作者にてはヒッペル、佛蘭西にては、ルソー、英吉利にては先きに擧げし、スキャット、フイルデング等なり。

パウルの著書は、小説其他の作を合して六十卷に達したり。文意多趣多様に於て、或は深き感想を叙し、或は富贍なる想像を述べ、加ふるに滑稽諷刺及び頓智を以てしたり。されど秀逸の作と共に、平凡の作も少からず。諷刺的の作にては、(イ)「グレーンレンデッシー、プロツェッサー」、(ロ)「アウスワール、アウス、デス、トイフェルス、バビレン」等あり。されどパウルが名を成せしは、寧ろ滑稽的の作ハ「デイ、ウンジヒトバーレ、ロージエ」にして、此書の文體は、パウル獨特の妙所を有せり。

二. Hesperus.  
H. Quintus Fixlein.

伯林の或書肆は、百ドカーテンの報酬を、パウルに與へて此作を出版したり。當時パウルはシッラルツバハの或學校の教師なりしが、原稿料を得るや、即夜急いで母の許に行けり。パウルが歸宅せし時、母は小なき部屋にて紡績を營みつゝありしと云ふ。

爾後パウルは、家計の難を免がれ、文壇に名聲を博し、萊府に遊び、イエーナに行き更にワイマールに至り、公爵の母堂アマールリエの宮に於て、シャロット、フォン、カルプ夫人と交はれり。

パウルは、ヘルデルの家にて、ホーランド及びクテールと交はりしも、ゲーテ及びシルレルとは、交遊することなかりき。パウルはワイマールを去りて後、バイロイトに住し、別に定職なく、公使館書記官の名譽職にありて、大僧正フォン、ダールベルグより年金を得て餘生を樂めり。

小説ニ「ヘスベルス」は、ビクトルと云へる男子と、クロテイルドと云へる女子との戀愛を叙するものにして、愛は社會のあらゆる障害を排除して、勝利を占むるものなる事を主眼として、描きたるなり。次に「ホーク

インツース、フィックムライン』出づ、これパウエルが假名の主人公を設けて、自己の経歴を叙したるものなり。趣向他の作に比して、餘程整然たるものにして、パウエルの作中自眉と稱せらる。(へ) 『ジーベンケース、一名ブルイメン、フルフト、ツント、ドルテンステツケ』の筋は次の如し、ジーベンケースと云ふ多感なる貧しき辯護士あり、妻を迎へしも、其性夫と氷炭相容れず、夫の性質を誤解し、單に室内の整理なすの外、更に趣味を有せざりき。夫ジーベンケースは、かゝる無風流なる妻と、長く同棲するを好まず、伴つて死し、葬送せしめて後、飄然故郷を去つて、フツツに在りし友人の許に行けり、而して此家にて思想裕かなる英國婦人と結婚せり。然るに又かの寡婦も、夫の死後更にステイフェルと呼ぶ男と結婚せりと云ふ。以上の作は、悉く自己の閱歷又は實際に經驗せしことを描きたるものにして、寫實的なり。然れども、パウエルは、一方に偏せず、獨り寫實主義を固執せずして、理想主義をも執れり。

(ト) 『カムバートナルタール』は、靈魂不滅の幽玄の理を説くものにして、

ル. Leben des Schulmeisters Wuz.  
オ. Leben Fibels.  
フ. Vorschule der Ästhetik.  
カ. Levana

ナ. Flegeljahre.  
リ. Titan.  
ヌ. Reise des Feldpredigers Schmelzle nach Flöz.

先きに挙げし作の如く、現世を樂むを以て、目的とするものとは大に其趣を異にせり。

寫實理想の兩傾向を合一して描ける作は、(チ) 『フレイゲルヤーレ』なり。これパウエル自身が傑作となせるものなり。此作にて、兩思想は、二人の兄弟によりて代表さる。兄のフルトは、一種の空想家にして、實世間と遠ざかりたる考を有せり。弟フルトは兄と異なり、實際家にして、全く世間的の人なり。此作と同じく寫實理想の兩傾向を描がける他の作は、(リ) 『ティーン』なり。

『クインツース、フィックムライン』に類する作にては、(ス) 『ライゼ、デス、フェルドブレデーゲルス、シメルツレ、ナハ、フレイツ、ル』、『レーベン、デス、シニールマイステルス、ツーツ』及び(オ) 『レベン、フィベルス』等あり。

最後の作は、小説に非ずして科學的のものなり。『審美學入門』(フ)、『フォーシニール、デル、エステーティック』は、古希の作を始め、シニクスピア及び獨逸文豪の作に關する文藝上の評論なり。又他に教育上の著作カ) 『レヴ

第四編 新南獨逸時代の文學(宗教改革より現代迄) (ク) フレシテス、スミス及びロ 五〇三  
マンデイスム、千七百四十八年より千八百四十八年迄) (オ) クラシチ  
スムス) 第十卷 ヴァン、メカル、フョードリヒ、ヘルデルリン